始

步兵第三聯隊歷史

東京　夙夜堂編纂

319-354

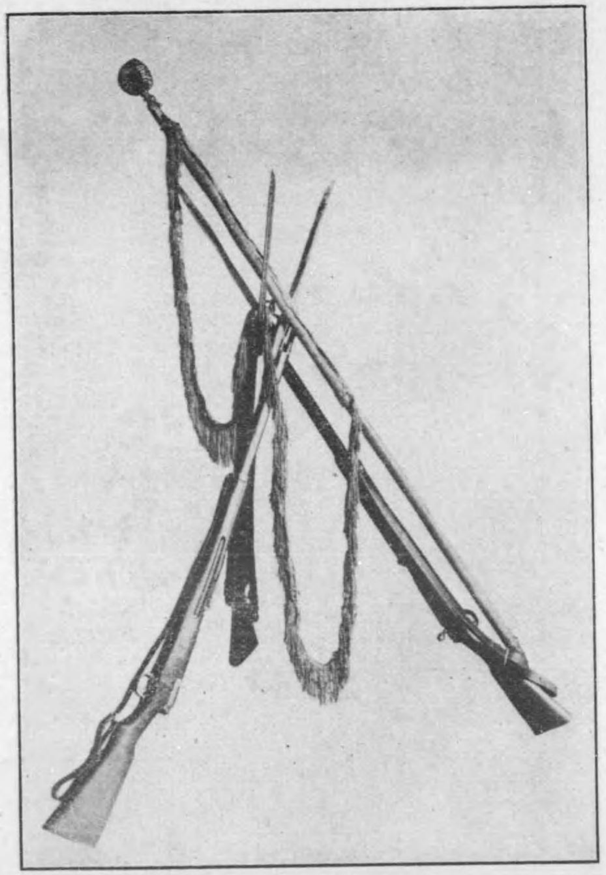
帝國圖書館藏

步兵第三聯隊歷史

東京　夙夜堂編纂

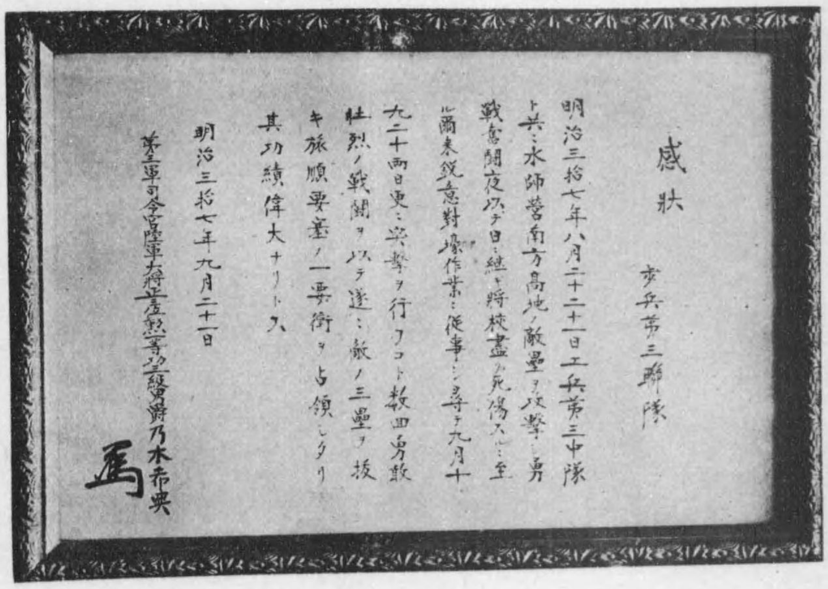
大正
4. 7. 23
内交

軍旗



步兵第三聯隊

感　　状



感狀

歩兵第三聯隊

明治三拾七年八月二十二日工兵第三中隊ト共ニ水師營南方高地ノ敵壘ヲ攻撃シ第一戦奮闘夜以テ日ニ継ト將校盡ク死傷スルニ至リ爾来殺意對壘作業ニ従事シ尋テ九月十九二十両日更ニ突撃ヲ行フヤト数回勇敢壯烈ノ戦闘ヲ以テ遂ニ敵ノ三壘ヲ抜キ旅順要塞ノ一要衝ヲ占領シタリ其功績偉大ナリト認ム

明治三拾七年九月二十一日

第三軍司令官陸軍大將子爵乃木希典

爲

歩兵第三聯隊長陸軍歩兵大佐山田良之助閣下題字

貫
誠
以
心

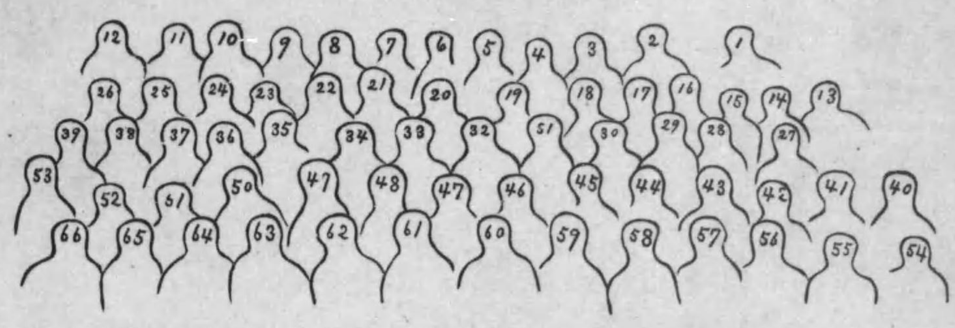
大正四年之春　南條良

日清戰役出征將校同相當官

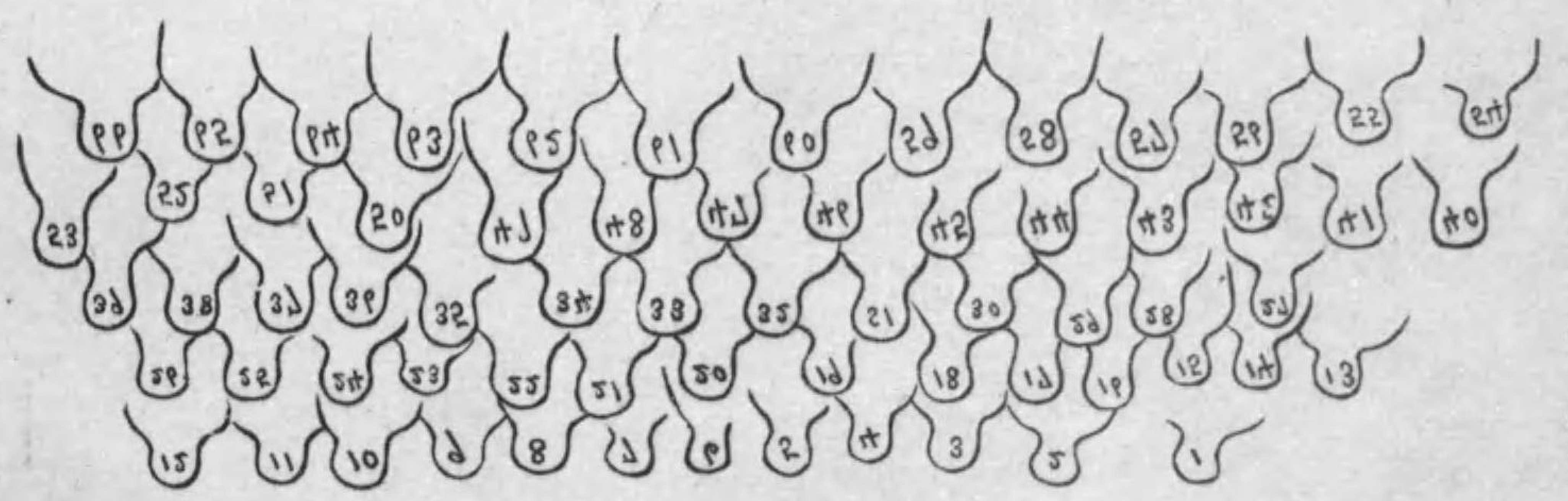
●戰死

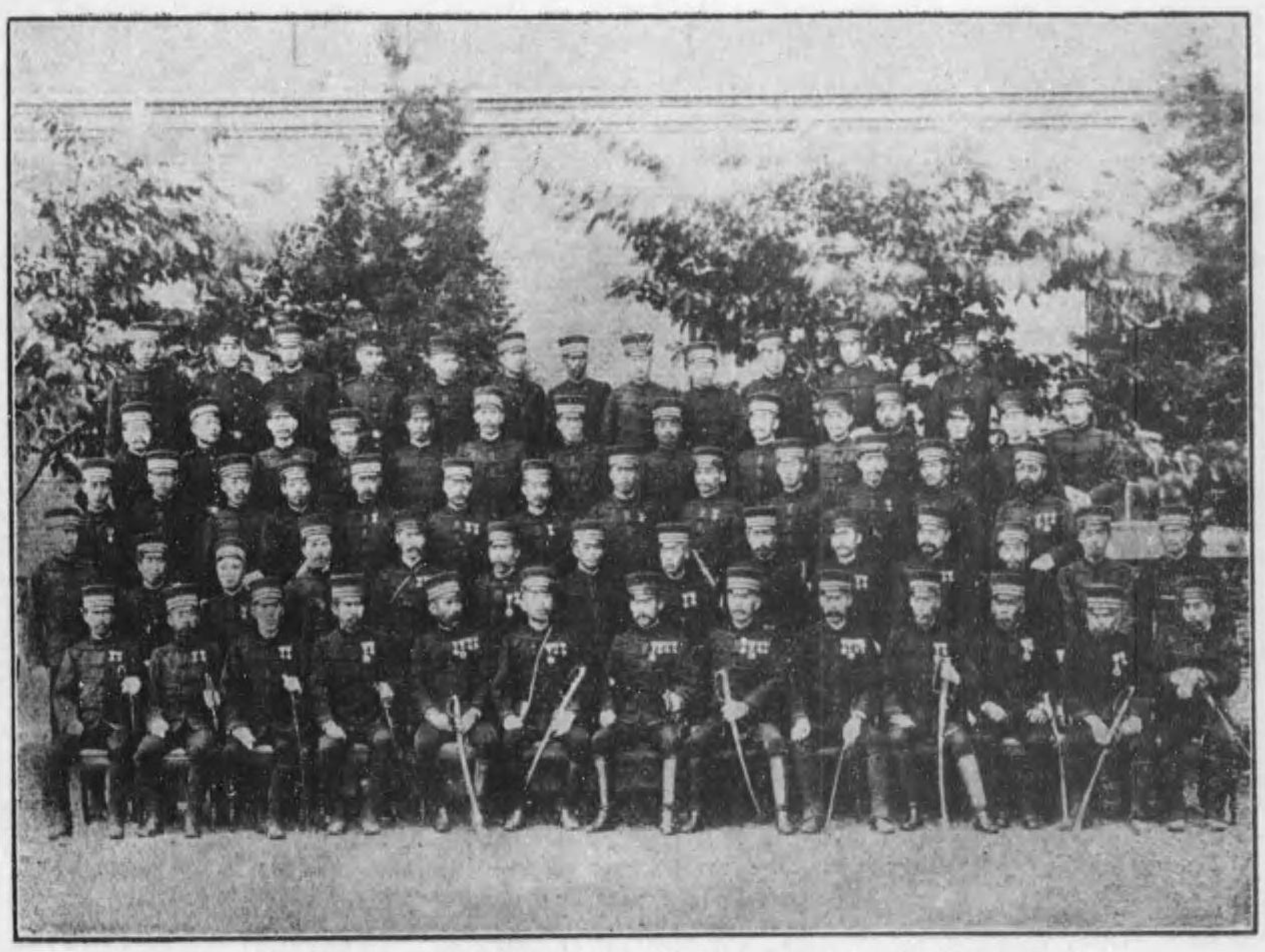
2・7・8・10・14は姓名不明に付追て取調ゝ要する分

1 見習士官 田村 豊
2 同 千葉 胤恭
3 同 弘中 藤吉
4 中尉 伊藤 祐武
5 少尉 高木 練吉
6 中尉 佐藤 房隆
7
8
9 騎兵見習士官 森 章三
10 見習士官 菱刈 隆
11 見習士官 茂木 幸
12 少尉 田原休次郎
13 少尉 城倉 通郎
14
15 見習士官 山越 莊三郎
16 少尉 杉本 次郎
17 三等軍醫 野口 詮太郎
18 中尉 岐部 熊夫
19 少尉 青木 敏行
20 同 牛圓重次郎
21 ●同 藤村 平三
22 中尉 松村 靖
23 少尉 早川新太郎
24 二等軍醫 坦田 修三
25 見習士官 金谷 範三
26 中尉 石井 眞吉
27 同 坂井 源八
28 少尉 土谷 正太
29 中尉 三谷仲之助
30 少尉 久田 國義
31 中尉 大島 新
32 同 渡邊小太郎
33 同 坂本 左狂
34 同 清水谷實英
35 同 高島 友武
36 同 小出 六郎
37 中尉 篠田 武政
38 同 植竹臨太郎
39 同 平岡 八郎
40 同 隈部 親信
41 同 花田仲之助
42 同 川畑 平吉
43 大尉 茂木 幸
44 同 豊崎 信
45 同 中野 能介
46 同 藤田禎次郎
47 中尉 松丸 熊夫
48 大尉 齋藤 榮將
49 一等軍醫 森波 繁
50 同
51 一等軍吏 長崎 綱一
52 中尉 馬場鉾之助
53 二等軍吏 梶塚鋪太郎
54 ●中尉 中萬 德次
55 大尉 江橋 亮
56 同 別役 貞顯
57 同 小野崎靜通
58 同 佐土原祐吉
59 少佐 大久保直道
60 中佐 木村 有恒
61 少佐 丸井 政亞
62 同 谷山 隆英
63 大尉 横山 軍治
64 同 吉松 直枝
65 同 肥後 正奇
66 同 江口 助六



日清戰役出征將校同相當官





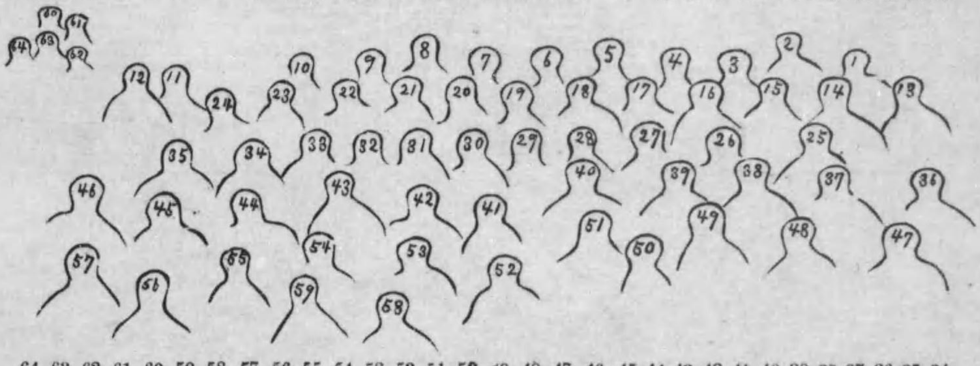
日清戰役出征將校同相當官寫眞

日露戰役出征將校同相當官

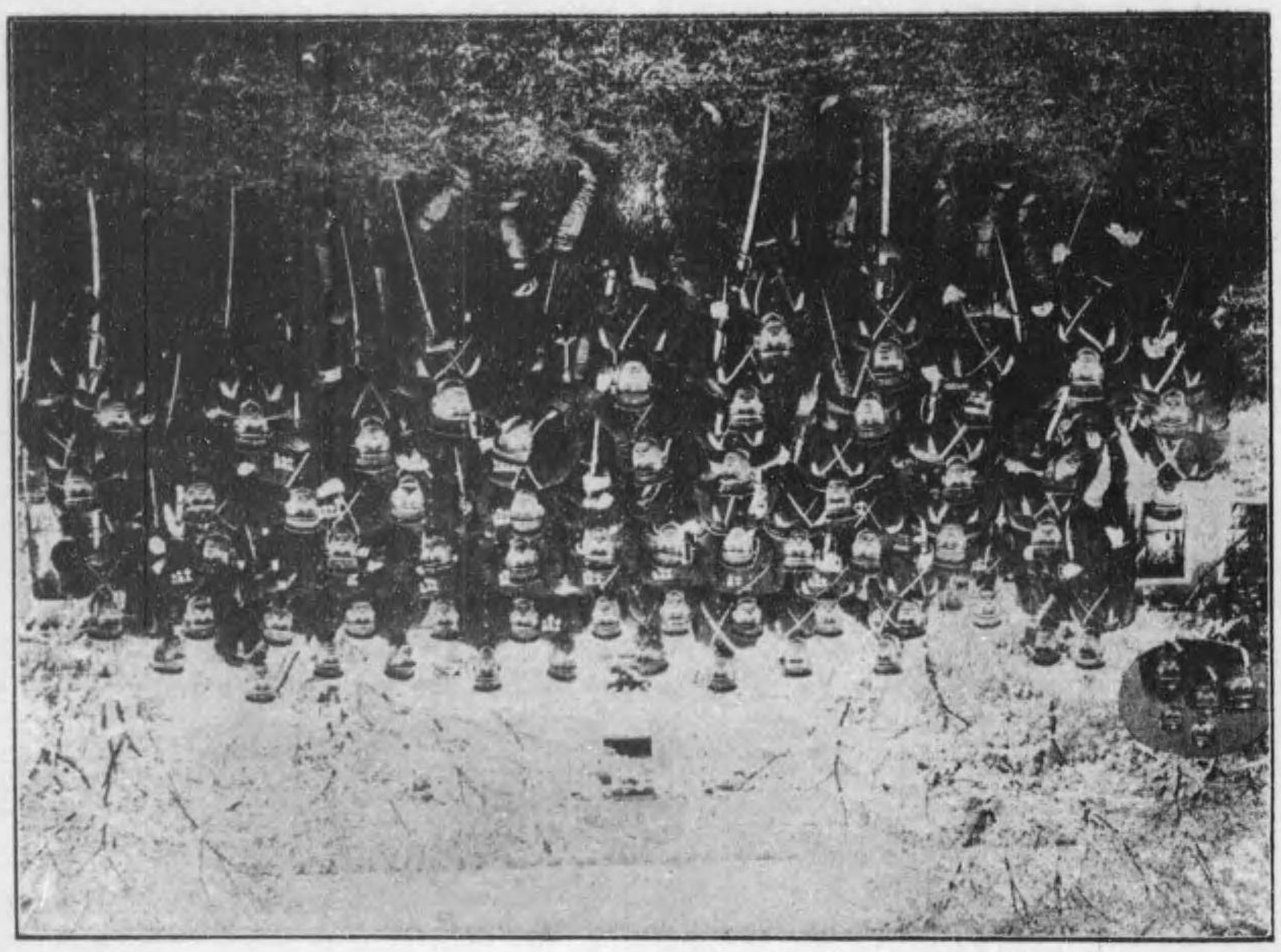
●戰死　○病死

26 49 姓名不明に付追て取調を要する分

1 ○少尉 相良四郎
2 同 古郡茂
3 砲兵中尉 近藤彦太郎
4 少尉 林林之助
5 中尉 平井豊吉
6 大尉 士谷正太
7 中尉 毛塚塊三
8 ●同 中岡保彦
9 少尉 平田清彦
10 同 今井與志雄
11 同 志村正吉
12 ●同 荒井桑八
13 中尉 大藤直一
14 一等軍醫 中川鑑次郎
15 大尉 蟻坂七五郎
16 少佐 鞍掛起英
17 ●同 高松公重
18 大佐 牛島本蕃
19 少佐 岡野敏
20 ●大尉 久田國久
21 同 寺崎由之助
22 ●同 河西修藏
23 ●同 川崎好次郎
24 一等主計 坂巻佐太郎
25 少尉 桑川淺一郎
26
27 大尉 三根昇一
28 ●同 弘中藤吉
29 中尉 篠崎宗吉
30 同 山本惠
31 少尉 櫨積堯晴
32 大尉 山本正能
33 一等軍醫 高井貞浚
34 ●中尉 久松雷三
35 ●同 大木仁三郎
36 少尉 武田秀壽
37 同・ 赤尾朗治
38 三等主計 向井佐之助
39 二等軍醫 西村文雄
40 三等軍醫 松本大多郎
41 中尉 鷹島只一
42 ●少尉 奥村莫邪
43 ●同 山口亨
44 ●中尉 眞々田彰義
45 同 西田友幸
46 少尉 新納豊二
47 ●同 村岡猪久治
48 ●同 石川佐一
49
50 大尉 守永彌惣次
51 ●中尉 山本和平
53 ●同 網野善一
53 ●少尉 寺田行藏
54 少尉 松尾理八
55 同 佐藤十郎
56 ●同 駒ヶ嶽忠雄
57 ●同 桑原矢六郎
58 ●中尉 水野正武
59 少尉 幸野清
60 中尉 佐藤一也
61 同 笠原民治郎
62 同 永田茂
63 少尉 清水喜重
64 ●同 瀧井貞介

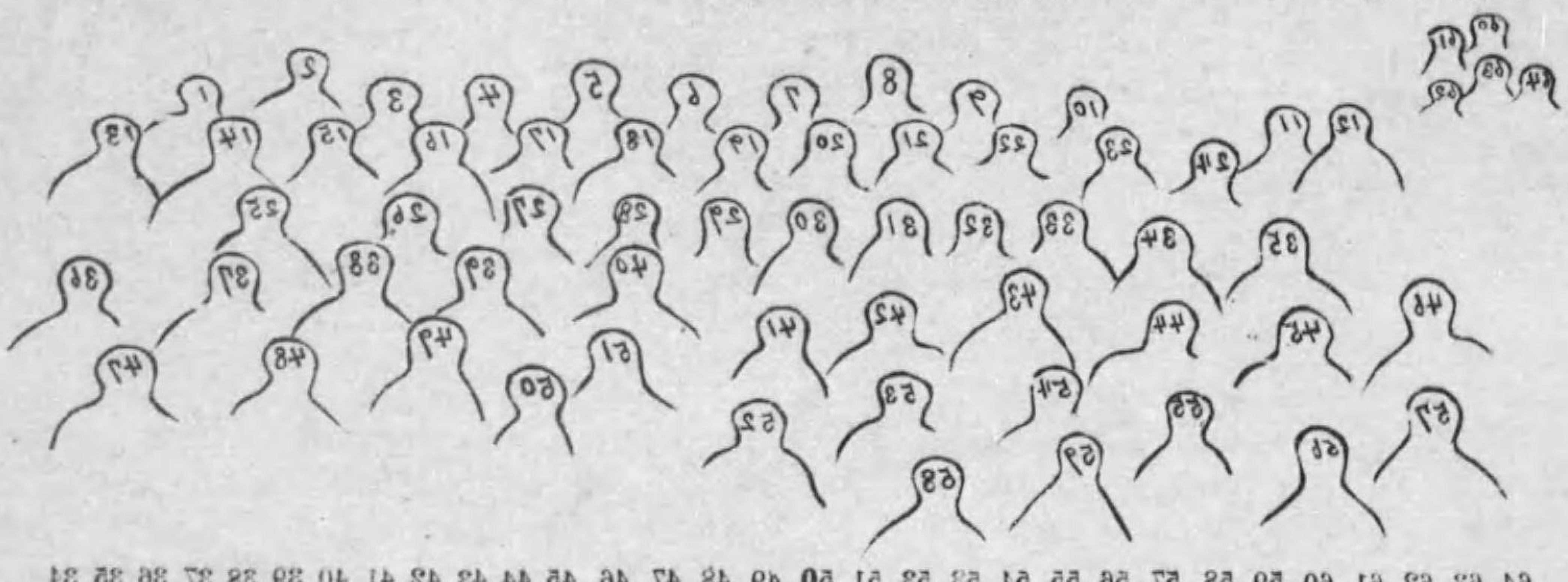


日露戰役出征將校同相當官寫眞



日露戰役出征將校同相當官

●戰死　○病死



1 ○少尉 相原四郎
2 同 古郡茂
3 砲兵中尉 近藤彥太郎
4 少尉 林林之助
5 中尉 平井番吉
6 大尉 土谷正太
7 中尉 毛塚熊三
8 ●同 中岡保彥
9 少尉 平田常彥
10 同 今井與志雄
11 同 志村正吉
12 ●同 荒井兼八
13 中尉 大藤直一
14 一等軍醫 中川鐵太郎
15 大尉 蟻坂七五郎
16 少佐 鞍掛起英
17 ●同 高松公重
18 大佐 牛島本藏
19 少佐 岡野毅
20 ●大尉 久田國久
21 同 寺崎由之助
22 ●同 河西儀藏
23 ●同 川崎好次郎
24 一等主計 坂巻佐太郎
25 少尉 桑川俊一郎
26
27 大尉 三根昇一
28 ●同 弘中藤吉
29 中尉 篠崎宗吉
30 同 山本惠
31 少尉 稻積幾晴
32 大尉 山本正能
33 一等軍醫 高井貞俊
34 ●中尉 久松晋三
35 ●同 大木仁三郎
36 少尉 武田秀壽
37 同・ 赤尾開治
38 三等主計 向井佐之助
39 二等軍醫 西村文雄
40 三等軍醫 松本大多郎
41 中尉 福島只一
42 ●少尉 奥村莫邪
43 ●同 山口享
44 ●中尉 眞々田彰義
45 同 西田友幸
46 少尉 新納豊二
47 ●同 村岡淸久治
48 ●同 石川佐一
49
50 大尉 安永彌懋夫
51 ●中尉 山本和平
52 ●同 綱野善一
53 ●少尉 寺田行藏
54 少尉 松尾建八
55 同 佐藤十郎
56 ●同 駒ヶ嶺忠雄
57 ●同 桑原矢六郎
58 ●中尉 水野正武
59 少尉 幸野淸
60 中尉 佐藤一也
61 同 笠原民治郎
62 同 永田茂
63 少尉 淸水喜重
64 ●同 櫻井夏介

26、49姓名不明ナルニ付追テ取調ヲ要スル分

故乃木大將遺墨爾靈山詩

勅諭

我國の軍隊は世々天皇の統率し給ふ所にそある昔神武天皇躬つから伴物部の兵ともを率ゐ中國のまつろはぬものともを討ち平け給ひ高御座に即かせられて天下しろしめし給ひしより二千五百有餘年を經ぬ此間世の樣の移り換るに隨ひて兵制の沿革も亦屢なりき古は天皇躬つから軍隊を率ゐ給ふ御制にて時ありては皇后皇太子の代らせ給ふこともありつれと大凡兵權を臣下に委ね給ふことはなかりき中世に至りて文武の制度皆唐國風に倣はせ給ひ六衛府を置き左右馬寮を建て防人なと設けられしかは兵制は整ひたれとも打繼ける昇平に狃れて朝廷の政務も漸文弱に流れけれは兵農おのつから二に分れ古

の徴兵はいつとなく壯兵の姿に變り遂に武士となり兵馬の權は一向に其武士ともの棟梁たる者に歸し世の亂と共に政治の大權も亦其手に落ち凡七百年の間武家の政治とはなりぬ世の樣の移り換りて斯なれるは人力もて挽回すへきにあらすとはいひなから且は我國体に戻り且は我祖宗の御制に背き奉り淺間しき次第なりき降りて弘化嘉永の頃より德川の幕府其政衰へ剩へ外國の事ども起りて其侮をも受けぬへき勢に迫りけれは朕か皇祖仁孝天皇皇考孝明天皇いたく宸襟を惱し給ひしこそ忝くも又惶けれ然るに朕幼くして天津日嗣を受けし初征夷大將軍其政權を返上し大名小名其版籍を奉還し年を經すして海内一統の世となり古の制度に復しぬ是文武の忠臣良弼ありて朕を輔翼せる功績なり歴世祖宗の專蒼生を憐み給ひし御遺澤

なりといへども併我臣民の其心に順逆の理を辨へ大義の重きを知れるか故にこそあれされは此時に於て兵制を更め我國の光を輝さんと思ひ此十五年か程に陸海軍の制をは今の樣に建定めぬ夫兵馬の大權は朕か統ふる所なれは其司々をこそ臣下には任すなれ其大綱は朕親之を攬り肯て臣下に委ぬへきものにあらす子々孫々に至るまて篤く斯旨を傳へ天子は文武の大權を掌握するの義を存して再中世以降の如き失体なからんことを望むなり朕は汝等軍人の大元帥なるそされは朕は汝等を股肱と頼み汝等は朕を頭首と仰きてそ其親は殊に深かるへき朕か國家を保護して上天の惠に應し祖宗の恩に報いまゐらする事を得るも得さるも汝等軍人か其職を盡すと盡さゝるとに由るそかし我國の稜威振はさることあらは汝等能く朕と其憂

を共にせよ我武維揚りて其榮を輝さは朕汝等と其譽を偕にすべし汝等皆其職を守り朕と一心になりて力を國家の保護に盡さは我國の蒼生は永く太平の福を受け我國の威烈は大に世界の光華ともなりぬへし朕斯も深く汝等軍人に望むなれは猶訓諭すへき事こそあれいてや之を左に述へむ

一軍人は忠節を盡すを本分とすへし凡生を我國に稟くるもの誰かは國に報ゆるの心なかるへき況して軍人たらん者は此心の固からては物の用に立ち得へしとも思はれす軍人にして報國の心堅固ならさるは如何程技藝に熟し學術に長するも猶偶人にひとしかるへし其隊伍も整ひ節制も正くとも忠節を存せさる軍隊は事に臨みて烏合の衆に同かるへし抑國家を保護し國權を維持するは兵力に在れは兵力の消長は是

國運の盛衰なることを辨へ世論に惑はす政治に拘らす只々一途に己か本分の忠節を守り義は山嶽よりも重く死は鴻毛よりも輕しと覺悟せよ其操を破りて不覺を取り汚名を受くるなかれ

一軍人は禮儀を正くすへし凡軍人には上元帥より下一卒に至るまて其間に官職の階級ありて統屬するのみならす同列同級とても停年に新舊あれは新任の者は舊任のものに服從すへきものそ下級のものは上官の命を承ること實は直に朕か命を承る義なりと心得よ己か隷屬する所にあらすとも上級の者は勿論停年の己より舊きものに對しては總へて敬禮を盡すへし又上級の者は下級のものに向ひ聊も輕侮驕傲の振舞あるへからす公務の爲に威嚴を主とする時は格別なれと

も其外は務めて懇に取扱ひ慈愛を專一と心掛け上下一致して王事に勤勞せよ若軍人たるものにして禮義を紊り上を敬はす下を惠ますして一致の和諧を失ひたらんには啻に軍隊の毒たるのみかは國家の爲にもゆるし難き罪人なるへし

一軍人は武勇を尚ふへし夫武勇は我國にては古よりいとも貴へる所なれは我國の臣民たらんもの武勇なくては叶ふまし況して軍人は戰に臨み敵に當るの職なれは片時も武勇を忘れてよかるへきかさはあれ武勇には大勇あり小勇ありて同からす血氣にはやり粗暴の振舞なとせんは武勇とは謂ひ難し軍人たらんものは常に能く義理を辨へ能く膽力を練り思慮を殫して事を謀るへし小敵たりとも侮らす大敵たりとも懼れす己か武職を盡さむこそ誠の大勇にはあれされは武勇

を尚ふものは常々人に接るには温和を第一とし諸人の愛敬を得むと心掛けよ由なき勇を好みて猛威を振ひたらは果は世人も忌嫌ひて豺狼なとの如く思ひなむ心すへきなにこそ

一軍人は信義を重んすへし凡信義を守ること常の道にはあれとわきて軍人は信義なくては一日も隊伍の中に交りてあらんこと難かるへし信とは己か言を踐行ひ義とは己か分を盡すをいふなりされは信義を盡さむと思はゝ始より其事の成し得へきか得へからさるかを審に思考すへし朧氣なる事を假初に諾ひてよしなき關係を結ひ後に至りて信義を立てんとすれは進退谷りて身の措き所に苦むことあり悔ゆとも其詮なし始に能々事の順逆を辨へ理非を考へ其言は所詮踐むへからすと知り其義はとても守るへからすと悟りなは速に

止るこそよけれ古より或は小節の信義を立てんとて大綱の順逆を誤り或は公道の理非に踏迷ひて私情の信義を守りあたら英雄豪傑ともか禍に遭ひ身を滅し屍の上の汚名を後世まで遺せること其例尠からぬものを深く警めてやはあるへき

一軍人は質素を旨とすへし凡質素を旨とせされは文弱に流れ輕薄に趨り驕奢華靡の風を好み遂には貪汚に陷りて志も無下に賤くなり節操も武勇も其甲斐なく世人に爪はしきせらるゝ迄に至りぬへし其身生涯の不幸なりといふも中々愚なり此風一たひ軍人の間に起りては彼の傳染病の如く蔓延し士風も兵氣も頓に衰へぬへきこと明なり朕深く之を懼れて曩に免黜條列を施行し畧此事を誡め置きつれと猶も其惡習

の出んことを憂ひて心安からねは故に又之を訓ふるそかし

汝等軍人ゆめ此訓誡を等閑にな思ひそ

右の五ケ條は軍人たらんもの暫も忽にすへからすさて之を行はんには一の誠心こそ大切なれ抑此五ケ條は我軍人の精神にして一の誠心は又五ケ條の精神なり心誠ならされは如何なる嘉言も善行も皆うはへの裝飾にて何の用にかは立つへき心たに誠あらは何事も成るものそかし況しては此五ケ條は天地の公道人倫の常經なり行ひ易く守り易し汝等軍人能く朕か訓に遵ひて此道を守り行ひ國に報ゆるの務を盡さは日本國の蒼生擧りて之を悅ひなん朕一人の懌のみならんや

明治十五年一月四日

御名御璽

勅諭

朕茲ニ大統ヲ嗣キ列聖ノ遺烈ヲ承ケ萬世一系ノ帝祚ヲ踐ムニ方リ特ニ朕カ親愛スル陸海軍人ニ告ク

惟フニ皇考曩ニ汝等ニ軍人ノ精神五箇條ヲ訓諭シ一誠以テ之ヲ貫ク可キヲ示シ給ヘリ汝等軍人ハ夙夜此聖訓ヲ奉體シ累次ノ征戰ヲ經國威ヲ宣揚シ皇基ヲ恢弘シ以テ曠古ノ偉績ヲ翼成シタリ

朕ハ朕カ統率スル所ノ軍隊ハ即チ是レ皇考ノ慈育愛撫シ給ヒタル所ノ軍隊ナルヲ念ヒ汝等軍人ノ忠勇ニ信倚シ皇考ノ遺業ヲ紹述シ倍々皇國ノ光威ヲ顯彰シ億兆ノ福祉ヲ增進セムコトヲ冀フ汝等軍人ハ皇考ノ遺訓ニ由リ以テ直ニ之ヲ朕カ躬ニ効シ愈々奉公ノ志ヲ鞏クシ思索ノ選ヲ愼ミ宇内ノ大勢ニ鑑ミ時世ノ進運ニ伴ヒ拮据勵精各其本分ヲ竭クシ朕カ股肱タルノ實ヲ擧ケ以テ皇謨ヲ扶翼セムコトヲ期セヨ

大正元年七月三十一日

御名御璽

軍人勅諭

兵隊は皇威を發揚し國家を保護する爲めに設け置かるゝものなれば此兵員に加る者は堅く左の條件を守り違背すべからず

第一條　誠心を本とし忠節を盡し不信不忠の所爲あるべからざる事

第二條　長上に敬禮を盡し等輩に信義を致し粗暴倨傲の所爲あるべからざる事

第三條　長上の命令は其事の如何を問はず直ちに之に服從し抗抵干犯の所爲あるべからざる事

第四條　膽勇を尙ぶ軍務に勉勵し恐怯柔懦の所爲あるべからざる事

第五條　血氣の小勇に誇り爭鬪を好み他人を侮慢し世人の厭忌を來す等の所爲あるべからざる事

第六條　道德を修め質素を主とし浮華文弱等に流るゝの所爲あるべからざる事

第七條　名譽を尚ひ廉耻を重んじ賤劣貪汚の所爲あるべからざる事

以上掲る所の外法律規則に違犯し罪を國家に得るに至ては父祖を辱しめ家聲を汚し醜を後世に遺す獨り其身現在の耻辱のみならざるなり況んや重罪の如きは各人天賦の公權をも剝奪せられ世に立ち人に接るも總て對等の權利を得ざるに至るに於てをや名譽を尚ひ廉耻を重んずるの軍人に在ては殊に戒慎を加へざるべからず就中陸軍刑法は軍隊の害を爲す者を懲す爲めに特に設けらるゝものたるを以て其刑亦頗る嚴なり軍人にして之を犯せば啻に本分を誤り軍隊の安寧を害するのみならず遂に世人の信用を損し陸軍の榮譽を汚す等其責更に重し平素自ら戒飭し決して遺犯すべからざるものなり

凡例

一本書は明治七年歩兵第三聯隊の設置より大正三年五月に至る歴史にして聯隊本部の藏書たる聯隊歴史、陣中日誌、下村中尉の編纂に係る聯隊歴史等に就き之を編纂せり

一本書中西南戰役、日露戰爭に係る記事は主として下村中尉の編纂に係る聯隊歴史に依り猶陣中日誌等を參照して之を編纂增補せり

一職員の任補は聯隊長に止め其他の任補並に叙勳及出張委員等の任命は一切省略せり是れ本書の浩瀚に渉るを以てなり讀者之を諒せよ

大正四年七月

編者識

歩兵第三聯隊歴史

目次

第一章　聯隊の編制並に軍旗授與……一
第二章　西南戰役……二
第一節　第一大隊戰歴……三
第二節　第四中隊戰歴……六
第三節　第三大隊戰歴……七
第三章　西南戰役後より日清戰役前に至る重要記事……一〇
第四章　日清戰役……一八
第一節　動員發令より三十里堡到着に到る……一八
第二節　金州の戰鬪……二四
第三節　双臺溝の戰鬪……二八
第四節　旅順口の戰鬪……四二

第五節　太平山の戰鬪……五〇
第六節　海城の戰鬪……五三
第七節　田庄臺の戰鬪……五八
第八節　凱旋……六八
第五章　日清戰役後より日露戰役前に至る重要記事……六九
第六章　日露戰役……七二
第一節　宣戰詔勅煥發より張家屯沿岸上陸に至る……七二
第二節　金州附近十三里臺の戰鬪……八五
第三節　南山の戰鬪……九一
第四節　旅順方面……一〇四
一双臺溝附近の戰鬪……一〇五
二對面溝南方高地附近の戰鬪……一〇七
一標高271高地方面　廿七日の情況……一〇七
二凹字形高地方面　廿七日の情況……一〇八

三標高271高地方面　廿八日の情況……一〇九
四凹字形高地方面　廿八日の情況……一一〇
第五節　火石稜北方高地戰鬪……一一二
第六節　第一回總攻擊……一一五
一水師營南方高地攻擊……一一六
二三里橋北方高地戰鬪……一二〇
第七節　第二回總攻擊……一二七
一水師營南方高地敵壘攻略……一二七
第八節　第三回總攻擊……一三三
第九節　總攻擊の再興……一三五
一三里橋北方高地攻略……一三六
二中村少將の決死隊……一三八
三第十一中隊標高二〇三高地附近の戰鬪……一四一
四旅順要塞の陷落及北進……一四三

第十節　奉天方面……一五二
一田義屯の戰鬪……一五四
二騎兵第二旅團支援歩兵第一大隊の情況……一五八
第十一節　奉天會戰後より凱旋に至る……一六三
第十二節　日露戰役後より大正三年五月に至る……一六六
創設以來の聯隊長……一七五
外征戰、病死將校の芳名……一七六
將校同相當官准士官職員表
下士職員表

歩兵第三聯隊歴史

夙夜堂編纂

第一章　聯隊の編制並に軍旗授與

明治七年十一月十三日歩兵第一、第二大隊を合し東京鎮臺歩兵第三聯隊を編制せらる第一大隊は東京に第二大隊は越後國新發田分營に駐屯す同日陸軍中佐中村尙武聯隊長に補せらる

十一月二十九日東京山下門内に聯隊本部を設置せらる

明治七年十二月十九日日比谷練兵場に於て明治天皇親臨軍旗授與の典を擧けさせ給ふ聯隊は盡く正裝して式場に整列聖鵠を奉迎す

陛下　親臨　玉座に着せらる此時聯隊は進て　玉座に近迫し敬禮を行ふ聯隊長中村尙武は旗手陸軍少尉七里千濤並に護衛下士二名兵卒三名を率ひて　御前に併列す

陛下　勅語を賜ふ

歩兵第三聯隊編制成るを告ぐ仍て今其隊旗一旒を授く汝軍人等協力同心して益々威武を宣揚し我帝國を保護せよ

聯隊長恐惶參拜奉答して曰く

謹て明勅を奉し臣等死力ヲ竭シ誓テ國家ヲ保護セン

次て軍旗を聯隊長に授け給ふ聯隊長之を旗手に授け終りて後聯隊は御前に於て分列式を行ひ軍旗授與の式を了る

明治八年二月二十五日　第三大隊を設置せられ聯隊の編制是に於て完備す第一大隊は高崎に第二大隊は新發田に第三大隊は東京山下門内に駐屯す四月十五日聯隊本部を高崎に移す

第二章　西南戰役

明治十年二月十九日鹿兒島賊徒征討の大詔を下賜せらる

同三月十三日賊軍の背後を衝くの目的を以て數個の鎮臺より派遣せる一大隊

乃至二大隊を以て別働第一第二、第三旅團を臨時集成せらるゝや當聯隊第一大隊第四中隊欠は征討軍別働第二旅團に同第四中隊は別働第三旅團に編入せらる

第三大隊は此より先三月二日征討軍第一旅團に編入せらる

同三月二十三日聯隊長中村尙武別働第三旅團參謀に任せらる

第二大隊は戰役間羽後國庄内不穩に付警戒すべき内訓を受け第一中隊を村上に分遣し四月九日歸還す五月二十二日神戸表へ出張著後大阪に滯在六月二十二日南海道警備として阿波國德島土佐國高知に出張十一月十日賊徒平定後新發田に歸營す

第一節　第一大隊戰歷

十年三月十八日少佐八木個作第一大隊を率ひ東京出發海路より神戸に着二十四日征討軍別働第二旅團に（司令長官陸軍少將山田顯義）編入せられ即日出帆二十五日八代南方日奈久沿岸に上陸し二十五日八代に抵る（旅團の任務は別働第一、第二、第三旅團と共に薩軍（第一第二旅團）と互に策應して速に熊本城の圍を解くにあり）に響背軍さなり福岡方面より南下する正面

同三月二十六日宮の原口を攻撃し激戰の後賊徒を追蹤し同夜小川附近に二十八日豐福村に戰ひ利あらす小川に退却す三十及三十一日松橋驛を攻撃し之を占領す

同四月七日平原村第一中隊の正面に賊徒來襲し苦戰慘鬪第二、第三中隊の來援に依り辛ふして之を撃退す十四日翻背軍は遂に熊本に聯絡し翌十五日正面軍熊本に入る二十日拂曉より旅團は別働第一、第三旅團と共に御船町を攻撃し激戰の後之を占領す

同五月十二日進て玖摩郡出羽村に十七日平瀬、桂、折立、諸村の賊徒を破る賊徒は已に矢部地方を退き主力を人吉附近に集結し兵器彈藥及輜重を準備し再擊を圖らんとするものゝ如く旅團は別働第四旅團と共に人吉を攻擊する目的を以て玖摩川以東の山地を分進す

同六月一日玖摩川を隔てゝ人吉を陷れ田代及大畑地方に十三日飯野附近に在る賊徒と戰ひ該地附近を奪取し牛馬糧食並に器具を獲取す十九、二十の兩日賊徒哨兵線を來襲せしも之を撃破せり

同七月十八日賊徒約二大隊城ケ岡第三中隊分遣哨に來襲衆寡懸絶苦戰頗る力め本隊よりの增援を得て辛ふして陣地を固守するを得たり

同七月二十二日旅團は野尻を攻撃し大隊は天ヶ谷附近の敵壘を奪取す二十八日野尻占領後第二旅團と連繫し野尻本道より紙屋を攻撃するや大隊は左翼先鋒となり繞回して漆野に向ひ賊背に出て劇戰數次賊壘を拔き進て綾町に至る次て旅團は第二旅團と更に一の瀨川に並進す

同八月二日高鍋攻撃の命あり第一、第三中隊は一の瀨川を隔てゝ戰ひ徒渉して賊壘を拔き尾擊して高鍋を占領す

旅團は七日鬼神野より突出し薄暮富高新町に入り五ヶ瀨右岸山間の捷經より延岡に突入す十五日長尾山を攻撃し大隊は小梓越附近に激戰の後長尾山を奪取す

旅團は首力を以て米良を經て鹿兒島に急行追擊す

同九月七日諸隊鹿兒島に集中す二十四日拂曉四時號砲三發我攻擊兵四面齊しく鹿兒島城山に進擊す第三中隊は突擊隊に第一、第二中隊は攻圍部隊にあり午後四時各隊同時に奮進縱横突擊遂に賊を岩崎谷に壓迫し賊軍の將卒復一人を餘さす

賊徒平定に付九月二十八日海路鹿兒島を發し凱旋す

第二節　第四中隊戰歷

十年三月三十日東京出發征討別働第三旅團（司令長官陸軍少將川路利良）に編入四月一日神戸出帆三日肥後國宇土郡浦戸に上陸し八代に抵る

同四月十四日八代附近稻荷山に戰ひ十五日宮地に向て前進し敵情偵察中賊徒と遭遇し激戰數刻兵を收めて歸る十七日櫻馬場の賊壘を攻撃し奮戰力鬪遂に之を奪取す

同五月九日屋敷野越籠瀨村の賊壘を攻撃し苦戰數次利あらすして水俣に退く

十八日征討軍第二旅團（司令長官陸軍少將三好重信）の隷下に入る三十日照角山攻撃に參加す中隊は右翼迂回兵の先鋒となり界目村に於て賊の哨兵と衝突し之を撃退して賊壘の背後に出て正面諸隊と共に進て之を奪取す

同六月一日進て人吉に入り十八日妨主石山に戰ひ十九日之を拔く

同七月一日坪屋村附近に二十日龍尾山に戰ふ此日中隊は先鋒となり拂曉龍尾山に肉迫し容易に之を破り尾撃して內山村に至る賊頑強力戰最も力め漸次勢威を增して逆撃し來り辛ふして其位置を固守す二十一日賊は我背後に出て難戰苦鬪漸くにして友軍の一隊來りて賊背に迫り之を夾撃して賊圍を脫するを得たり二十八日陣の尾山を攻撃し之を破り綾町に入る旅團は別働第二旅團と更に一の瀨川に並進す

同八月十五日長尾山に戰ひ二十三日延岡を發し七ツ山鬼神野大口宮の城を經て九月六日鹿兒島に集中す

同九月二十四日拂曉四時號砲三發我攻撃兵四面齊しく鹿兒島城山を攻撃し賊巢を殲滅す中隊より軍曹一名伍長二名兵卒十五名を選拔し突撃隊に編入し他は攻圍部隊に在り此日賊徒平定に付九月二十八日海路鹿兒島を發し凱旋す

第三節　第三大隊戰歷

十年二月二十八日東京出發海路より神戸着征討軍第一旅團（司令長官陸軍少將野津鎮雄）に編入即日出帆し三十日筑前國博多に上陸す（第一旅團、第二旅團は初め鹿兒島を衝くの目的なりしも時機既に遲れ路を博多に

取り進て其前面を擊つに決す

第三大隊（第三、第四中隊欠）は博多在總督本營の護衛に任す

同三月三日第一、第二中隊は筑後國府中に七日南關に達す同日命に依り第一中隊は山鹿に第二中隊は高瀨に至り同十一日新に南關に到着せし歩兵六大隊を以て第四旅團を編成せらるゝや該旅團に編入せらる

官軍は兵を二道に分ち一は木の葉より植木に一は飯倉より吉次越を經て小窪に出て進て熊本に相會せんとしたるも賊軍の抵抗頗る頑強にして容易に拔く能はず戰鬪激烈なる極め一進一退彼我の位置後忽晴息の間に變し賊壘を毀ち或は之を改築するの遑なし三月一日山縣參軍は山鹿方面を防勢地帶とし第一第二旅團新に編入せられたる第四旅團を以て攻擊第隊とし正面軍の兵力は四旅團と拔刀隊の巡査を算するに至れり

同三月十四日第二中隊は河部村（田原坂山鹿の中間にある間道）に進み同所を守備す第三中隊來り合す次て木の葉に進み原倉村（吉次越より高瀨に通ずる道路上）を守備す十五日横手山を攻擊し吉次越の敵を擊つ此日第四中隊は高瀨より來り合し田原、吉次越の敵と相對す

同三月二十日拂曉大風暴雨を冒し吉次田原の中間なる二俣口より猛烈に敵陣に突入し縱横奮鬪植木壘を奪取し向坂に達す此日第二中隊は先鋒隊（歩兵六中隊を以て編成す）に加はり司令官津田正芳の隷下に在りて奮戰力鬪す植木壘奪取後該驛を守備し

三月二十一日より四月十五日に亘り賊徒と對峙す

同四月十五日賊の壘を捨てゝ退くや之を追躡し十五日熊本に進み二十一日木山を略す賊は據を失し潰敗して日向に走る

同五月七日第一旅團に編入せらる（旅團は本營を三田井に置き右翼別働第二旅團と連繫し主として三田井及馬見原方面の鎭壓に任す）

同五月十五日大隊は矢部濱町に達し熊本鎭臺兵に代り該所を守備す二十四日馬見原附近男山宮の原村の賊徒を鎭壓す

同六月二十五日七ッ山に進み該所を守備す

同八月十六、十七日旅團は第二旅團と共に可愛岳の山腹に戰ひ更に相呼應して前進し可愛岳の絕頂を經て其東北麓に亘る間を占領す十八日西郷以下一群數百人可愛岳の中央絕壁を攀ち第一、第二旅團の中間を突破し直に兩旅團司令部を衝き夜暗に乘して祝子川村方向に逸走せり此來襲に第四中隊の一小隊漸く戰鬪に參與するを得たり

脫賊鹿兒島に向ふや官軍諸隊は漸次南下し第一旅團は肥後方面の警戒に任せ

同年九月二十四日賊徒平定するに及ひ十月十四日鹿兒島を出帆同十八日東京に凱旋し十二月一日聯隊本部は高崎に歸着す

第三章　西南戰役後より日清戰役前に至る重要記事

明治十一年一月十七日聯隊長陸軍中佐中村尙武職し陸軍中佐山地元治聯隊長に補せらる

同年十一月十七日越後信濃等に行軍第二大隊は越後長岡に會す軍旗を樹て諸隊を集合せしは聯隊編成以來之を嚆矢とす

同年十一月二十一日聯隊長陸軍中佐山地元治陸軍大佐に任せらる同十二月十八日聯隊長陸軍大佐山地元治轉職し陸軍中佐山澤靜吾聯隊長に補せらる

明治十四年七月二十八日車駕山形秋田二縣御巡行の途次東京鎭臺及近衛諸隊と共に下野國宇都宮近傍に大演習をなす

明治十六年二月五日聯隊長陸軍大佐山澤靜吾轉職し同月六日陸軍中佐古川氏潔聯隊長に補せらる

明治十七年五月二十八日命あり聯隊本部を高崎より東京に移し臭服橋內麹町區永樂町二ノ二に駐屯す

同年六月二日第一大隊は步兵第十五聯隊に第二大隊は仙臺鎭臺步兵第十六聯隊に分屬し新に第一大隊第二大隊を設置せらる

同年十月四日埼玉縣秩父郡暴徒鎭壓として第三大隊該地方へ出張す

明治十八年五月九日聯隊長步兵中佐古川氏潔轉職し步兵中佐大寺安純聯隊長に補せらる

同年八月一日酒保を設置す

明治十九年一月十九日參謀本部長熾仁親王殿下營內を巡視せらる依て操練技術を閲覽に供す

同年二月十四日麵麭食試驗の爲め第一大隊第一中隊をして經驗せしむ同月十六日麵包製造所を設立す

同年六月五日將校集會所落成す此日聯隊將校一同祝宴を張る司令官三浦陸軍

中將閣下旅團長山地陸軍少將閣下及近衛歩兵第一聯隊長大迫陸軍歩兵中佐鎮臺歩兵第二聯隊長内藤陸軍歩兵中佐等宴席に會せらる

同年七月一日新式歩兵操典を實行す

同年七月三日隊中一般三食共麵包食に換え是れより先き第一大隊第一中隊を經驗隊として麵包食を實施せしに尚ほ經驗する所あるを以て春季演習以還該大隊一同麵包食に換へ尋て第二大隊及第三大隊も亦改食す之に因て隊中一の粒食する者なきに至る

同年八月三日動員計畫及被服細則を定む

明治二十年六月一日擔架術の教科を始む

同年十二月二十二日車駕親臨將校集會所へ御小休の後兵舍並に中隊運動銃劍術器械體操等の御親閲ありたり同日天顔麗はしく御盃を聯隊長に賜はる

同年十二月二十八日天皇　皇后兩陛下の尊影を當隊將校に賜はる

明治二十一年二月四日森文部大臣臨營修業兵の演習を見る

同年十一月十六日聯隊長陸軍歩兵中佐大寺安純陸軍歩兵大佐に任せらる

明治二十二年一月二十三日聯隊は麻布區龍土町新築兵營に移轉す

同年同年二月十五日軍隊内務書細則を定む

同年二月二十六日天皇陸下當兵營新築落成に付　御臨幸可被爲在之處雨天なるを以て御延引被仰出此日三好師團長より各旅團長並府下近衛師團監軍部士官學校、戸山學校監督部、軍醫部、獸醫部の上長官當營建築に盡力せる陣營經理部の官吏等へ營内に於て立食の饗延を開かる當隊將校並　相當官之に加はる

同年五月九日前米國公使「ハッパート」同國東洋艦隊司令官「ヘルクナブ」部下將校と共に來營大山陸軍大臣三好師團長來會せらる中隊運動柔軟體操、銃劍術等の試合を施行す

同年三月三十日聯隊被服委員細則を改正す

同年五月二十五日天皇陸下御臨幸師團長三好陸軍中將新築營の構造を奏上せらる兵舍並操練器械體操を　天覽に供す此日近衛聯隊長以上監軍各兵監以上、師團副官以上、士官學校、戸山學校長、監督軍醫監、獸醫監等來營、正午將校團より立食を供す

同年六月六日聯隊縫工教科書心得を定む同十日中隊縫工を養生する爲め各中隊より兵卒一名宛を撰拔し小被服及外套等の裁縫に從事せしむ

同年九月二日聯隊長陸軍歩兵大佐大寺安純第二師團參謀長に補せられ陸軍歩兵中佐眞鍋斌聯隊長に補せらる

明治二十三年一月二十七日聯隊被服事務細則を改正す

同年四月十一日呼集規則を改正す

同年六月十六日酒保細則を改正す

同年八月十八日第七中隊本年度獨立射擊優等に付賞狀を授與す

同年九月九日酒保評議員を置く

同年十月七日聯隊被服事務細則を改正す同十三日特命檢閲を受く

明治二十四年一月七日將校集會所條規を改正す同二十一日將校集會所に於て見習士官並豫備見習士官撰擧の爲め始めて將校會議を開く

同年四月十七日將校射擊研究會規約を設け毎月一回射擊を爲すことを定む

同年五月十七日呼集及不時點呼概則並に非常通報心得を改正す同二十六日酒保細則を改正す

同年六月八日　皇太子殿下行啓被爲在將校並に相當官へ拜謁を賜はり軍歌、演習、狹搾射擊、銃劍術、角力、機械體操、記號演習等御覽被遊暫時將校集會所に於て御休憩の後御機嫌麗はしく還御被爲在たり

同年七月二日桂中將來營兵、舍倉庫等一覽せられ退營に臨み當隊下士以下にして疎虞懈怠過失の犯行の爲め懲罰の處分を受け目下服罰中の者を赦免せられん事を請求せらる依て之を赦す同十七日屢々法則を犯し訓誡を加ふるも改悛を表せす軍紀風紀を害するの虞ある者あるときは之を訓誡し正道に皈せしむる目的を以て特別監視教育規則を設け同十七日聯隊長を東宮御所へ召させられ奥東宮武官長より過る六月八日　皇太子殿下其隊へ行啓被爲在候紀念として殿下より將校團へ銀盃一個賜はる旨を傳へられ其御盃を聯隊長に下附せらる

同年八月十六日明治十九年以來經驗の爲め麵麭食を爲し來りしが本日より常食に復す

同年十一月二十日聯隊長陸軍歩兵中佐眞鍋斌陸軍歩兵大佐に任し轉職陸軍歩

兵中佐松村務本聯隊長に補せらる

明治二十六年五月二日乙種演習の爲め歩兵第三聯隊へ第二充員召集を令せらる同七日出師の諸準備完結し翌八日出戰集合の命あり同日第一師團長閣下は青山練兵場に於て閲兵並に分列式を施行せらる右畢りたる後同閣下の講評

今回此演習を施行するに付ては召集事務細則の規定日淺き故最初聊か結果の如何を氣遣ふたる所ありしか今日此良結果を得て大に滿足せり

二日聯隊長が充員命令を受けたる時部下に下したる命令は適當にして其實施方も亦適當なり其他日々の諸行務は平素準備規定せる所に從ひ靜粛且つ順序能く施行せり

然れ共余の目擊したる所並に今日までに得たる報告に依れば現行の規定中研究を遂げたる上改良を計るべき事項多きを信ず聯隊長に於ても亦予と同樣の感あらん此等の事項に付ては充分審査を遂げたる上後日指示する所あるべし

閲兵並に分列共に甚た良し隊中には一兩日前入隊したる豫備の下士卒あるを以中隊面にて分列を行ふ事に付ては聊か氣遣ふたる所ありたれ共今日の良結

果を得て甚だ滿足せり

右の講評畢りたる後第一師團將校一般へ下されたる告示

特に謹て臨場部下一統に告く

本演習施行の事恐れ多くも天聽に達し去る四日忝くも本職を宮中に召させられ親しく本演習の顚末を御尋遊はされ爾後毎日侍從を差遣せられ又御尋の趣を以て侍從長より本職に書面を送りしこと一日三四回の多きに及びしことあり

陛下の斯くも深く軍事に大御心を懸けさせ給ふことの宏大なる次第を諸子に告んとする本職の心情を言ひ現はさんとするに臨み情塵りて辭なし唯感泣するのみ諸子之を銘心せよ

明治二十七年三月九日　聖上皇后兩陛下御結婚滿二十五年御祝典を被爲擧文武諸官を宮中に被召宴を賜ふ同日午後一時三十分　御出門　兩陛下青山練兵場へ臨御觀兵式被爲行四時十分式全く終り　還御被爲在たり

同年六月十二日聯隊長松村務本陸軍歩兵大佐に任せらる

第四章　日清戰役

第一節　動員發令より三十里堡到着に到る

明治二十七年八月三十日午前九時三十分第一師團第一充員及後備軍召集を令せらる右命令の聯隊に達せしは午前十時十五分なり時に恰も各大隊は傳染病豫防の爲め各地に轉在中なり則第一大隊は二子、溝口附近第二大隊は上丸子及小杉附近第三大隊は習志野より歸京の途にあるを以て急使を發し各隊に歸營を命せり午後五時四十五分第一第二大隊の各中隊も悉く歸營せり

午後三時四十五分第一着の應募者豫備一等卒藤田一太郎を初とし午後十一時迄に到着せし人員以下二十名當日各大隊各地に轉在せしと雖も豫め期せしと又所要の人員を殘留し在りしを以て充員事務に差支を生せしことなし

同年八月三十一日午前七時三十分より師團司令部構内に於て兵器を支給し午後一時三十分終る午前八時現役下士以下百九十七名を補充大隊に轉せしむ午前

十一時第三大隊は悉皆習志野より歸營す

聯隊長歩兵大佐松村務本本職を免し第六師團參謀長に補せられ歩兵中佐木村有恒當聯隊長に補せらる

現役上等兵四十三名を二等軍曹に任し下士の補缺を爲す

豫備役兵教育に付旅團長西少將より其方針を示さる

本日は充員到着者最も多く午後十一時迄に殆んと要員の十分の八を得たり

同年九月一日午前七時三十分より師團司令部構内彈藥庫に於て彈藥を分配し同十時三十分終る午後二時隊屬輜重下士以下宿舍（青山玉窕寺）狹隘なりしを以て第一大隊附屬の者を笄町大安寺に移す現役及豫備見習士官を士官勤務に服せしむ午後十一時迄に充員到着者殆んと要員の十分の九に達す

同年九月二日午前七時五十分より聯隊に於ける充員受領事務を補充大隊に委し要員不足は該大隊より補缺することゝ爲す午前十時補充大隊用乘馬三頭を受領す午後五時二十分刀劍の附及を命す

同年九月三日正午十二時乘馬充足し午後八時四十分本科各員の要員充足す補

充大隊は現役豫備役合して下士以下五百三十三人のみ但豫備役員は本日より入營す昨今親族朋友の在營者に面會を乞ふ者甚た多く爲めに面會所を別に設くるに至れり

同年九月五日午後一時刀劍の附及終る

同年九月七日午前十時五十分充員完結を師團司令部に報告す

動員の景況　充員事務は甚た靜肅にして順序正く實施し得たり武器、被服、裝具等も兼て計畫の通り實施し得たり充員者は士氣旺盛にして進んで戰役に服するを好むの概あり目下國民の意氣亦盛にして充員兵の其鄕を出るに臨んてや全郡或は全村のもの其日の業を廢し擧て其行を送り且又從軍者家族保護法を確定する等一々明記すへからす惹て一二の戰役忌避者をも見さるに至れり馬匹は概ね骨格能く强壯にして肥滿せり

同年九月八日午前九時より青山練兵場に於て武裝檢査を爲し終て分列式を施行せり午後三時補充大隊充員完結す武裝檢査及分列式には師團長山地中將も臨場せられたり

同年九月九日午前十時三十分馬匹の裝鐵完結す

同年九月十一日召集兵の演習は日々隨分劇しく行ひ行軍等最も多く靴は皆新品を給したれとも靴傷患者は殆んと絶無と云も可なり昨年迄は久しく軍隊を離れたる豫備役兵は常に靴傷を患ふる者夥多なるに拘らす本年斯の如き所のものは當隊に於て孜々として靴傷豫防法を研究し漸次經驗を重ね本年に至り普通の靴墨を廢し一種の靴油を用ひ靴の構造を修正し且又靴は從來各自用ひたるものより半文或は一文大なるものを穿たしめ靴傷の豫防と冬季に際し防寒を顧慮したる等幹部各兵共に力を盡して靴傷の豫防に從事せし結果なるへし

操典改正前の豫備役兵多きに拘らす教育の結果至極善良にして殊に野外に於ける展開集合の動作等最も迅速嚴肅なるに至れり未た召集後日尙ほ淺きか爲めに新操典を盡く熟得せさる處あるを免れすと雖も今日に於ては已に充分の戰鬪力を有す

同年九月十二日補充大隊長歩兵少佐山村政久本職を免し麻布大隊區司令官歩兵少佐加島義質補充大隊長に三等軍醫信原儀六同青木虎一當聯隊附に補せら

る

同年九月十三日大本營を廣島に進めさせらるゝか爲め午前七時　御發輦新橋より瀛車行の旨仰出さる聯隊は午前五時三十分營内整列櫻田門外に於て堵列奉送す

同年九月十五日午前七時營内整列大山街道を進み三軒茶屋より目黒不動を經て終日行軍を施行す

同年九月十七日朝鮮國平壤に於て我軍大捷約二萬の敵兵を殲滅し兵器糧食を獲ること夥多我軍の死傷は僅々三百人を超へすと野津中將より情報師團司令部より受領す

同年九月二十日午後八時十分左の第一師團作戰命令を受領す

一當師團は海外に出戰の目的を以て來る二十二日より廣島に向て鐵送行軍をなす

二各部隊鐵道輸送の細部は別表に記す

三予は二十五日夜十二時青山發の瀛車にて廣島に到る

同年九月二十一日午前七時營内整列目黒村中延村を經て池上村に向て戰鬪行軍を施行す午前七時三十分左の公報に接す

十六日我艦隊九隻は支那艦隊十一隻と黃海の北邊海洋島附近に於て開戰敵艦三隻を沈沒せしめ一隻を燒夷す

見習士官金谷範三同菱川刈隆同山越莊三郎同田村豊陸軍歩兵少尉に任し當聯隊附に補せらる

同年九月二十三日風紀衛兵を補充大隊より出務せしむ朝食より糧食は總て商人をして請負はしむ

同年九月二十四日午後六時より夜十二時迄の瀛車にて聯隊本部及第一、第二大隊の設營隊を廣島に向て出發せしむ

同年九月二十五日午前二時青山發の瀛車にて第三大隊設營隊を先發せしむ

午前十時三十分各大隊を營内に整列せしめ左の告示を口達す

大日本帝國歩兵第二旅團は不日我誕生したる日本帝國を去て遠く萬里の波濤を渡り我帝國の公敵たる清國に進入せんとす今や軍人たるもの各其本分を盡

し遠かに敵軍を擊亡ぼし我國威を宇宙に輝かし日本帝國をして一日も早く太平の世に復し上は　天皇陛下の叡慮を安し奉り下は國民一般を安堵せしめんことを歩兵第二旅團長陸軍少將西寛二郎か切に企望する處なり依て部下一同共に大に奮勵誓て此企望を果さんことを期す一死以て國家に盡せよ

同年九月二十六日去る二十日の第一師團作戰命令に依り聯隊は正午より夜十二時迄の間に於て青山停車場を發し廣島に向て出發す其將校姓名左の如し

聯隊本部		
聯隊長　歩兵中佐　木村有恒		
大尉　小野崎靜通		
少尉　高木棟吉		

第一大隊		第一中隊	
大隊長　中尉	丸井直亞	中隊長　中尉	横山軍治
一等軍醫	坂井源八	中隊長　中尉	高島友武
二等軍醫	坦崎綱一	少尉	松浦靖
一等軍吏	長田修三	少尉	田原休次郎
少佐	青木虎一		
第二大隊		第五中隊	
大隊長　中尉	谷山隆亞	中隊長　中尉	江口助六
一等軍醫	千葉胤恭	中隊長　中尉	大島新六
二等軍吏	梶塚鋪太郎	少尉	山本豐
一等軍吏	齋藤ヶ將	少尉	田村
少佐	信原儀六		
第三大隊		第九中隊	
大隊長　中尉	大久保直道	中隊長　中尉	茂木幸
三等軍醫	花田仲之助	中隊長　中尉	藤田次郎
三等軍吏	今村菊治郎	少尉	城倉道
一等軍醫	森波繁	少尉	石川玄三郎
少佐	野口詮太郎		

第二中隊		第三中隊		第四中隊	
中隊長　少尉	川畑平吉	中隊長　少尉	佐藤祐吉	中隊長　少尉	吉松直枝
中隊長　少尉	清水谷實英	中隊長　中尉	伊藤祐次	中隊長　少尉	佐藤房隆
大尉	弘中廉吉	大尉	中島德武	大尉	早川新太郎
大尉	寺岡清一郎	大尉	藤村平三	大尉	森章
		別役良顯		肥後正奇	
		長場鉾之助		渡邊小太郎	
		植木臨太郎		中圓重次郎	
		久田國義		金谷範三	
第六中隊		第七中隊		第八中隊	
中隊長　少尉	三谷仲之助	中隊長　少尉	隈部親信	中隊長　少尉	越智二郎
中隊長　少尉	野崎能介	中隊長　少尉	山莊	中隊長　少尉	見習士官
大尉	川畑平吉	大尉	清水谷實英	大尉	清水谷實英
大尉	清水谷實英	大尉	弘中廉吉	大尉	弘中廉吉
		別役良顯		肥後正奇	
		長場鉾之助		渡邊小太郎	
		植木臨太郎		中圓重次郎	
		久田國義		金谷範三	
第十中隊		第十一中隊		第十二中隊	
大隊長　少尉	大野能介	大隊長　少尉	江口助六	大隊長　少尉	豐川信
中隊長　少尉	三谷仲之助	中隊長　少尉	平岡八郎	中隊長　少尉	松丸熊夫
大尉	清水谷實英	大尉	青木敏行	大尉	岐部良吉
大尉	寺岡清一郎	大尉	篠田武	大尉	石井熊吉
		別役良顯		肥後正奇	
		長場鉾之助		渡邊小太郎	
		植木臨太郎		中圓重次郎	
		久田國義		金谷範三	

鐵道輸送區分左の如し

第一中隊　正午發

第一大隊本部及第二、第三中隊同大隊大行李酒保　午後二時發

第四中隊及第一大隊の小行李第二大隊（第七中隊・第八中隊欠）　午後六時發

聯隊本部第二大隊本部及第七中隊

第二大隊の大小行李並酒保　午後八時發

第八、第九、第十中隊及第三大隊の小行李　午後十時發
第三大隊（第九第十中隊除ク）及同大行李並酒保　午後十二時發
途中給養停車場　沼津　濱松　名古屋　馬場　神戸　岡山
同年九月二十八日午後八時十一分迄に各中隊悉皆廣島に到着す
沿道各地の人民は各戸に旭章旗を掲げたり又田間の農夫と雖も軍用列車の來るに逢へは鋤犂を止めて萬歳を烈呼する等誠意を盡して從軍者を歡待せり就中赤十字社員は各地の團體を以て本社を代表して送るを見る又豊橋岡崎に於ては烟火を打上け名古屋にては送くるに酒を以てし神戸にては市中音樂を奏して軍隊を慰めたり給養停車場の給養は人馬共充分なり
豫備見習士官森章三陸軍歩兵少尉に任せらる
同年九月二十九日午前八時左の命令を受領す
一、當師團は廣島市及其附近に舍營す　二、給養は宿舍給養甲種　三、各部隊の宿舍地區は別に示す　四、廣島市の舍營司令官は歩兵第十五聯隊長とす　五、予は堀川町吉田方に舍營す

同年十月八日歩兵少尉高木錬吉同青木敏行同牛圓重二郎陸軍歩兵中尉に任せらる
同年十月九日午後二時三十分大本營に於て第一師團將校に拜謁仰付らる
午後二時三十分より將官は御倍食上長官以下は泉邸に於て立食を賜ふ立食の際内に義勇外に大本營の銘ある盃を下賜せらる
同年十月十日携帶天幕を第一第二大隊へ各九百六十二枚つゝ第三大隊へ九百六十一村田銃防熱器を各大隊へ一千個つゝを支給す
同年十月十三日第一師團命令（午前十時發）あり其要旨左の如し
一、第一軍に對する敵は鴨綠江右岸に在て防禦工事中なり又敵は主として盛京直隷兩省の兵力を增加しつゝあるものゝ如し敵の北洋艦隊の一部は旅順口に於て艦隊を修理しつゝあり又其南洋艦隊は臺灣附近に出沒するものゝ如し
二、我第一軍は先頭を以て義州に達せり其任務は我第二軍今後の作戰を間接に助くる爲め其前面の敵を牽制するに在り我連合艦隊は目下根據地を大同江に有し今後我第二軍の作戰を助くる筈なり　三、第二軍の任務は旅順

半島を占領するに在り此軍に屬する混成第十二旅團は目下仁川附近に在り

四、當師團の内左に記する各部隊は第一回揚陸隊となり來る十五日宇品港より搭船をなすの準備をなし在るへし

一、第一師團司令部　一、歩兵第一旅團及歩兵第二聯隊　一、騎兵第一中隊

一、砲兵第三大隊　一、工兵大隊　一、衛生隊

此諸隊の搭船指揮官は歩兵第一旅團長とす

五、師團の殘りの部隊の配船表及其乗船時日は逐て之を示す　六、各輸送船は搭載終る毎に大同江魚隠洞附近に向て出帆すへし　七、予は横濱丸に乗り第一回揚陸隊と共に大洞江に向て出帆す午後一時西棘兵場に於て增加彈藥各三十發つゝ午後二時同所に於て增加携帶口糧各人二日分馬糧二日分宛を受領し各大隊に分配す

同年十月十四日第一師團命令（十三日午後四時發）あり其要旨左の如し

一、第一回揚陸諸隊は來る十五日、十六日の兩日午前五時三十分より宇品港に於て搭船を始むへし　二、第二回揚陸諸隊は十七日、十八日の午前五時三十分より搭船を始むへし　三、第一回揚陸後に在りては陸軍少將西寛二郎第二回揚陸後に在りては陸軍砲兵大佐和田由舊の指揮を受くへし

各部隊乗船日割左の如し

日	船名	午前	
十八日	神州丸	歩兵第三聯隊本部第一大隊	指揮官　木村中佐
	東洋丸	歩兵第三聯隊第二大隊	同　谷山中佐
	高砂丸	歩兵第二旅團司令部歩兵第三聯隊第九第十第十一中隊第一野戰病院	同　茂木大尉
	兵庫丸	歩兵第三聯隊第三大隊本部第十二中隊	同　大久保少佐

右監督將校武藤海軍大尉

日	船名	午後	
十八日	新潟丸	輜重兵第一大隊本部及第一糧食縱列第三砲兵彈藥縱列	指揮官　岸少佐
	小樽丸	第二糧食縱列	同　水野大尉

右監督將校松村海軍少尉

同年十月十八日各中隊は廣島に於ける宿營地を發し午前八時迄に宇品港に集合し聯隊本部及第一大隊は神州丸に第二大隊は東洋丸に第九、第十、第十一中隊は高砂丸に第三大隊本部及第十二中隊は兵庫丸に搭船し午前十一時人馬の搭載全く終り舳艫相啣て宇品港を出帆す

同年十月十九日午前六時五十分門司港を發し八時十分六連島に停止午前十時五十分同所を發し玄海灘を航行す同二十日六連島出發以來航海を續行し黄海に入れり同二十一日午後六時大東灣に拔錨す同二十二日午前四時三十分大東灣を發し零時二十分大同江魚隱洞に到着し投錨す東洋、高砂、兵庫の諸船亦同時に到着す

同年十月二十四日軍司令官の命令に接す其要旨左の如し

鴨綠江右岸に在て我第一軍に對する敵の兵力は約二萬にして頻りに防禦及冬營の作業をなしつゝ在るものゝ如し、金州及旅順附近の敵の兵力は一萬二千に下らす、我第二軍は旅順半島占領の目的を達せんか爲め花園河口海岸に揚陸し先つ金州に向て前進せんとす、第一師團の任務は揚陸點を以て休戰の假根據地となし速に前進して先つ金州及大連灣附近を占領するにあり、軍司令部は第二回揚陸隊と共に進發の筈なり

同年十月二十五日正午大同江を出帆花園河口に向て進航す同二十六日午前四時三十分花園河口に着し揚陸點を距る約四海里の海上に投錨し午前六時より各運送船每に附屬の端艇を以て揚陸を始む此日揚陸せし各隊は花園河口東北方畑地に露營せり同二十七日正午十二時迄に人員の揚陸は完結せり各隊は昨日の位置に露營す又各大隊より將校斥候を出し敵情、地形、道路及露營地を偵察せしむ同二十八日午前四時第六中隊を劉家屯方向に派遣し大孤山方位の敵情を偵察せしむ又第七中隊を後蕭家堡子に出し午前七時より集積場輜重の監視に任す午前十時各隊は集合地を發し午後一時後蕭家堡子に到着す

同年十月二十九日本日軍司令官より左の訓令あり

誡諭　敵國に於て軍隊必需の物件を徵發するは列國公認の權利なりと雖も此權利は軍隊に屬するものにして一個人之を私すべきものに非す軍隊の徵發は自ら規定のあるあり且つ軍隊の威嚴を損ふもの不法掠奪より甚しきものなし故に規

定に依るの外は何人たりとも猥りに敵地住民の物件を押收するは嚴禁する處とす若し夫れ軍隊必要の外に於て一個人單獨に物件を要求する處あらは其所有者又は保管人と協議を以て買收すへし決して强迫を行ふへからす犯す者は必す罰あり

右軍人單屬は勿論各從軍者に至る迄嚴に遵守すへし

同年十月三十一日此日旅團の命令に依り山越少尉をして金家哨右卓より浮子窩に至る道路の偵察山本中尉をして後蕭家堡子より金家哨に至る道路の偵察を施行せしむ

同年十一月五日午前六時三十分昨夜の命令に由り李家屯西方畑地に集合し師團本隊となり同七時三十分同地を發し午前十一時衣家店に到着す正午十二時衣家店に於て左の旅團長口演命令あり

敵は現在の位地より五千米突に在て金州街道を守備しあり師團本隊の內予の指揮に屬せられたる諸隊は今より復州街道に向て前進する準備をなすへし師團長は此部隊の本隊たる先頭に在るに由り出發後は師團長の命令あるべし予は師團長の位地に在り

軍隊區分

前衛

司令官步兵第二聯隊長伊瀨地大佐

步兵第二聯隊第二大隊騎兵六騎を附す)

本隊

步兵第二聯隊第三第一大隊

野戰砲兵第一聯隊(一大隊缺く)

步兵第三聯隊

衛生隊半部

正午十二時右の命令に由り衣家店を發し午後六時三十里堡に到着同地に露營す給養は携帶口糧を用ひたり

午後十時三十里堡に於て師團命令あり其要旨左の如し

三十里堡附近に在る諸隊は明日午前七時までに師團司令部の位地に集合すへ

第二節　金州の戰鬪

同年十一月六日午前四時三十分三十里堡の露營地を發す

午前六時三十分乾家子に集合す此時東方已に白し大和尙山方位に砲聲を聞く

同六時五十分聯隊は師團長の直轄となり第一第二大隊の順序を以て同地を發す

同年十一月七日午前七時四十五分十三里臺子南方の高地に開進す前方約四千米突の處に敵の旗幟を望む此時砲聲漸く盛なり午前九時二十分三里庄東方高地の東背に達し第二大隊の先頭を以て縱隊橫隊に集合す同地は約二千米突を隔てゝ金州城を瞰制すへし此時に於て我砲兵已に砲戰を開き砲聲交々起り彈丸互に交る

午前九時三十分師團長の口演命令あり左の如し

其聯隊は金州城に關せす城の西方より旅順方向に於ける敵の退路に迫擊すへし

右の命令に由り第二第一大隊を展開し其第一第八中隊を以て豫備隊となし疾駈して砲兵陣地の左側を下り金州城の西方より繞出し敵の退路に迫る此時に方り敗走する敵兵三々伍々一退一止射擊亦熾なり午前十時三十五分敵の砲兵は蘇家屯の高地に步兵約百名は砲兵營及其附近高地に據り我に向て抵抗をなす我隊の先頭は奮進して該敵兵を擊退し遂に進て第一大隊は旅順街道上第二大隊は蘇家屯東方の高地を占領し旅順方向に對し警戒す時に午前十一時三十分なり午後零時四十分敵の砲兵旅順街道上難過嶺に據り再ひ砲擊を始む此時旅團長より左の口演命令あり

難過嶺に砲兵あり其聯隊は直に前進して之を占領すへし

右の命令に由り午後一時第一大隊をして難過嶺に向ひ前進せしむ此時第二大隊は蘇家屯南方畑地に集合せり午後二時四十分第一大隊は該砲兵を擊退して難過嶺及淮軍懷字營を占領す午後一時五十分難過嶺に於て支隊命令を受く其要旨左の如し

今朝攻擊したる敵は旅順及大連灣方向に敗走せり、支隊は今夜蘇家屯附近に村

落露營をなす、前衛は毛家營に村落露營をなし其西方高地を占領し之を警戒し大連灣方向を搜索すへし給養は携帶口糧とす

軍隊區分

前衛

司令官歩兵第三聯隊長木村中佐　歩兵第三聯隊第一大隊騎兵五騎を附す
山砲兵第五中隊

本隊

殘餘の諸隊

右に由り第一大隊長に第二第三中隊を附し前哨に任し和尙島に通する道路より金州灣間を警戒し左翼第一旅團と連絡を取り前哨本隊は毛家營に村落露營をなす午前八時頃前哨の後方及前衛本隊の宿營地毛家營附近に敵の歩騎二十乃至三十の數群屢々東方より來襲し警戒線内を騷擾す前哨本隊及前衛本隊は之を擊攘し敵を斃すこと夥し

此前哨線と前衛本隊との中間に來り衝突したる敵兵は我兵難過嶺を占領し老龍島方向に斥候を差遣せるを以和尙島の敵兵旅順への退路を顧慮し夜中金州灣の方向に逸出する爲ならん前哨をして大連灣方向の第一旅團の連絡を取らんと欲せしも同地附近には多くの敵兵あり屢斥候を差遣するも終に果さず當日第一旅團は未た大連灣方向に出てさりし今夜老龍島及大連灣の砲臺より支隊宿營地に向て屢砲彈を注きしも損害なし本日各兵の志氣熾にして數日の急行軍に由り疲勞加はるにも拘らす戰鬪中其動作敏捷活潑にして克く其本分を盡したり就中彈雨飛下の間に從容として號令を遵奉せしは初陣のことゝして實に意想外に出でたり

負傷人員　下士以下四名　射耗彈藥員數　小銃彈七千百發

戰利品は甚た多く悉く列擧する能はさるも約左の如し

小銃五十挺　山野砲十門　小銃彈藥各種二萬三千二百二十九個
馬匹十五頭　白米九十俵　兵營二ヶ所　俘虜下士卒三十八人

同年十一月八日午後八時師團命令あり其要旨は左の如し

昨日を以て大連灣は我有に歸す柳樹屯を以て第二軍の根據地とす

師團は金州附近に滯在す　以下略す

同年十一月十四日枝隊の前衛となり旅順街道前各鎭堡に移陣す同日より第一大隊は分遣枝隊として營城子附近に屯在し旅順方向の搜索に任せらる同十五日第三大隊本部及第九第十中隊は揚陸點の守備を解かれ枝隊本隊に追及し南三十里堡に於て旅團長の指揮に屬す

第三節　双臺溝ノ戰鬪

同年十一月十八日午前八時前哨を撤し八時三十分陳家屯北方旅順街道上に集合す此時旅團長は當聯隊長に本隊の指揮を委し前進しある第一大隊の位地に到る午前九時三十分前衛諸隊は集合地を出發す午前十一時十分前木城駅南方約二千米突の地に於て大休止を爲し午食を爲さしめ正午に到れは前衛本隊を率ひ出發すへき旨を大久保少佐に命し聯隊長は副官を隨ひ營城子に到るに前兵たる第一大隊は既に此地に在らす前進せし景況にして且つ双臺溝方位に方り銃聲を聞く此時前衛本隊も亦前進し來るに依り歩度を速めて行進中傳令騎兵の報に接す

曰く第一大隊は双臺溝南方に於て戰鬪中なりと

尙續々傳令騎兵來り旅團長の命令を傳ふ

曰く第一大隊は双臺溝南方に於て苦戰中なり襲歩を以て双臺溝高地に開進せよと

此に於て駈歩を以て双臺溝高地に達す時に午後二時三十分なり此れより先き第一大隊は今朝双臺溝西南方高地に達し前哨配布中遠く旅順方向に派遣せられたる軍の獨立騎兵大隊長秋山少佐の依頼に由り後方掩護の爲め大隊長丸井少佐は第三中隊を火伯村に進ましめたり此中隊及騎兵は該地附近に於て敵の歩騎約二千人に遇遭し敵の包圍する處となり頗る苦戰第一大隊長は第二第四中隊をして之を赴援せしむ此時敵兵益々加はり尙包圍せられんとするの景況あるに由り最後の第一中隊は敵の右側面に向ひたり其援護に由り漸く高地上に退却するを得たり敵兵は行進を止む此時恰も前衛諸隊は該高地に到着せり時に午後二時三十分なり同時に旅團長より更に敵を追擊すへき命を受け依て第三大隊を第一線とし第二大隊を以て豫備隊となし双臺溝高地道路の左方より敵の右側背に迫ら

んとするの目的を以て運動を起す既にして敵は漸次退却して我第一線土城子附近に到る頃二千米突以上を距れたり此時口演命令あり

其隊は追擊を止め双臺溝に來て宿營すへしと時に午後四時三十分なり

双臺溝高地に歸着後受領せし命令あり其要旨左の如し

今朝來襲來の敵は旅順の方向に退却せり師團本隊は本夜營城子附近に宿泊す

前衛は双臺溝附近に宿營せんとする、歩兵第三聯隊第一大隊は双臺溝高地を占領し旅順に對し警戒すへし、警急集合所は双臺溝西南方高地、給養は部隊自炊とす

右の命令に由り第一大隊を前哨に任し聯隊本部及第二大隊は双臺溝に村落露營をなし第三大隊は前哨線後方高地に露營をなせり本日第三中隊は午前十時三十分双臺溝高地の東方約二千五百米突の地點に達せしとき敵の騎兵約三十歩兵約一小隊に遭遇し我騎兵は徒歩戰をなすとの報を騎兵大隊長より得たるに由り第三中隊長佐土原大尉は該地點に背嚢を卸さしめ輕裝し駈歩を以て騎兵の所在地に到り救戰に盡力す爾後漸次敵の兵力增加して該中隊は退却せさるへからさるの已むを得さるの場合に至りしを以て遂に背嚢を聚收せすして退却し背嚢は敵手に委せしめたり

第一大隊死傷及射耗彈藥左の如し

戰死　歩兵大尉中萬德次　下士二名　兵卒九名　駄馬二頭

負傷　歩兵中尉三谷仲之助　下士三名　兵卒二十八名

射耗彈藥　六千七十發　損失彈藥　三千發

本日の戰死者は大概首級を敵手に奪ひ去られたり加旃其屍體の各部に刀痕を印し殘忍の極實に見るものをして心に堪へさらしむ此に於て我兵頗る憤慨せり

第二第三大隊は營城子西端に於て駈歩に徒りしより双臺溝高地迄の距離約八吉羅に亘りしを以て本隊の後尾に在りし中隊の如きは甚た疲勞せり隨て多くの落伍者を出すに至れり

同年十一月十九日李家屯北方高地を占領し旅順方面の警戒に任し同地に露營す同二十日第十一中隊は揚陸點の守備を解かれ本隊に復歸せり同夜聯隊は石嘴子に露營す

第四節　旅順口の戰鬪

同年十一月二十一日昨日の命令に由り聯隊長は第一線諸隊を指揮して午前一時石嘴子の露營地を發す行進中は唯に道路の辨すへからさるのみならす斷崖あり絶壁あり山砲兵の通過に適當の道路を索むる爲め前進を遲緩し漸く午前五時十五分潘家屯に達し聯隊長は更に先行し地形と方位に由り椅子山を索むるも之を得す尙士官斥候を派遣し前方を搜らしむるに一の海岸砲臺ありと山越少尉より報す時に拂曉天將に明んとす自ら進て一山の鞍部に至り該砲臺を望見するに之れ即ち我攻擊目標たる椅子山砲臺にして我か位地は彼の西北側方約二千米突の處なり此に於て第一線は鞍部の背面に開進を命したり時に六時四十分なり此時旅團長の命令あり左の如し

歩兵第一大隊は今より前進して敵の左翼端に在る砲壘を攻擊せよ

歩兵第二第三大隊は第一大隊の左翼の高地に展開して掩護射擊をなせ

歩兵第二聯隊第三大隊を豫備隊となし

砲兵は開進地の西方高地に砲列を布く

右の命令に由り午前六時五十分第一大隊は運動を起し第三第二大隊亦之に次く午前七時第一大隊は椅子山砲臺高地の西南端に展開し直に第三砲臺に向ふ第一第二中隊は第一線第三第四中隊は第二線たり午前七時十分第三大隊は第一大隊の左翼に列し第三砲臺西方約千二百米突に在る高地に展開し一齊射擊を開始す第九第十中隊は第一線第十一中隊は第二線たり午前七時十三分第一線兩大隊の間隔に向つて第二大隊を增加す第五第八中隊は第一線第六第七中隊は第二線たり己にして第一第二大隊の間隔漸次擴開するに至るを以て第六第七中隊を第一大隊の左翼に增加す午前七時十五分第一大隊は進て第三砲臺を距る二百米突に近接し第二第三大隊も該砲臺を距る事約五百米突の地點に在り午前七時二十分第一大隊は全中隊を第一線に增加し砲臺を距る七八十米突に迫る此時敵彈の被害甚た多し聯隊長は其攻擊を速かにするの被害を減するに優るものなしと決心し七時二十三分各大隊をして突擊を準備せしめ七時三十分諸隊齊しく襲歩に徒る第一大隊先つ砲臺の左側より攀登し第二第三大隊亦到る而して第一第二砲

臺にありし敵兵は既に第三砲臺の陷落に遭ひ倉皇退走す故に第二第一砲臺は逐次之を占領せり

午前七時三十分追擊射擊を終り第一大隊は第二砲臺に集合第三大隊は八時十五分追擊射擊を終り同所及其附近に集合す此時第十中隊は第一砲臺を下り前軍左營に進入し殘敵十數名を擊殺して之を占領す聯隊長は第三砲臺を陷るときより第五中隊をして第一砲臺東南方高地第八中隊をして其東方高地を占領し兩中隊をして老虎山砲臺毅軍操練場及其附近各地の兵營にある敵に對して應戰せしめたり午前八時四十分第二大隊長は第六第七中隊を率ひ第一砲臺の東側より毅軍操練場の方向に至らんとせしに老虎山、黃金山及松樹山等の砲臺より砲丸齊しく注き前進する能はす此時敵の騎兵約百騎武庫方向より毅軍操練場に突擊し來る又步兵二百餘前軍左營に向て襲來せんとするに會し其騎兵は第二第三大隊の爲に擊退せられ步兵は高地にありし第五第八中隊の側射に遇ひ前進する能はす遂に我右側に繞回せり故に第八中隊の一部を以て之か警戒に任したり

午前九時我軍の砲擊に由り松樹山砲臺の威力頓に衰耗す第三大隊は前軍左營中に在り第六第七中隊は兵營の前面に散開し毅軍操練場東南側に在る橋梁近傍の敵と交戰す九時四十分更に進て武庫及兵營二個を略取す第三大隊は尙進て旅順街に進入せんとせしも黃金山の砲擊未た衰へざるを以て遂に果さす

午前九時三十分より十一時三十分に亘り當方面の戰勢頓に弛み老虎山、松樹山及白玉山の砲臺等次て默すと雖も此時旅順方面は他隊の動作に屬せしを以て聯隊長は先つ現在各地點の占領を確實にし敢へて動かす

午後二時命令に由り毅軍操練場に集合す

戰鬪中第五第八中隊の占領したる陣地は敵の退路を扼するに最要の高地にして敵兵の旅順以西に走る能はさりしは又之か爲なり

死傷者及兵器彈藥消耗は左の如し

戰死　步兵少尉藤井平三　下士以下二十二名　乘馬一頭

負傷　步兵大尉佐土原祐吉　同　中野能介　同　別役良顯　同　肥後正奇

同　豐崎　信

步兵中尉松浦　靖　同　高島友武　同　平岡八郎

歩兵少尉早川新太郎　下士以下七十四名　駄馬一頭

射耗彈　小銃彈藥四萬五千八百五十四發

損失兵器　小銃十三挺　銃劍一挺　銃口栓二十一個　劍差三個

彈藥盒一個　洗管十一個

鹵獲品　椅子山砲臺及武庫兵營中にありし分は尠多にして枚擧すべからず故に左に記するものは概略の員數とす

小銃二十四挺　劍類二十挺　小銃彈藥四千五百三十發　乘馬二頭

衣服十組　兵營四ヶ所　武庫一ヶ所

各兵は前日來の睡眠不足にも拘らず山路行軍の疲勞をも見す戰鬪中は士氣旺盛殆んと敵を呑むの概あり毅軍操練場に集合午後三時頃より氣候頓に寒冷となり烈颱之に乘し砂石を飛して天地爲に凄然たり此時に際し午後四時三十分頃大山軍司令官は軍樂隊を率ひて同場に到着し觀武臺前に於て「君か代」三回を吹奏せしめらる之を聽き直に萬歳の聲は萬口を衝て迸り餘韻嫋々和氣洋々忽焉として身の戰場に在るを忘るゝの感あり午後十一時頃より降雨加ふるに烈颱益々威力を逞ふし寒氣恰も嚴冬の如し然るに各隊は人家寡少なりしを以て半は露營に在

りしは實に非常の困難なりし

同年十一月二十二日より聯隊本部及第一第三大隊は旅順に宿營し第二大隊は敗兵擊攘の爲め王家屯に滯陣す

同年十一月二十五日左の勅語及令旨を賜はる

勅語

旅順は渤海の關門敵國の賴みて鎖鑰と爲す處今汝等一擧之を拔く朕深く其功勞を嘉賞す漸次天寒く前途尙遠し汝等益自愛奮勵せよ

令旨

我第二軍に於て旅順口占領の趣　皇后陛下聞召され頗る御滿悅殊に將校下士卒の忠勇なるを深く御感賞の旨御沙汰あらせられたり

此日敗兵擊攘の命を受け老鐵山を踰え旅順半島西南岬角燈臺所在地に至り翌二十六日旅順に歸營す

同年十一月三十日金州城東方に移轉し冬營の目的を以て八里庄及其附近に駐陣す

同年十二月十九日午後二時楊家屯兵營前の曠地に於て軍旗紀念祭を行ふ其儀式順序左の如し

一、軍旗に對する聯隊の敬禮　二、撰拔下士以下の軍旗の歌　三、分列式

四、軍旗に對する聯隊の敬禮

此間軍樂隊の奏樂始終止ます

右終て諸隊は解散將校は楊家屯兵營にて宴會あり下士以下は其宿舍毎に酒肴を給す此日軍司令部師團司令部の將校並同相當官及各兵隊長を始めとし外國將校及新聞記者寫眞師等數十名の來會者あり頗る盛會を極む

同年十二月二十一日鎭魂式に付午前十時三十分聯隊は金州東門外に集合し十一時式場に參拜す

同年十二月二十八日恩賜の清酒二十一樽及卷莫二十九萬本を拜受し各隊に分配す昨日の命令に由り步兵第二旅團は午前十時金州城西南海濱に整列し旅團長の閲兵あり終て分列式を施行す

本日旅團長西陸軍少將講評の要旨は左の如し

閲兵並分列式を査閲するに戰鬪間に於ける成績の如く概して適良なり其細小部分に就ては今日示すの必要なし目下我旅團は敵と對する遙遠にして恰も第二線の位地に在り此時に於て幹部の盡すべき義務は鋭氣を維持し衛生に顧慮し以て我戰鬪力を減殺することなきを以て最大緊要なりとす

漸次氣候亙寒に赴き本年も亦將に盡きんとし二十八年の回曆も近きに在り占領國の陣地に於て新春を迎ふるは是亦我々軍人の一大快事ならすや諸君夫れ之を努めよ

同年十二月三十一日清酒十三樽餅米一人に付四合つゝを糧餉部より受領し各大隊に分配す

明治二十八年一月一日聯隊本部將校の新年賀表を發送す午前十一時金州軍司令部に於て將校並同相當官の宴會あり同時に賀正の交換をなす

元旦天麗かに各舍の旭章旗は翩々として風に飜り君か代を奏するあり萬歲を

唱ふるあり村々相和し落々相應へ宛然皇城々下の春に逢ふか如き感あり索莫たる戰後の荒景は今や蕩蕩たる春風の中に再ひ昭代の餘澤に浴するに至れり

同年一月五日將校並同相當官は聯隊本部に於て新年宴會を行ふ

同年一月廿二日恩賜の眞綿を拜受し各隊へ分配す

同年一月廿五日防寒用として山羊皮一名に付一枚つゝ將校以下の現在員に應して其員數を金櫃部より受領す

同年二月十日師團は第一軍を援助する爲め北進すへき命あり聯隊は十二日八里庄附近の舍營を出發し普蘭店、復州、熊岳城を經て二十日蓋平に到着す

同年二月廿二日蓋平を發し師團の豫備隊に在て同夜飛雲塞及其附近二十三日坡臺子に村落露營をなす

第五節　太平山の戰鬪

同年二月廿四日午前二時五十分昨夜の命令に由り各大隊は坡臺子西北に集合す午前三時聯隊は師團本隊となり第二大隊砲兵大隊聯隊本部第三第一大隊の順序を以て太平山の敵に向て出發す午前六時二十分孫家崗子西端に開進す此時に方り左翼隊の方面に於て銃砲聲漸次盛に起る次て右翼隊も太平山の敵と開戰す

午前八時廿分師團本隊は前進して太平山の東北に至る聯隊は更に同所に開進す午後二時五分第十五聯隊の前面の村落に在る敵を攻擊すを掩助する爲め一大隊を派遣すへき命を受けたり依て第二大隊を戰線に向て前進せしむ第二大隊は東七里溝方面に於て戰鬪中乃木少將の指揮に屬せり

午後四時更に七里溝方面の戰鬪を援助すへき命あり此時に方り同方面の戰況正さに酣なり聯隊長は自ら第三大隊を率ひて前進し歩兵第十五聯隊の戰線の左翼に增加し共に當方面の敵を擊退せしめたり時に午後五時已にして日將に暮れんとするに會し我軍亦窮追せす午後六時各隊は太平山東北の集合地より宿營地に向て發進し聯隊本部及第三大隊は柳樹屯第一大隊は香爐庄第二大隊は夏家屯附近に到り宿營す第十二中隊を以て前哨に任し老爺廟方向に對し警戒せしむ

本日の戰鬪に於て彈藥の消耗なし

負傷　兵卒　四名　駄馬砲彈破片の爲め負傷一

午後四時三十分太平山東北麓休憩中家屋崩壊に由り壓傷を蒙りたる兵卒二名あり此時師團長參謀長及參謀副官等も在屋中なりしを以て壓倒せられしも幸に負傷なし

天候は快晴ならすと雖も朔風又嚴烈ならす進路は昨日來の積雪尺餘に及ひ其先行部隊は全く雪路を開かさるへからす又後續部隊に在ては路上の皎雪已に踏碎せられ恰も細末なる砂中を行くか如く進軍頗る困難を極めたり殊に宿營命令下り各宿營地に至らんとするに方てや渺茫たる曠原日已に沒し寒霧模糊として方向を辨する能はす漸く午後九時前後に於て其宿舍に達するを得たりと雖も家屋は矮少にして且多からす元より全員を容るゝに足らさるのみならす久しく敵兵の逗留せし地方なるを以て人民已に逃走し其薪柴の如き之を求むるに由なく宿營の困難此に極れり且第二大隊は夏家屯の宿營地に達するを得す遂に午後十一時路上に彷徨し漸くにして拉々山子に村落露營をなすに至れり今朝三時より雪中に立つこと十八乃至二十時間の長きに亘りたると適當の宿舍を得ざりしとに由り各大隊とも凍傷に罹るもの頗る多く殆んど現員の半數以上に及べり又大

行李は宿營地に到着せず各隊は携帶口糧を用ひたり

同年二月廿六日午前七時三十分各隊は昨夜の命令に由り大石橋を出張し午後四時廿分本隊の先頭玻廠西方約二千米突の無名村落に達せし時蓋家屯方向より二三の砲擊を受く此時前衛は已に通過せし後なり依て第二中隊に命して之に當るの準備をなさしめ本隊は其掩護に由て行進を續行し午後七時海城に到着す第二中隊も敵の攻擊を受けて乃ち任務を全ふして午後九時無事海城に到り本隊に投合し廿日より牓甲山唐王山附近の守備に任せられ第三師團の沙河沿、大富屯の敵を攻擊するに際し牛莊街道より來進する敵を迎擊し同枝隊を掩護すべき任務を有す

第六節　海城の戰鬪

同年二月廿八日前夜の命令に由り午前四時歩兵第二第三大隊及砲兵第三大隊一中隊は守備線に就き歩兵第一大隊及騎兵小隊は唐王山後に至り豫備隊となり騎兵小隊を派遣して永泰堡張家臺方向の捜索に任せしむ

午前六時廿分敵の歩兵約二千五百人騎兵凡五十騎砲四門臼砲一門（敵兵ノ實際ハ三千餘人ナリ戰鬪詳報已ニ二千五百云々ト報告セルヲ以テ其數ヲ改メタリ）は東柳公屯より玻廠を經て大東八里河子に向ひ三縱隊となり攻撃し來る午前七時四十分唐王山の山砲小隊は敵の中央縱隊に向て砲撃を開始す此に於て敵は隊伍散亂し更に其行進方向を玻廠より東北に變し大東八里河子に進入せんとす其左翼縱隊は玻廠北方に在て停止す午前八時五十分敵の右翼縱隊は永泰堡方向より我左翼に向て前進す此に於て第九中隊を砲兵陣地に備へ而て第十一中隊をして占據せしめたる照山に第三中隊を增加せり此時より正面の敵は唐王山及其附近に向て絕えず銃砲を亂射せり午前九時二十分敵の中央縱隊は漸次前進して大東八里河子に近く其西方に達す此に於て唐王山の山砲小隊は之を砲撃せり已にして敵は潰走し同村西北方に集合す此時に方り前哨第十三中隊の一小隊は數回一齊射撃の後唐王山後の陣地に復歸し同中隊に投合す

午前九時廿三分敵の右翼縱隊は永泰堡西南方に運動す唐王山の山砲小隊は之を砲撃す敵は散亂して其進路を更に西南方に取り尙我左翼に向て繞回し其砲兵野砲二門を唐王山南方約三千二百米突の高地に進め同所より頻りに唐王山の我砲兵陣地を砲撃す尙歩騎兵約五百人の敵は其右翼に列し我左翼に向て攻撃し來る時に午後十二時十五分なり午前九時五十五分大東八里河子西北方畑地に集合せる敵の中央縱隊に向て掠甲山の野砲中隊をして砲撃せしむ此に至り敵は西方に潰走せり我砲兵は三千六百米突に至る迄追撃射撃を行ひ午前十時十分に至て止む

午後十二時二十五分我右翼に於て撃退したる敵兵再ひ前進し大東八里河子に進入し唐王山及唐王山後に向て猛烈の射撃を行ふ此時唐王山の山砲小隊及第九中隊をして射撃を行はしむ敵兵遂に進み來らす午後十二時四十分敵は其右翼縱隊より漸次退却す此時に方り降雪霏々として天地冥濛咫尺を辨する能はす玻廠及永泰堡方向に派遣したる斥候の報告に由り敵は柳公屯方向に退却したることを知るを得たり午後三時前哨第十二中隊を舊位に復せしむ

負傷並消耗彈藥左の如し

負傷　第一大隊副官歩兵中尉伊藤祐武

消耗彈藥　小銃彈　六百十五發　野戰彈　二發

野榴霰彈　十六發　山榴彈　二十八發
山榴霰彈　八十二發

同年三月二日午前六時廿分敵の歩兵約三千餘人騎兵二十騎砲八門東柳公屯より我に向て進み來る此時玻廠に在りし我停止斥候は一齊射擊を以て之を報告す午前六時三十分敵の砲兵は玻廠東方に陣地を占め大東八里河子に向て切りに砲擊をなす同時に其歩兵約五百人は同村西方約八百米突に達し射擊を開始す前哨第九中隊は之と應戰す午前七時三十分歩兵第一大隊は警急集合をなし八時三十分唐王山後に著し豫備隊の陣地に就く

午前八時前哨第九中隊は其陣地を撤し唐王山後に來り豫備隊の位置に就く此時に方り敵の銃砲彈は大東八里河子に集注す午前八時五分小哨長石川少尉戰鬪指揮中負傷す次て該小哨も其陣地を撤し唐王山後に來りて中隊に投合す午前八時五十分敵は別に爲す所なく漸次退却を始め九時三十分頃に至り其大部分は柳公屯を經て小馬頭に入り一部は柳公屯に駐留す午前九時廿分前哨第九中隊を舊位地に就かしめ聯隊本部及第一大隊は海城に歸還せり

午後二時渡邊中尉の指揮する將校斥候（下士二名卒十三名）は中央堡大小馬頭の方位及柳公屯を搜索し第三大隊の前哨と連絡する任務を以て團山子に於て我前哨線を通過し午後四時東柳公屯に進入せんとするとき諸兵連合の敵兵約三百人（騎兵約三十騎砲四門ヲ含ス）同村端に出顯し猛烈に攻擊する所となり殆んと包圍せられんとす此時前哨第九中隊より玻廠に派遣し在たる停止斥候の掩護射擊に依り團山子迄引揚るを得たり

負傷及消失兵器彈藥左の如し

負傷　歩兵少尉石川玄三　兵卒　三名
消耗彈藥　小銃彈　六千四百五十五發
損失彈藥　同　八十發
破損兵器　彈藥盒　二　帶革　二　劍　二　棚杖　一　豫備器具　一組
擊莖發條　一

同年三月三日午後十二時五十分敵の歩兵約二百騎兵二十砲二門は東柳公屯より玻廠に向て前進す前哨第九中隊より派遣しありたる停止斥候（兵卒二十名下士一名）は同

村北端に陣地を占め之に應戰し一齊射擊數回の後之を擊退せり

消耗彈藥　小銃彈　五十發

同年三月四日午前五時三十分中央堡及三臺子方位の敵情を搜索するの任務を受けたる將校斥候山本中尉は小馬頭附近に於て敵に包圍せられ歩兵第六聯隊より派遣せられたる偵察隊の掩護に依り退却し來りたるも兵卒一名は敵彈に中りたるを以て敵手に委するに至れり

同年三月五日守備隊の任務を解かれ海城を發し六時老爺廟を經て後唐家囲子に於て師團に復歸し師團本隊に在て七日牛家屯八日柳樹溝に宿營す

第七節　田庄臺の戰鬪

同年三月九日昨夜の命令に依り各大隊は午前十二時宿營地を發す進路は茫々たる原頭大雪之に横り曠乎として畔涯を知らす僅かに北斗を案して其方向を求め漸く午前二時四十分大房身北端に到着するを得たり此に於て第一大隊は旅團の豫備隊たるへきことを命し午前三時聯隊長は自ら第二第三大隊を率ひ大房身

の集合地を出發す其進路は第二聯隊の左方に並行し黑營臺の西南方に於て遼河を渡り田庄臺西方に向て進む當時遼河は氷結して通過自在なり午前七時廿分田庄臺西南方約二千米突に達す此時第二第三大隊の各一中隊を開戰に際し聯隊の豫備隊となすへきことを命す

午前八時十分田庄臺の西方約一千五百米突に達す此時敵兵田庄臺より西方に逸出せんとするの狀況を目擊す依て第二大隊に命して急行し田庄臺西方兩統碑附近の陣地を占領せしめたり此時に方り敵は我に向て猛烈に砲彈を注射せり同時に第三大隊に命して第二大隊の左翼に開進せしむ此に於て最初當方面に向て退走せんとしたる敵兵及其他の大部分は更に田庄臺より北方に向て退却せんとするの情況となりしを以て全線を擧て田庄臺の西北方に向て進出せり午前八時三十分第三大隊は田庄臺西方に集團せる敵の歩兵に向ひ一齊射擊を開始す敵も亦一部隊を止めて防戰し他の兵團は逐次北方に向て退走せんとす此に於て第二大隊をして猛烈の射擊を以て正面の敵に迫らしめ第三大隊をして增々進て退路を遮斷することを計らしむ是れより先第二大隊は數回躍進の後敵の砲兵に接近

し其輓馬馭者を殺傷し遂に八珊知クルップ砲六門をして運搬する能はす途上に遺棄して逃走するに至らしめたり

是より先第三大隊の一中隊を田庄臺西北村落に派遣し我左側の掩護に任せしむ此時に方り本隊は漸次進んで敵の退路に迫り敵は增々退却を急くに際し午前九時三十分該中隊は敵の退路に於て正面前約一千米突に現はれ俄然一齊射擊を開始す敵兵潰亂して更に退路を北方に變したり

戰鬪中豫備隊は戰線の中央後百五十米突に在て跟隨し午前九時四十分敵の步兵約一千人許り我右側後に向ひ側面縱隊を以て退却せんとするに會し豫備隊は之を射擊して又北方に向て潰走するに至らしめたり

午前九時五十分敵兵漸次遠く退却したるを以て戰線に停止を命し次て田庄臺村內に集合せしめたり

本日第一大隊は旅團長の直下に在りて第一第二中隊は右側を警戒すへき任務を以て派遣中田庄臺の東北に向て退却せんとする大なる敵の密集部隊と遭遇し之を擊退し又第三中隊の一小隊は同時に田庄臺西方に於て敵の步兵約五百許りを擊て之を散亂せしめたり

負傷及消損兵器彈藥は左の如し

負傷　兵卒　二名

消耗彈藥　小銃彈　三萬千二百六十七發

損失兵器　村田銃　一挺　擊莖發條　一個　村田銃用心金落失一個

午後二時田庄臺集合中彈藥庫爆發し瓦石破片の爲め負傷せし士官千葉胤恭外十五名あり

鹵獲品は「クルップ」砲小銃及彈藥等夥多ありしと雖も其員數の調査確實ならす故に記載せす

同年三月十日趙家堡子を發し桑墩子、白庙子、飛雲塞を經て十三日蓋平に歸着し城內及其附近に宿營す

同年三月十九日會報の要旨左の如し

三月十六日參謀總長宮殿下ニ賜リタル勅語

朕か征清の陸海各軍漸々其歩を進め既に作戰第一期を經過し今將に第二期の作戰に前進せしむるの必要を認む依て朕今卿に任し委するに出征全軍の指揮を以てし假すに配下將官以下任免補叙の權を以てす卿夫れ朕か意を體し往て事に從ひ以て我國威を宣揚せよ

御沙汰書

征清大總督彰仁親王今般大總督府を戰地に前進することを命し大本營中作戰に必要なる諸機關の一部を從屬せしむ

同年三月廿日當師團は本日より第一軍に編入せらる

同年三月廿四日此日聯隊は鎭魂式場へ參拜す

同年四月七日乃木少將は中將に任せられ第二師團長に補せらる

同年四月十七日南進の命あり蓋平を發し廿二日復州南方李家屯附近に到り宿營す

同年五月六日午前七時各大隊長を集め左の勅語を傳達す

勅語

朕惟ふに國運の進張は治平に由りて求むへく治平を保持して克く終始あらしむるは朕か祖宗に承くるの天職にして亦即位以來の志業たり不幸客歳清國と釁端を啓き朕は止むを得すして之と干戈を交へ十閱月の久しき結ひて解くる能はす而して在廷の臣僚は陸海兩軍及議會兩院と共に咸能く朕か旨を體し朕か事を奬め内に在ては參畫經營し費用を給し需供を豐にし防備に力め外に在ては櫛風沐雨祁寒隆暑に暴露し百難を冒し萬死を顧みす旭旗の指す所風靡せさるなし出征の師は仁愛節制の聲譽を播し外交の政は捷敏快暢の能事を盡し以て能く帝國の威武と光榮とを中外に宣揚したり是れ朕か祖宗の威靈に賴ると雖とも百僚臣庶の忠實勇武精誠天日を貫くに非さるより安ぞ能く此に至らんや朕は深く汝有衆の忠勇精誠に倚信し汝有衆の協翼に賴り治平の回復を圖り國運進張の志業を成さむとするに切なり

今や朕清國と和を講し既に休戰を約し干戈を戢むる將に近に在らむとす清國淦

盟を悔ゆるの誠已に明にして帝國全權辨理大臣の按定せる條件克く朕か旨に副ふ治平榮光併て之を獲る亦文武臣僚の互に相待て全功を收めたるに外ならす祖宗大業の恢弘今や方に其の基を鞏め朕か祖宗に對するの天職は斯に其重を加ふ朕は更に朕か志を汝有衆に告け以て將來の嚮ふ所を明にせさるへからす

朕固より今回の戰捷に因り帝國の光輝を闡發したるを喜ふと共に大日本帝國の前程は朕か即位以來の志業と均く猶ほ甚た悠遠なるを知る朕は汝有衆と共に努めて驕泰を戒め謙抑を旨とし益々武備を修めて武を瀆すことなく益々文敎を振て文に泥むことなく上下一致各々其の事を勉め其の業を勵し以て永遠富强の基礎を成さむことを望む戰後軍防の計畫財政の整理は朕有司に信任して專ら贊籌の責に當らしむへしと雖とも積累蘊蓄以て國本を培ふは主として億兆忠良の臣庶に賴らさるへからす若夫勝に狃れて自ら驕り漫に他を侮り信を友邦に失ふか如きは朕か斷して取らさる所なり乃ち清國に至ては講和條約批准交換の後は其友交を復し以て善鄰の誼愈々敦厚なるを期すへし汝有衆其れ善く朕か意を體せよ

明治二十八年四月二十一日

同年五月十八日午前八時李家屯北方畑地に聯隊を整列せしめ左の勅諭を傳達す

勅諭

朕か親愛する帝國陸海軍人に告く

朕兵馬の大權を統へ明治十五年陸海軍の制略立つに於て汝等に軍人の精神五箇條を訓諭し忠節、禮儀、武勇、信義、質素、貴くに一誠を以てすへきことを告けたり朕か汝等に訓諭するの段切なりしもの洵に汝等を以て朕か股肱と頼めはなり

爾來治平十有餘年客歲清國の釁を開くや汝等は朕か一號令の下に起て隆暑に耐へ祁寒を冒し內は籌畫警防を努め外は進攻出戰に勞し陸に海に振古未た有らさるの偉勳を奏し能く交戰の目的を達して帝國の光榮を四表に發揚せしめたり

朕は帝國の陸海軍の進步茲に至りたるを欣ひ汝等か深く五箇條を服膺して敢て失墜せす命を重し生を輕し以て能く朕か股肱たるの職を盡したるを嘉す獨り鋒

鏑に斃れ疾病に死し然らさるも病癈となりたるものに至ては朕深く其事を烈と
して其人を悲まさるを得す
朕今清國と和を講し汝等と倶に治平の慶に賴らむとす顧ふに軍隊の名譽は帝國
の光榮と共に汝等の責務を重からしむ朕は我武維れ揚りて汝等と其譽を偕にす
るを樂むと雖とも邦家の前程は尚遼遠なり汝等夫れ能く朕の訓諭を遵奉し留り
て隊伍に在るものと散して鄕閭に歸るものとに論なく五事を服膺して軍人の本
文を恪守し一誡以て他日の報効を期せよ
明治二十八年五月十三日
同時に各將校を集めて左の詔勅を傳達す

詔勅

朕嚮きに清國皇帝の請に依り全權辨理大臣を命し其の簡派する所の使臣と會商
し兩國講話の條約を訂結せしめたり
然るに露西亞獨逸兩帝國及法朗西共和國の政府は日本帝國か遼東半島の讓地を

永久の所領とするを以て東洋永遠の平和に利あらすと爲し交々朕か政府に慫慂
するに其地域の保有を永久にする勿らむことを以てしたり
顧ふに朕か恒に平和に眷々たるを以てして竟に清國と兵を交ふるに至りしもの
洵に東洋の平和をして永遠に鞏固ならしめむとするの目的に外ならす而して三
國政府の友誼を以て切偲する處其の意亦茲に存す朕平和の爲めに計る素より之
を容るゝに吝ならさるのみならす更に事端を滋し時局を艱し治平の回復を遲滯
せしめ以て民生の疾苦を釀し國運の伸張を沮むは眞に朕か意に非す且清國は講
和條約の締結に依り既に渝盟を悔ゆるの誠を致し我か交戰の理由及目的をして
天下に炳焉たらしむ今に於て大局に顧み寛洪以て事を處するも帝國の光榮と威
嚴とに於て毀損する所あるを見す朕乃ち友邦の忠言を容れ朕か政府に命して三
國政府に照覆するに其の意を以てせしめたり
若し夫れ半島讓地の還附に關する一切の措置は朕特に政府をして清國政府と商
定する所あらしめむとす今や講和條約既に批准交換を了し兩國の和親舊に復し
局外の列國亦斯に交誼の厚を加ふ百僚臣庶其れ能く朕か意を體し深く時勢の大

局に規徴を慎み漸く戒め邦家の大計を誤ること勿きを期せよ

明治二十八年五月十日

第八節　凱旋

同年五月十九日講和條約の結果に由り歸朝すへき命あり本日李家屯を發し二十三日金州着三十日大連灣出帆六月四日宇品に上陸し七日東京に凱旋す

運送船及檢疫の都合に由り各隊の凱旋時日は左の如し

七日聯隊本部及第一大隊本部第一、第二、第三中隊

八日第四中隊及第三大隊本部第九、第十、第十一中隊

九日第二大隊本部及第七、第八中隊

十日第五、第六、第十二中隊

同年六月十三日戰地より歸朝したる二十四年兵二十六年度豫備徴員を解散し豫備役將校以下復員を令せられ十四日より平時の姿勢に復す

補充大隊に在りし二十六年度豫備徴員及豫備役將校以下は五月二十一日歸休

及復員を令せられ爾後必要の幹部のみ居殘りしも本日を以て悉く歸鄉を命せらる

征清從軍中死亡したる將校以下人員左の如し

戰死				病死			
將校	下士	兵卒	小計	將校	下士	兵卒	小計
二	五	三四	四一	〇	二	三四	三六

第五章　日清戰役後ヨリ日露戰役前ニ至ル重要記事

明治廿八年十一月四日從來の十三年式村田銃を村田連發銃と交換支給せられ十二月一日より使用す

廿九年四月十六日英國前海軍大臣ゼ、ライト、ヲノレエブルナイト、オフ、ゼガータ伯爵スペンサー氏來營各兵舍、工場、諸倉庫及操練等を見る

同年五月廿三日聯隊本部及第二大隊第三大隊は威海衛占領軍交代の爲め渡清の途に上る

三十年六月一日威海衛占領軍交代に付五月廿五日當隊第二大隊並に第九中隊將校以下六百四十二名殘餘は翌廿六日威海衛出發本日悉皆歸朝す

同年十月十一日聯隊長木村有恒大佐に任せらる

同年十月十一日伊國皇族トリノ伯殿下來隊せらる

同年十月十四日故西部都督陸軍中將子爵山地元治の葬儀あり我第三聯隊之か儀仗に列す

同年五月十五日故參謀總長陸軍大將川上操六の葬儀あり我聯隊（二個大隊）之か儀仗に列す

同年六月三十日獨逸國皇族ハインリヒ親王殿下來營せられ兵舍諸倉庫等を閲覽に供す

同年十月七日臺灣守備隊に轉したる千葉大尉以下二百二十三名新橋より乘車し廣島に向ふ此日偶々烈風暴雨にして列車は終に沼津附近より西進する能はず將士皆下車して沼津に宿營し廿日基隆に着す

同年十月廿九日臺灣守備隊より三谷大尉以下百九十八名歸隊す

同年十二月一日下士制度を改正し本日より實施せらる

同年十二月十六日本日より三十年式銃を使用す

同年十二月廿二日下士教育常置委員を置く

三十三年一月十日三十二年十二月改正の條例に基き下士教育を開始す

同年十月十一日大尉蟻坂七五郎の指揮の下に戰時人員一中隊を編成し甲府及御殿場方向に派遣す其目的は山地の長途行軍に慣馴し併て携帶天幕、飯盒等其他被服裝具の試驗を施行するにあり

三十四年五月廿二日聯隊長歩兵大佐木村有恒陸軍少將に任し第十六旅團長に補せられ歩兵中佐牛島本蕃當聯隊長に補せらる

同年六月廿一日北清駐屯隊一中隊を編成し天津に向て出發し通州に駐屯後上海に移る

同年十一月廿八日上海駐屯隊たりし歩兵一中隊は任務を終へ歸營す

三十六年二月十六日故彰仁親王殿下御送葬に付儀仗兵に服務す

同年五月十日特命檢閲使山縣有朋閲兵下士兵卒の試問戰用品幷に平時用被服、

動員計畫、內務及將校の圖上戰術の實施に關し檢閲を行はる

同年六月十七日清國武官四川省管帶官揚晋研究の爲め當聯隊附を命せられ入隊す

同年十一月十八日聯隊長歩兵中佐牛島本蕃歩兵大佐に任せらる

第六章　日露戰役

日本ハ露國ノ要求ニ對シ日本ノ地位ヲ確保シ極東ノ平和ヲ維持スル爲メ斷然之ヲ拒絶シ終ニ旅鼓ノ間ニ相見ヘテ之カ解決ヲ求メントシ遂ニ國交ヲ斷絶シ明治三十七年二月十日宣戰ノ詔勅ヲ煥發セラル

第一節　宣戰ノ詔勅煥發ヨリ張家屯沿岸上陸ニ至ル

明治三十七年二月十日宣戰の詔勅を下し賜はる

詔勅

天祐を保有し萬世一系の皇祚を踐める大日本國皇帝は忠實なる汝有衆に示す朕茲に露國に對して戰を宣す朕か陸海軍は宜しく全力を極めて露國と交戰の事に從ふべく朕か百僚の有司は宜く各其職務に率ひ其權能に應して國家の目的を達するに努力すべし凡そ國際條規の範圍に於て一切の手段を盡し遺算なからんことを期せよ

惟ふに文明を平和に求め列國と友誼を篤ふして以て東洋の治安を永遠に維持し各國の權能利益を損傷せすして永く帝國の安全を將來に保障すへき事態を確立するは朕夙に以て國交の要義となし旦暮敢て違はさらんことを期す朕か有司も亦能く朕か意を體し事に從ひ列國との關係年を逐ふて益親交に赴くを見る今不幸にして露國と釁端を開くに至る豈朕か志ならんや

帝國の重きを韓國の保全に置くや一日の故に非す是れ兩國累世の關係に因るのみならす韓國の存亡は實に帝國安危の繫る所たれはなり然るに露國は其清國との明約及列國に對する累次の宣言に拘はらす依然滿洲に占據し益々其地歩を鞏固にして終に之を併呑せんとす若し滿洲にして露國の領有に歸せん乎韓國の保

全は支持するに由なく極東の平和亦素より望むへからす故に朕は此の機に際し切に妥協に由て時局を解決し以て平和を恒久に維持せんことを期し有司をして露國に提議し半歳の久しきに亙りて屢次折衝を重ねしめたるも露國は一も交讓の精神を以て之を迎へす曠日彌久徒に時局の解決を遷延せしめ陽に平和を唱道し陰に海陸の軍備を増大し以て我を屈從せしめんとす凡そ露國か始より平和を好愛するの誠意なるもの毫も認むるに由なし露國は既に帝國の提議を容れす韓國の安全は方に危急に頻し帝國の國利は將に侵迫せられんとす事既に茲に至る帝國か平和の交渉に依り求めんとしたる將來の保障は今日之を旗鼓の間に求むるの外なし朕は汝有衆の忠實勇武なるに倚賴し速に平和を永遠に克復し以て帝國の光榮を保全せんことを期す

明治三十七年二月十二日軍隊に左の勅語を賜はる

勅語

朕は東洋の平和を以て朕か衷心の欣幸とする所なるか故に清韓の兩國に關する時局の問題に付き朕か政府をして昨年來露國と交渉せしめたり然るに露國政府は東洋の平和を顧念するの誠意なきことを確認せしむるを得さるに達したり蓋し清韓兩國領土の保全は我日本の獨立自衛の爲めに自由の行動を執らしむることに決定せり

朕は卿等の忠誠勇武に信賴し其目的を達し以て帝國の光榮を全ふせむことを期す

奉答

謹て奏す　陛下優渥なる　勅語を賜ふ臣等感激の至りに堪へす誓て　聖旨を奉體し皇威を發揚せむことを期す貞愛部下を代表し誠恐誠惶謹て奉答す

第一師團長　貞愛親王花押

同年二月六日第一師團守戰計畫に依る第一大隊は警急配備の爲め横須賀に向て出發三月二日歸營す

同年三月六日午前十一時四十分動員令を受領す

同年三月六日午後零時十二分將校同相當官特務曹長及見習士官の戰時職務を命課す

聯隊本部	聯隊長 大佐 牛島本蕃	聯隊副官 大尉 久田國義	旗手 少尉 穗積堯晴
第一大隊	大隊長 少佐 鞍掛起英		
一等軍醫	高井貞吉		
三等軍醫	松本大太郎		
二等主計	坂巻佐太郎		
第一中隊	中隊長 大尉 土谷正太		
同	同		
同	同		
少尉	少尉		
石川佐一	松尾宗吉		
篠崎趙八			
第二中隊	中隊長 中尉 川崎好次郎		
同	同		
同	同		
少尉	少尉		
桑原矢六	清水喜重		
眞々田彰義			
第二大隊	大隊長 少佐 高松公重		
一等軍醫	中尉 山本惠		
三等軍醫	中川鋼次郎		
二等主計	西村文雄		
向井佐之助			
第三中隊	中隊長 中尉 西田友幸		
同	同		
同	同		
少尉	少尉		
佐藤十郎	石幡伊三郎		
山本薫			
第六中隊	中隊長 中尉 岡保彦		
同	同		
同	同		
少尉	少尉		
佐藤十郎	石幡伊三郎		
山本薫			
第五中隊	中隊長 中尉 手塚魁三		
同	同		
同	同		
少尉	少尉		
幸野林之清	林幸助		
第二大隊	大隊長 少佐 岡野敏彰		
一等軍醫	中尉 福島只一		
三等軍醫	西野入貞一		
二等主計	保坂正男		
山田詳三			
第九中隊	中隊長 中尉 山本和平		
同	同		
同	同		
少尉	少尉		
志村正吉	桑川淺一郎		
田中良男			
第三大隊	大隊長 少佐 高松公重		
一等軍醫	中尉 山本惠		
三等軍醫	中川鋼次郎		
上等主計	西村文雄		
向井佐之助			
第十中隊	中隊長 中尉 三根昇一		
同	同		
同	同		
少尉	少尉		
奥村良四郎	柏崎善一郎		
網野			
第七中隊	中隊長 中尉 中岡保彦		
同	同		
同	同		
少尉	少尉		
佐藤十郎	石幡伊三郎		
山本薫			
第十二中隊	中隊長 中尉 大藤直一		
同	同		
同	同		
少尉	少尉		
中藤一也	弘中		
第三中隊	中隊長 中尉 久田國義		
同	同		
同	同		
少尉	少尉		
坂元兼良	中尉		
大隊副官	中尉		
中隊附	少尉		
沖久中信			

中隊	第四中隊	第八中隊	第十二中隊
同	中隊長 大尉 山本正熊	中隊長 大尉 守永彌惣次	中隊長 大尉 蟻坂七五郎
同	中隊附 中尉 平井益吉	同 少尉 寺田行藏	同 中尉 笠原民次郎
少尉 新納豊二	同 少尉 山口亨	同 少尉 荒井彖八	同 少尉 赤尾開治
今井與志雄	駒嶺忠雄	平田清蹇	村岡猪久治
中隊	第八中隊	第十二中隊	
同	同	同	
特務曹長 少尉 古郡谷	中隊長 大尉	中隊長 大尉	
同	同	同	
愛甲金吉	同 少尉	同 少尉	
	荒井彖八	村岡猪久治	

他部隊轉出者　補充大隊

大隊長	少佐 淺村安直	同 副官	中尉 大藤直一
中隊長	大尉 山田重郎	中隊長	中尉 奥村拓次
中隊附	中尉 宗像重吉	中隊附	少尉 湯村武治
同	少尉 吉田佐郷	同	特務曹長 森山由太郎

後備歩兵第三聯隊

聯隊副官	大尉 堀米代三郎	中隊長	中尉 紀平正矩
中隊長	中尉 森眞三郎	大隊副官	中尉 坂元兼良
大隊副官	中尉 安藤正義	旗手	少尉 櫻羽正友
中隊附	少尉 圓山清	中隊附	少尉 沖久中信

同　少尉　川岸文三郎　同　同　特務曹長　遠見鐐

同　特務曹長　横井六三郎

其他の部隊

大尉　篠田武政　留守第二旅團副官　中尉　中村稻彦

衛生隊中隊長　中尉　安藤金三郎　甲軍司令部要員　中尉　關太常

師團副官　少尉　仙波安藝　野戰病院　三等軍醫正　篠尾明濟

野戰病院　一等軍醫　秋山練造　衛生隊　二等軍醫　富澤弘

各種委員左の如し

應召員受領委員　首座高松少佐　篠崎中尉　高井軍醫　西村軍醫

同　保坂軍醫

裝蹄兼馬匹受領委員　首座岡野少佐　永田中尉

軍令部編成委員　佐藤中尉　馬匹給養委員　笠原中尉

海岸監視哨編成委員　眞々田中尉　臨時國府津海岸監視哨長　大木中尉

坂卷主計

各大隊は午前十一時五十分より午後三時までの間に下士以下の身體檢査を行ふ其結果補充大隊に轉出せしむべきもの左の如し　兵卒十二名

同三月七日午前八時中庭に於て他部隊轉出下士及各種委員助手を受授し午後一時他部隊轉出の兵卒を受授す

同三月八日　午前九時より午後十時に亘り應召員の受領數豫備歩兵少尉石川佐一外下士以下三百十六名此日輜重輸卒の應召ありしにも係らす是か監視者たるへき輜重幹部の應召せられさりしは大に不便を感したり

同三月九日午前九時より午後十一時に亘り應召員受領數六百三十七名

同三月十日午前九時より午後六時に亘り應召員受領數四百三十四名徵發馬匹は本日を以て充足す

同三月十一日午前九時より午後六時に亘り應召員受領數五百三名休職歩兵大尉土谷正太本日着隊す背嚢入組携帶口糧は各人七日分を携行することに定めらる

同三月十二日本日應召員受領數百十八名中尉田中良男は第二旅團副官に同大

藤直一は第九中隊附に補せらる午後五時動員完結す但し軍醫一名未着

同三月十三日各大隊は武裝檢査を施行せり

同三月十四日午前九時青山練兵場にて武裝檢査を施行せられ終て旅團長の訓示あり

出征前に於ける訓示

我旅團は不日出征せんとす仍て吾か親愛なる將校下士兵卒に一片の訓誡を與へ且つ之を以て相互の誓詞と爲さんと欲す

一、勅諭の五箇條を以て吾等の精神と爲し專ら武勇を尙ひ忠節を盡し斃て後ち止むの決心鞏固なるへき事

二、聯隊旗の向ふ所は我か　大元帥陛下の進ませ給ふ所と心得べし乃ち聯隊旗の下に於て戰死を遂ぐるは往昔の武士か君前に於て討死せしと同然にして軍人の最も名譽たることを銘肝すべき事

三、退却の文字は戰役間之を抹殺すへし吾か先人は敵に背後を視するを以て大なる耻辱と爲せり吾等軍人は吾か先人に優ることあるも決して劣ることなき樣心掛くへき事

四、勝敗の岐るゝ處は只た軍紀を守ると守らさるとに在り軍紀を守らさるゝ動作は敗滅の因と爲るものなれは上下互に軍紀を嚴守し協同一致の動作を爲すに努力すへき事

五、敵を輕侮するは嚴禁たり然れとも之か爲め反て其處置愼重に過き機宜く逸する等のことあるべからす遲疑逡巡は敗北を招き果斷決行は勝利を得るの道にして所謂用兵の法は巧遲に失せしより寧ろ拙速を貴ふの原則たることを銘心すへき事

畢竟するに吾等軍人は前記五項の主旨を實踐實行し進死の榮譽を願ひ退生の耻辱たることを記憶すれば足れり諸子夫れ身體の健康に注意すると同時に又克く困苦缺乏に堪へ以て國威を宣揚し併せて軍隊の名譽を發揮せんことを期せよ

明治三十七年三月十四日　歩兵第二旅團長　中村覺

同三月十五日第二軍司令官より左の訓示あり

訓示

本日戰鬪序列を命ぜられ不肖保暈忝く第二軍司令官の重任を荷ひ將さに諸君と共に遠征の途に上らんとす因て一言して諸君に告ぐ

夫れ軍人は國家の干城なり有事の日身命を擲て奉公すべきは何そ多言を要せん殊に本役は我帝國千古未曾有の大戰にして其勝敗は實に國家の安危に關す豈に殉國の至誠を盡して奮勉努力せざるべけんや況んや

天皇陛下は本役の成功に對し特くに優詔を下され吾人に信賴し給へるに於てをや

回顧すれは帝國の露國と關係を結ひたるは遠く四十年前の樺太事件に始まり日清戰役を經て此關係更に增大し早晩本役の起るべきを豫期し國防に軍備に大に力を用ひたりしか今や果して之を砲火の間に解決するの已むを得さるに至れり而して本役は彼の日清役及北清事變の戰爭の如く連戰連勝し得るものと速了

すべきに非す

期する所は專ら終局の勝利を收むるに在り

故に保暈は諸君と共に誓て此趣旨を體し假令戰爭幾年に亘るも終始一貫堅忍、持重、協心戮力、共同一致勝つて恃ます敗して撓ます帝國特有の忠勇を皷勵し常に敵兵の長所を排擊壓倒するの決心を以て軍の成功を圖り上は

陛下の宸襟を安んし奉り下は國民の輿望に答へ益々皇威國光を宣揚せんとす諸君幸に保暈の微衷を諒せられよ

明治三十七年三月十五日　第二軍司令官男爵　奥　保　暈

同三月十六日青山練兵場に於て師團長殿下の武裝檢査を施行せらる右終て步騎兵は分列式を行ふ

此日聯隊長は左の要旨を訓示す

一、衛生を重して健康を保持すへきこと

二、軍紀は戰鬪唯一の要素なり此際益々軍紀風紀を森嚴ならしむへし

同三月十九日今回當隊に機關砲小隊(六門)配屬せらる

同三月廿二日野戰聯隊將校同相當官拜謁被仰附

同四月六日征露戰役に關し失眼又は手足切斷等の軍人及其他の者へ　皇后陛下の思召を以て義眼義手足下賜せらるゝ旨達せらる

同四月十日午前十時將校集會所前に於て將校同相當官一同紀念の爲め撮影す

同四月十一日本日より鐵道輸送開始せられ同十四日廣島に集中を了し同十五日第二軍の隷下に入る

第二軍の任務は旅順要塞を大陸より遮斷し且將來に於ける我大作戰の爲確實なる根據地たる大連灣を占領するにあり

同四月廿三日聯隊本部第一、第二大隊及第九中隊は第一梯團として同廿四日第三大隊第九中隊欠は第二梯團として宇品港にて乘船大同江口に向ひ出帆四月廿六日第一梯團は韓國大同江内鐵島沖に投錨同廿九日更に第二梯團も同地に投錨し五月七日迄破泊す

第一軍は既に韓土にある第十二師團と合し四月一日順川嘉川の線に於ける軍の大部の開進を完結す次て四月十九日義州附近に於ける軍の開進を了り渡河を準備し五月一日鴨綠江右岸にある敵を擊破して近く韓國々境に位置することゝなりしが直ちに集合しつゝある敵を脅威して間接に旅順方面への南下を抑制す

同五月八日上陸の爲め投錨地出帆十日猴兎石沖に假泊十一日猴兎石の西方約六吉米なる張家屯沿岸に上陸を開始し十二日完了せり第一大隊は旅團の豫備隊聯隊第一大隊欠は師團の總豫備となり刑家屯附近に村落露營す

第二節　金州附近十三里臺の戰鬪

第二軍は近く前面の情況は尚未た急ならさるを知り速に金州附近を占領して大連灣附近に確實なる根據地を成形し以て北進の準備をなさんとし第一師團を以て金州附近を占領し主力を以て普蘭店大沙河の線を占領するに決す

同五月十四日午後四時前進に關し左の要旨の命令を受領す

前衛命令の要旨

一金州附近の敵は約歩兵一旅團砲兵三中隊及騎兵若干にして其大部は金州南方高地南山を守備し一部は十三里臺東西の高地金州城及其東方劉家店附近にあるものゝ如し又我偵察隊歩兵第二聯隊の一大隊は昨日陳家屯及陳家溝東方高地に敵の歩兵約一大隊騎兵約百騎の陣地を占領するを見たり

大連灣及ダルニーには兵力未詳の敵あり又瓦房店普蘭店附近には少くも歩兵

一二中隊騎兵砲兵若干あるものゝ如し

軍は主力を以て大沙河、普蘭店の線を占領し一部を以て、金州附近を占領するの目的を以て明日第三師團は花兒房（大沙河右岸比子窩より金州に通する街道の北側）西北端高地より臺山寺の高地に亘る線を占領し又第四師團は普蘭店附近の敵を驅逐し孫家店（普蘭店の東方約八吉羅）より普蘭店南方高地に亘る線を占領する筈

師團は金州北方及東北方の高地線を占領するの目的を以て明日衣家屯附近に前進せんとす

獨立騎兵は明日午前六時叢家屯附近を出發し小子屯を經て牛粒井（三十里堡東方約六吉羅）附近に前進し金州復州街道を搜索する筈

右側支隊歩兵第一旅團（歩兵第十五聯隊欠）騎兵一小隊工兵一小隊は歩兵前兵の後尾に跟隨し加家屯より分進小李家屯、小子屯、西溝屯及雀家溝附近を經て高麗附近前進し十三里臺の敵情を搜索する筈

右側支隊歩兵第二聯隊（一大隊欠）騎兵一小隊は午前五時三十分趙家屯を出發し楊家屯、高家屯、江家屯を經て劉家溝に向て前進し特に老虎山南方の諸道路を搜索する筈

二前衛歩兵第三聯隊騎兵一小隊半砲兵第一聯隊第一大隊（一中隊欠）は明日叢家屯、破車溝南部華家屯を經て金州街道に出て衣家屯に向て前進せんとす

三歩兵第三聯隊第三大隊騎兵小隊工兵中隊は前兵となり明日午前六時壬家屯を出發し前衛の進路を前進し南部華家屯東南方約七百米突の分岐點より一中隊を劉家屯、沙包子、大房身、石城子を經て前石拉子に向て派遣し左側を警戒せしむ

以下略す

同五月十五日午前六時前兵は第十二中隊工兵一小隊を前兵支部とし第二第三大隊は前橋本隊となり壬家屯を發し衣家屯に向ひ前進中午後零時十分石拉子西方高地にある敵の乘馬歩兵約百騎を擊退し午後一時半該高地を占領し更に第一大隊を前兵とし敵を追擊し午後三時三十分衣家屯西南約千米突の高地を占領す

同時に左側中隊は第三大隊に合す前兵を前哨に任し初家屯西南方約五百米突の高地附近より衣家屯西方約三吉羅の高地を經て衣家屯南方約千五百米突道路の集合點附近に亘る高地を堅固に占領し爾餘の諸隊は衣家屯西南方陣地の後方地

屬に露營す

同五月十六日 此より先き軍は諸情報に依り北方の敵は益々減少するに反し南方即ち金州附近の敵は次第に増加し一師團に上りしものゝ如く第一師團のみを以て金州附近の敵を攻撃するは成功を早むる道にあらざるのみならず初戰に於ける大打撃に依りて彼の士氣を沮喪せしめ我士氣を鼓舞するは莫大の利益あるを以て更に第四師團の主力（野戰砲兵第十三聯隊を附す）を金州方面に差遣するに決せり

此夜我師團は已に金州附近の敵と一日行程以内に近接せりと雖も詳細なる敵情を知る能はす此に於て明日先つ十三里臺附近の敵に向ひ威力偵察を為すに決す

午前二時前進に關し司令官中村少將より左の要旨の前衛命令を缺く

一前面の敵は劉家屯以西に退却せしものゝ如し

十三里堡附近には敵の一小部隊あり又十三里臺附近には諸兵連合の大部隊あり と云ふ

第四師團は一部を以て普蘭店附近を占領し主力を以て復州街道を金州に向て南下し我師團の攻撃に協力する筈

師團は明日金州東北高地附近に在る敵情を偵察するの目的を以て關家店附近に前進す

右側支隊は前半拉山屯東方高地に向ひ前進し左側支隊は孔家爐東方高地標高140に向ひ前進し又一部隊を老虎山南方に派遣する筈

二前衛歩兵第三聯隊騎兵半小隊工兵第一中隊の一小隊は金州街道北方高地上を經て關家店北方標高144の高地に向て前進せんとす

三歩兵第三聯隊第二大隊長高松歩兵中佐及工兵小隊は前兵に任し午前六時三十分衣家店西南方高地上道路の集合地點を出發すべし

四前衛本隊は旅團司令部歩兵第三聯隊（第二大隊欠）の順序を以て前兵の後方約八百米突を隔てゝ跟隨す　命令以下略す

前衛は命令の如く前進運動を開始し時恰も夜來の微雨に加ふるに濃霧を以てし遠く展望する能はす上陸以來腕を扼して快戰を待ちつゝありし將卒は其勢に起らんとする戰鬪を喜ひ勇氣勃々隊伍肅々として此の細雨濃霧の中を前進せり

午前九時廿分前兵關家店北方約千二百米突の標高144の高地附近に達し第六中隊を以て關家店西方高地附近を占領して前兵の開進を掩護せしめ且金州街道上鐘家屯と陳家屯の間を退却しつゝある敵の歩騎兵約五六十を射撃せしむ此時鐘家屯西南方高地より十三里臺南方高地に亘る線上に在る敵は開進しつゝある我

前兵の主力に向て射撃を開始す依て第七中隊をして三里臺東南方約二千米突の高地を占領して前兵の右翼を掩護せしむ同中隊は直に前面の敵と射撃を交換す同時に前衛本隊の開進を終れり此時雨霧漸く霽れ附近の情況を略ほ明にするを得たり前衛面前の狀況即ち左の如し

十三里臺附近に砲八門前兵の正面及陳家屯の南北高地には優勢ならさる歩兵ありて緩徐なる射撃をなしつゝあり午後零時四十分我砲兵は十三里臺の敵の砲兵に向て射撃を開始す

縱に砲戰開始前より左側支隊は北陰囊南方高地の敵に向ひ攻撃を開始し全力を擧て交戰し逐次前進し遂に午後二時陳家屯南方高地を占領す

十三里臺附近の敵砲兵の退却するや前衛前面の敵も亦退却を始め前衛は之を追躡し午後二時四十分標高233の高地を占領し追擊射撃をなす

午後五時第三大隊は前哨となり右翼第一旅團の前哨に連繫し標高233高地附近より陳家屯に亘る線を堅固に占領し其附近に露營す

此戰鬪に於て我戰死下士卒三名、負傷下士卒十七、馬匹一

敵の捕虜二名あり其死傷の數に至ては詳かならす

戰利品　小銃二、彈藥、裝具其他若干あり

費消彈藥　一萬九千二百十五發

十七日より攻圍線構成要領により陣地の工事に着手し廿日に至る

第三節　南山の戰鬪

五月十六日第二軍は金州北方より同東北方に亘る高地線を占領し爾來金州方向を偵察せしむ南山は狹小なる地峽の中央に位置し金州方向を全く敵制し且此高地を側防する爲其後方に適當の高地を有し其好なる陣地を成形し加ふるに敵は堅固なる防禦工事を施し其砲臺數は約十個にして重砲を備ふるか如し野戰砲のみを以て該高地を强襲するこゝは頗る困難なるを知りしも青泥窪の占領は爾後の作戰の爲め一日も之を早くするの必要あり然に目下大窪口及大連灣には無數の機械水雷沈設しあり

して陸上より金州半島の咽喉に在る敵を攻撃し之を西方に壓迫し以て掃海の機を得せしむるにあらされは海上よりの掃海は到底之を行ふへからざるを以て斷然之を略し

線續て安子山靈冠山の線迄進出するに決す

乃ち第一師團第三師團（歩兵三大隊、騎兵二中隊、砲兵一大隊欠）弟四師團（歩兵一大隊、騎兵二中隊）

二中隊（野戰砲兵第一旅團工兵第五大隊（一中隊欠）を以て南山の敵を攻撃し此間第三師團の一部（歩兵一聯隊、騎兵二中隊、砲兵一大隊）及逐次上陸する金二回輸送部隊を第五師團長の指揮に屬し普蘭店大沙河の線を占領し

して北方に對し軍の背後を掩護せしむるに決したり

同五月廿一日第一師團は現位置に在て軍の運動を庇掩す聯隊は十三里臺南方標高233高地の南側より格條溝西北方金州貌子窩街道北側高地に亘る線を占領す廿二日より軍の諸團隊は運動を起し各其所命の地に向ひ廿三日豫定の地を占領し廿四日各團隊は夜半より運動を起し廿五日迄に各其指定の位置を占領せり

五月廿二日旅團長の訓示左の如し

訓示

過日の戰鬪に鑑みるに敵の射擊法は比較的巧妙なれは再後の戰鬪に於ては勉めて疎散の散兵線を作り以て多くの死傷者を生せさることに專心注意せさるへからす戰況と地形とに依りては援隊及豫備隊の如きも或は展開して前進するの必要あり要するに敵眼を遮蔽すること能はさる散開地を密集せる部隊を以て前進するは徒らに死傷を招くものたることを銘心するにあり然れとも豫後備を指揮官の手裏に掌握するの原則たるは言を待たさる所なり

前記の要旨は將校以下兵卒に至るまて能く了解せしめ置く可し

明治三十七年五月廿二日　　歩兵第二旅團長　中村覺

同五月廿四日師團命令により歩兵第三聯隊は軍の總豫備隊となる

同五月廿五日午前三時陳家屯西北方露營地を發し同村西側畑地に集合し終日其位置に在り

同五月廿六日午前一時より迅雷風雨咫尺を辨せす第四師團正面金州城の攻略未た成らす銃砲聲甚た盛なり午前五時各陣地に在る我砲兵は南山に向て砲擊を開始し砲戰猛烈壯絶を極む

午前五時廿分金州城は第一旅團及第四師團に依て攻略せらる

午前六時南山西北面砲兵は漸次沈默に陷り各方面第一線の歩兵逐次敵に接迫す此より先き聯隊は午前三時軍司令官の命に依り雷鳴暴雨を冒して前進し午前四時三十分肖金山東方凹地に務る時に雷止み雨霽れたりと雖も濃霧暫く四方を鎖せり

同時より我軍艦筑紫、赤城、鳥海、平遠及第一水雷艇隊は金州城灣頭に現はれ南山に向て攻擊を開始せり

午前九時廿分第二大隊を軍の總豫備隊に殘し第一、第三大隊及機關砲小隊を率

ひ肯金山の西麓の凹地を經て金州城東南角に向て前進し無名地北方部落に開進し第一大隊を第一線に第二大隊及機關砲小隊を第二線となして前進す此時南山東北端にある敵の機關砲は激しく我を射撃したる爲め既に若干の死傷を生したるも屈せす遂に第一大隊（鞍掛少佐）は午前十時三十分劉家店に達し第一旅團の右翼に增加し射撃を開始す

第三大隊長（岡野少佐）は其三中隊を率ひ第一大隊の左方に增加を命せられ前進を起す此時敵の射撃は益々猛烈となり死傷續出せしも各兵卒は最勇敢に前進し遂に第一大隊と同線上に第一、第十五聯隊の中間の位置に達するを得たり第十二中隊及機關砲小隊は歩兵第一聯隊の二中隊と共に豫備となり無名地東方獨立家屋に位置す聯隊の第一線の停止せし地點は敵を距ること約六七百米突にして殆んと據るへき地物なく唯畑地に伏臥しあるのみなるを以て敵は其機關砲を以て猛烈に之を掃射し爲に生する我損傷頗る大なり依て第一線の諸隊は漸次地物を求めて損傷を減せんことを勉め攻撃實施の時機の至るを待たしむ

午後一時三十分頃右翼隊豫備隊たりし第十二中隊及機關砲小隊は歩兵第一聯

隊の二中隊と共に午後二時廿分劉家店に到着し聯隊に復歸す

聯隊長は右翼隊長の命に依り第三、第十二中隊を突撃隊となし爾餘は悉く第一線に配列し機關砲隊と共に猛烈なる掩護射撃の下に敵壘に突入して之を驅逐せしめ併せて機關砲を沈默せしむるに決し突撃隊に告別の辭を與ふ辭氣悲壯激越士氣爲に百倍し勇躍して進出の時機を待つ

突撃隊に與へたる聯隊長訓示の要旨

上官の命を受け聯隊長は汝等の忠勇なるを信し最も名譽ある任務を汝等に與ふ即ち汝等は我攻撃に先立ち今より我前面に横はる鐵條網の空隙を通する二條の道路を突進し敵の第一の散兵壕に突入し我か攻撃を絶對に妨碍する處の敵の機關砲を沈默せしむるに力め以て我攻撃前進を誘發す可し抑も此命を受くるは聯隊の最大名譽にして畢竟汝等の忠烈と勇敢に基くものなり此任務を遂行せんには素より生還を期すべからす例令身は南山の露と消ゆるも此の赫々たる名譽は永く千載の後竹帛に垂れ其功績は遂に消ゆる時なからん是れ只に聯隊の名譽のみならす我帝國軍人の名譽なり汝等其れ猛進せよ

午後三時頃より歩兵第一線は射撃を開始し午後三時三十分頃我銃砲聲最も盛なり

同時に突擊隊は銃砲火を冒し進出す諸兵喊聲を發し其進出を勵送す第三中隊大崎大尉は先つ西方道路より第十二中隊蟻坂大尉は東方道路より突進せしも敵は機關砲を以て猛射し突擊隊は一進一止を以て奮進せしも其鐵條網の線に達せざる前既に將校は悉く死傷し下士以下も過半斃され多きものは一身にして十五彈を受け其他大部分のものは少くも二三彈を受けさるものなく無創のものと雖も再ひ起て前進するを得さる狀況となれり然れとも第三中隊に於て四五名第十二中隊に於て四五名或は疾走し或は匍匐し遂に鐵條網内に進入し國旗を振り殆と敵の散兵壕に達せんとせしも遂に敵彈に中りて斃るゝに至る壯烈悲慘の狀見るもの憤痛恨毛髮を立たしむ其志氣を尖鋭ならしめたる功績實に沒すへからさるものありとす

午後七時第四師團の一部南山の西側敵壘の最左翼に近迫し戰鬪甚た激烈にして敵は稍や狼狽の狀を呈し當面の敵亦動搖の狀あり於是第一線歩兵の全部及機

關銃は盛に射擊をなすと同時に一齊に前進し勇躍敵壘に突入し敵を驅逐し遂に午後七時廿分全く南山を占領

是より先軍の豫備隊として肖金山に位置せし歩兵第三聯隊第二大隊（一中隊欠）は軍司令官の命に依り第三師團最後の豫備として增加せられ師團長の命に依り英家屯附近に蔭蔭集合し命を待つ前面の敵の退却するを見るや獨斷を以て歩兵第六聯隊の中間に進入して敵を追擊し午後八時十分南山の北麓に達し大房身附近に退却する敵に向て追擊射擊をなして日沒に及へり

大隊長の獨斷動作は師團長の意圖に反せるものにして師團の嗣後の追擊を不完全ならしめたりと雖も其意氣の旺盛なるを知るへし

同夜聯隊は敵の構築せる散兵壕内に露營す

本日消費せし彈藥　十一萬八千九百五十四

戰死將校　五名　下士以下　六十一名

負傷將校　十一名　下士以下　二百五十五名　馬匹　一頭

生死不明　下士以下四名

俘虜　將校　一名　兵卒　十名（但俘虜は凡て重傷暫時にして悉く死亡せり）

同五月廿七日　聯隊（第二中隊欠）は歩兵第二旅團長中村少將の指揮下に復し追擊隊となり南關嶺に向て前進し午前十時三十分南關嶺東方高知に到着し三十里堡方向に對し警戒す

第二大隊は和尙島占領の目的を以て柳樹屯に向ひ前進す

同五月二十九日聯隊は師團の前衛となり第一大隊（一中隊欠）を前兵として午前八時南關嶺出發旅順街道を三十里堡西南方約四十吉羅米突の高地に向て前進し午前十時同地に着更に後革鎭堡東方標高95高地より其南方204高地線迄前進し第三第一大隊を第一線に第二大隊を豫備とし陣地を占領す

（軍は戰鬪後の整頓既に成り且此迄に於て知り得たる敵情及地形に鑑み安子山鷄冠山の線を占領する爲め前進するに決す）

第一大隊の一中隊は騎兵一分隊工兵一中隊と共に騎兵の支援隊となり前衛騎兵第一聯隊と行動す

五月三十日師團は安子山後方附近より西部王家屯附近を經て毛頭子峠南方約八百米突獨立標高二一三の高地に亘る間を占領し聯隊は師團の總豫備隊となり大幸寨子に宿營し爾來六月八日まで此姿勢にあり

六月一日金州附近の戰鬪に於ける我軍の大捷に對し　勅語を賜はる

勅語

第二軍は海軍支隊と協力し敵の死守したる金州城及其南方要害の地を力攻し遂に之を陷れ以て旅順口の咽喉を扼し且我野戰軍將來の行動の地歩を堅固ならしむ

朕深く汝等の忠勇を嘉し尙益々奮勵して終局の勝利を收めんことを望む

明治三十七年五月廿九日

奉答文

金州及南山附近の要地に據り堅固に防禦工事を施し巨砲を備へたる敵を擊攘し得たるは一に

陛下の御稜威の致す所のみ今や優渥なる聖勅を下し給ふ臣等恐惶感激の至りに

堪へす益奮勵して終局の効果を收めんことを期す

明治三十七年五月三十一日　第二軍司令官　男爵　奥　保鞏

皇后陛下の令旨

我第二軍は海軍支隊と協力し金州城を陷れ奮鬪猛進遂に其南方嶮要の地を略取したる趣　皇后陛下の懿聞に達し我將校下士卒の忠勇なるを深く御感賞あらせらる

明治三十七年五月廿九日

奉答文

軍の金州附近に於ける敵の陣地を略取したる趣聞召され優渥なる令旨を賜ふ臣等感激の至りに堪へす益々奮勵して最終の成功を期せんとす

明治三十七年五月三十一日　第二軍司令官　男爵　奥　保鞏

皇太子殿下の令旨

非常の決心と勢力とを以て防備堅固なる敵の陣地を攻陷し尚進みて金州半島の要地を略取したる我第二軍の勇敢なる行動を感賞す

奉答文

軍の金州附近に於ける戰勝に對し優渥なる令旨を賜ひ臣等感激の至に堪へす益々奮勵して最終の成功を期せんとす

明治三十七年五月三十一日　第二軍司令官　男爵　奥　保鞏

此日聯隊長は左の要旨の訓示を與ふ

去る廿六日金州及其東南方高地の戰鬪に於て汝等は能く上官の指揮號令に從ひ克く危險の地區に奔馳し殊に勇敢猛烈なる數回の突擊を敵陣の中堅に行ひ爲めに全線の突擊を誘發し遂に敵か數ケ月の日子と數多の勞力を費し遼東半島の咽喉鎖鑰と恃み堅固に死守せる陣地を一日にして陷るに至りしは深く汝等の忠烈と勇敢に由るものと信す殊に整然として亂れす從容として死地に行動し汝等か平素受けし教育を能く敵前に於て實現せしこと予及他上官の認むる所共に感賞

するに堪えたり捷報の至るや叡聞に達し畏多くも優渥なる　勅語を賜ひ終局の勝利を汝等の忠烈に恃ませ給ふ惟ふに獨日の戰は只其端緒を開きたるに過きす宜しく汝等一同は戰後の惰氣を生することなく各自衛生を守り苟くも疾病の爲に戰を離るゝことある勿れ過きし二十七八年の役此地一帶は惡疫蔓延し之れに斃るゝもの多かりし凡そ戰後に在ては惡疫の流行を來すものにして斯の如きは諸外國に於ても又其例を見ること多し今時恰も隆暑に向ふ正に身體の清潔に留意し飲食物を攝取し心身の健全を力め來る可き戰鬪に於て一令の下勇進奮鬪以て　聖旨に背くなきを期せよ

五月廿六日南山攻擊の際武功拔群にして衆の模範となすへき者に對し本日第二軍司令官より感狀を下附せられたるもの左の如し

感狀

歩兵第三聯隊第十二中隊

陸軍歩兵軍曹　森　德之助

右者明治三十七年五月廿六日南山攻擊の際將に最後の突擊に移らんとし彼我の銃砲火特に猛烈を極め死屍壘をなし光景最も慘憺たるの時に方り中隊長より撰まれて敵の陣地前鐵條網を以て夾める金州街道上に地雷の有無を探知すへきを命せられ奮然彈雨を冒して前進し鐵條網の線に到り其愈々地雷の敷設なきを確め國旗を頭上に建て危險なきを報し中隊をして突擊を決行せしめたり其所爲の勇敢壯烈なる他の模範となすに足る

明治三十七年六月三日　第二軍司令官男爵　奥　保鞏

感狀

歩兵第三聯隊第十中隊

陸軍歩兵一等卒　曾谷庄藏

右者明治三十七年五月廿六日南山攻擊の際先つ敵の陣地前に圍繞せる副防禦を破壞するにあらされは攻擊の進路を開く能はさる時に方り單身敵火の掃射を冒して奮進し小鋸を以て鐵條網の植杭を切斷すること二十餘本此間敵彈雨注視る

者之を危まざるなしと雖も悠然敵火を意とせざるものゝ如く全線突撃に轉するに至るも作業を繼續し以て突撃の進路を開けり其所爲の勇敢にして深沈なる他の模範となすに足る由て其武功を表彰す

明治三十七年六月三日　　第二軍司令官男爵　奥　保鞏

第四節　旅順方面

五月廿九日新に第三軍戰鬪序列を令せられ第一師團第十一師團は第三軍の隷下に入る

第三軍作戰の目的は成るへく速かに旅順を攻略し如何なる場合に於ても第二戰の後方に臨上よりする敵の危害を及ほさざるに在り

軍司令官陸軍大將乃木希典六月上旬を以て金州城に入る

六月九日より同月廿日に亘り聯隊は師團第一線左翼隊となり利家屯西北方高地を守備す十二、十三の兩日敵の來襲を受け之を撃退す

少尉薄井良介十三日敵襲に際し奪取せられたる下士哨の位置を恢復せん爲め最も勇敢に突進し措置適當なりしも惜むへし胸部に貫通銃創を受け戰死を遂けたり

六月廿一日より七月七日に亘り師團の總豫備隊となる

七月廿日第九師團の大部金州に到着す廿二日第一師團と第九師團との占領地域を左の如く定めらる

第一師團　案子山後西方より盤道東北標高300に亘る間

第九師團　第一師團の左翼より第十一師團の右翼劍山368の高地に亘る間

廿三日守備線を第九師團と交代し般家屯附近に露營せり

此より先き六月十五日第二軍は北進途上得利寺に敵の南下軍を破り遂東島に於ける我立脚地を愈堅固ならしめ又救援の望なからしむるに至れり

六月廿一日大山元帥は滿洲軍總司令官に兒玉大將は總參謀長に補せられ六月廿三日以後戰地にある諸軍を統率せらる

一　双臺溝附近戰鬪

七月廿六日軍は本日より前面の敵を攻撃し我第一師團は双臺溝方面の敵を攻撃す師團の左翼隊の軍隊區分及任務左の如し

左翼隊

歩兵第二旅團(一大隊缺)
騎兵半小隊
野戰砲兵第一聯隊第二大隊(一中隊缺)
工兵第三中隊
衛生隊半部

任務　左翼隊は第九師團に連繫して溝口北方約廿米突の高地より其西北方271及其東北端間の敵を攻撃するに在り

午前四時標高100高地南方谷地に集合を了り聯隊第一大隊は牧城南溝北方標高244の高地を占領すへき目的を以て前進す午前八時廿分砲戰開始聯隊は第二大隊を第一線として前進す敵は頑強なる抵抗を試み且地形峻嶮攀登頗る困難なりしも勇を鼓して正午豫定の高地を占領す

戰死　將校　一名　下士以下　三名
負傷　將校　一名　下士以下　九名
消費彈藥　三二、七一四發

二　對面溝南方高地附近の戰鬪

七月廿七日師團は本日更に攻撃を續行す

左翼隊は標高271高地東北端に向て攻撃す第一大隊は歩兵第二聯隊に連繫し標高178と244の中間凹地より271高地東北端に向ひ第二大隊は凹字形山高地に向ひ攻撃す此日第三大隊は旅團の豫備隊たり

一　標高271高地方面　(廿七日の情況)

廿七日午前五時前哨たりし第一大隊を集合し午前六時第二中隊を第一線とし先つ石山溝南方高地を占領し其東方高地に一小隊を派遣して第二大隊の方面と連繫を保持せしめ砲撃の效果を待ち右翼歩兵第二聯隊の前進を待てり

午後零時四十分歩兵第二聯隊は271高地山腹に向ひ聯隊は其東北突出部に向て前進す第一大隊は第一、四中隊を第一線とし標高271高地及其東南方高地一帶より の銃砲火を冒し猛烈に突進し高地基脚に達す此時第二聯隊の左翼我攻撃の進捗

を知りて前進を開始す聯隊は高地脚に隊伍を整頓し急峻なる斜面を攀登し大尉土谷正太郎突擊隊の先頭に在り第一の占領旗を壘頭に立て續て敵壘に突入したるも該高地の敵は依然として頑守し其陣地に達するも唯一條の山脊を通する狹小なる地區存するのみにして兩側斜面極めて峻嶮晝間の近接困難なるを以て夜襲を以て攻略するに決せり

二　凹字形高地方面　（廿七日の情況）

第二大隊は聯隊の命令に基き第六中隊をして標高244高地西方約八百米の高地を占領せしめ第一大隊の攻擊を援助せしめ各中隊は敵の銃砲火を冒し逐次前進す午前九時五十分第九師團方面凹字形高地東斜面を前進しあるを知り第七、第八中隊を前進せしむ第八中隊は命令の到達前既に凹字形高地北端を目標として急斜面を攀登し第七中隊亦其右翼に連繫して前進す此間敵の銃砲彈集注し第八中隊の損傷甚しく中隊長守長大尉小隊長荒井少尉負傷し寺田少尉戰死するに至れり然れとも勇を鼓して前進し敵前に先行せる斥候既に該高地北端に國旗を樹つ

第七、八中隊を其位置敵に近接し兩側面及岩石上より猛射を蒙りしも器具を用ひ或は石を積て僅に遮蔽し夜十一時第五中隊の其位置に到着するや協力して辛ふして其陣地を固守して夜を徹するを得たり

第六中隊は271高地を距る約六百米突の地に前進し工事を開始し終夜銃火を交へつゝ天明に及へり

戰死　歩兵少尉寺田行藏　下士以下　八名

負傷　歩兵大尉守永彌惣次　歩兵少尉荒井条八　特務曹長中尾干城

特務曹長立石光三　下士以下四十七名

消費彈藥　八八、六七五發

三　標高271高地方面　（廿八日の情況）

七月廿八日午前二時271高地攻略の目的を以て少尉駒ヶ嶺忠男以下二十八名を率ひ潛行して奇襲を行ひたるも地形嶮惡にして且優勢なる敵兵現存し勇奮格鬪遂に少尉以下過半壯烈なる最後を遂げ目的を達することを得さりしも敵の志氣

を挫折せしめ著しき打撃を與へたり

午前九時砲撃開始と同時に前面の高地の敵退却の狀あるを認め第四中隊の一部前進し旅團の豫備隊より該高地に派遣せられたる第十、第十一中隊協力して271高地を占領

第九、第十二中隊を以て其西方標高242の高地を占領せしめ第一大隊及機關砲隊は現在の陣地より該高地の敵を射撃し双臺溝方面の敵も漸次退却せり

四　凹字形高地方面（廿八日の情況）

第二大隊は夜其陣地に在りて終夜敵と銃火を交へ彈藥缺乏を告げ苦闘を極む天明と共に彼我再ひ猛烈なる銃火を交換す午前八時敵退却の狀あるや第九師團の一部兵と共に突撃して該高地を占領す彈藥空乏辛ふして第三十五聯隊第四中隊の携帶彈藥より補給を受け全線擧て追撃射撃を施行し多大の損害を與へたり

此に於て戰闘三日間に亘り殊に凹字形山の如き嶮崖にして攀登殆と不可能の地を超へ終日終夜敵と甚た近く相對峙し奮闘勇進遂に敵を驅逐して凹字形山より271高地に亘る一帶を占領せり

戰死　歩兵少尉駒嶺忠男　下士以下三名

負傷　下士以下二十五名

消費彈藥　三七、七六八發　損失兵器　小銃　六挺

第二大隊は凹字形山占領に對し軍司令官より左の感狀を受く

感狀

歩兵第三聯隊第二大隊

明治三十七年七月廿六日より同廿八日に亘る旅順要塞前進防禦線の攻撃に於て敵は山地の險に據り且堅固の工事を以て一層其陣地を鞏固にせり而して其鎖鑰地たる凹字形山は特に嶮崖にして攀登甚た困難なり歩兵第二大隊は廿七日凹字形山占領の任を受くるや該山の東面より攀登し其東南面よりする第九師團の攻撃部隊と協力し巧に死角を利用し嶮峻を分進し以て敵の集注する銃砲火を避け同日夕敵壘の一部を奪取し近く敵と相對して山腹に徹宵し翌天明機を見て遂に

敵壘を攻略せり歩兵第三聯隊の第二大隊か能く連日の戰鬪に堪へ而かも機に乘する敏活の動作に依り其任務を遂行したるは寔に感賞するに足る

明治三十七年八月十九日　第三軍司令官陸軍大將男爵乃木希典

第五節　火石稜北方高地戰鬪

同七月三十日聯隊（第三大隊欠）は午前三時三十分長嶺子を發し土城子南方一帶の高地に向て前進し午前六時十分土城子を占領す次て午前六時五十分歩兵第二聯隊は旅順街道の西側より歩兵第三聯隊は東側より火石稜北方高地を攻擊す八時四十分より敵は漸次退却し午前九時全く所命の各高地を占領せり此日第三大隊は右翼隊長の直轄となる

師團は攻圍線の編成を開始し聯隊は右翼地區隊に屬し現在陣地を堅固に守備し八月十八日に至る

戰死　下士卒　一名

負傷　歩兵中尉手塚魁三　下士以下　一六名

消費彈藥　五、〇八六發

俘虜　兵卒　一名

戰利品　小銃　三挺　彈藥車　一輛　砲彈　五三

八月十六日師團通報要旨

一、今朝山岡參謀を軍使として敵の要塞前に差遣せり其目的左の如し

其一、我　大元帥陛下は至仁の聖旨を以て旅順要塞内にある婦人、小兒、僧侶、中立國の外交官觀戰將校等にして我鐵火の害を避けんとするものを救護すへく命せらる仍て之を要塞司令官に告知する爲め

其二、勸告書を送り要塞内に在る陸海軍に開城を促す爲め

去月廿六日來の戰捷に對し左の勅語並に令旨を賜はる

勅語

第三軍は旅順要塞の前進陣地に對し屢々嶮惡を冒し劇戰數日に亘り遂に敵を其本防禦線内に擊退せり

聖深く其勇武を嘉す

軍司令官の奉答文左の如し

奉答

旅順要塞攻撃の準備戰に於ける戰捷に對し特に　優渥なる勅語を賜ふ感激に堪へす　希典等　益々奮勵誓て軍の任務を達成せんことを期す

令旨

第三軍は旅順要塞の險を冒し連日猛撃漸次其功を奏する趣

皇后陛下の叡聞に達し我將校下士卒の忠勇なるを深く　御感賞あらせらる

奉答

旅順要塞攻撃の準備戰に於て敵の第一線を撃攘したる戰捷に對し特に優渥なる令旨を賜ひ恐懼に堪へす　希典等　益奮勵誓て軍の任務を達成せんことを期す

右謹て奉答す

第六節　第一回總攻撃

八月十一日滿洲軍總司令官は長し大元帥陛下の至仁の聖意を攻圍軍司令官乃木大將に傳ふ

十六日軍使山岡參謀聖旨並勸降書を要塞參謀長に進達す翌十七日　聖旨に辭し雖く又勸降に對しても之を拒絶せり

八月十九日を以て第一回の總攻撃を開始す右翼隊たる第一師團は標高一七四の高地より敵の左翼を脅威し中央隊たる第九師團は八里庄五家房北方高地より玉家甸附近を經て小孤山西麓に亘る高地に進み左翼隊たる第十一師團は東鶏冠山北砲臺を攻撃す

第一師團の軍隊區分左の如し

右翼隊司令官　友安少將

後備歩兵第一旅團

騎兵半小隊

中央隊司令官　山本少將

歩兵第一旅團（歩兵第十五聯隊第一大隊欠）

騎兵半小隊

左翼隊司令官　中村少將

歩兵第二旅團（歩兵第二聯隊第一大隊欠）

砲兵隊長　兵頭大佐

野戰砲兵第一聯隊

野戰重砲兵第三中隊

總豫備隊

歩兵第十五聯隊（一大隊缺）

歩兵第二聯隊第一大隊

騎兵第一聯隊約六小隊欠

工兵第一大隊

一　水師營南方高地攻擊

八月十八日聯隊第二大隊欠工兵一小隊中小隊欠及機關砲第二小隊一分は聯隊長の指揮に屬し水師營北方高地より後八里庄西方高地に亘り攻圍線を進むる目的を以歩

兵第二聯隊の左翼と連繫し午後九時四十分第一大隊は李家屯を第三大隊は水師營北方高地を占領し工事を施す十九日前夜の位置に在て警戒す

同廿日水師營南方高地の堡壘團を奪取するの目的を以て午前四時運動を開始し探照燈に探照せられつゝ一進一止連繫と方位を保ち水師營北端の敵の警戒兵を驅逐し午前五時兩大隊は水師營及水師營西溝南端を占領す

兩大隊より歩兵の一部及工兵全部を先遣し鐵條網破壞に着手したるも敵に發見せられ鋭意其作業に努力したるも若干の破壕孔を開きたるのみにして遂に充分の目的を達するを得す兩大隊は先つB堡壘に向て攻擊を開始したるも時既に天明に達し我前進地區は銃砲彈の集中する處となり死傷續出し損害多くして志氣愈揚り豫備隊を增加すると共に更に突進したるも既に過半の幹部を喪ひ殊に兩大隊長較掛岡野少佐負傷し我と連繫して龍眼北方高地攻擊の歩兵第三十六聯隊も其前進を中止したるを以て該方面の敵は我第三大隊の左側背を猛烈に射擊し死傷益々續出し情況慘憺晝間の攻擊不可能なるを以て中止し日沒を待つに決せり時に午前九時なり

同廿一日第三大隊下士卒若干に工兵を附し鐵條網破壞隊を編成し午前二時前遣したるも既に敵の發見する所となり猛烈なる銃砲火を受け多大の損害を受けたるも屈せず鋭意勇奮且つ戰ひ且つ破壞し辛くも其目的を達するや午前二時三十分各隊は運動を開始し第三大隊（第十二中隊、第十中隊欠）及工兵隊はB堡壘正面より第一大隊（第四中隊欠）はB堡壘西側散兵壕前約百五六十米突迄辛ふして前進し得たるも鐵條網附近に至るや敵は猛烈に機關砲を以て進路を掃射し爲めに突擊隊の大半を損傷し前進稍や躊躇の狀あり第三大隊長代理弘中大尉は更に自ら一中隊を率ひ突擊隊を推進して鐵條網内に突入し志氣を皷勵せしも重傷を蒙り將校殆と斃れ死傷相踵き復起つこと能はす突擊隊中の若干は外壕に侵入せしも壕深く幅廣く傾斜急峻攀登困難殊に壕底脛を沒するの貯水あり正面より突入すること殆と不可なり

此を知るや第一大隊長代理土谷大尉は更に敵壘西側に向て兵力を增加し咽喉部に迫らんとしたるも敵の猛烈なる射擊の爲め如何ともすること能はす一時攻擊を中止す午前七時砲擊の成果を待て再行すへき命を受け午前八時頃更に敵壘左側に向て前進中93高地より左の通報あり

B堡壘東方凹地には敵の優勢なる歩兵部隊潛伏し其前方頂界線の後方には機關銃二三ありと一時前進を中止し偵察中攻擊を中止すへき命に接し日沒を待て水師營南端に陣地を占め徹夜工事を施行すると共に死傷者を收容せり

兩日の戰鬪に於ける死傷並に消費彈藥左の如し

戰死

歩兵大尉弘中藤吉　歩兵少尉樂谷秀吉
歩兵少尉齋藤文六　特務曹長山本幾業　下士以下三六名
馬匹一頭

負傷

歩兵少佐岡野敏彰　歩兵少佐鞍掛起英　歩兵大尉山本正熊
歩兵中尉眞々田彰義　歩兵中尉篠崎宗吉　歩兵中尉久松省三
歩兵中尉網野善一　歩兵大尉三根昇一　歩兵少尉中川尙次
歩兵少尉吉田佐郷　歩兵少尉野田章平　歩兵少尉桑川淺一郎
歩兵少尉志村正吉　特務曹長岡野新三郎　特務曹長野口幸吾
特務曹長佐藤隆助　下士卒以下二七二名

生死不明　歩兵大尉川崎好次郎　歩兵大尉山本　和　歩兵少尉石川　佐
特務曹長森山由太郎

消費彈藥並損失　一二〇、〇四九

二　三里橋北方高地戰鬪

八月廿日第二大隊は左翼隊の豫備隊として水師營太西溝附近に位置す午前五時三十五分第一線歩兵第二聯隊の攻擊前進を援助する目的を以て第五、第八中隊の各一小隊を以て太西溝西南方約三百米突の丘阜を占領し標高39高地に向ひ射擊を開始せしめ午前六時十分更に第六中隊をして水師營西溝東側高地を占領し水師營南方高地に向ひ攻擊中なる聯隊の主力を援助せしむ

午前七時廿分93高地西北山巓にありし敵は退却し歩兵第二聯隊の一部之を奪取したるを以て第六中隊を除く外舊開進地に集合す

午後七時大隊は93高地西北山巓占領の歩兵第二聯隊と交代し爾後諸隊の攻擊進捗に伴ひ該高地を占領すへき命を受け依て第六中隊を現在の守備に任し午後十時舊位置を發し93高地西北麓に開進せり此時既に93高地に在りし歩兵第二聯隊の二中隊は敵の頻次の逆襲に困憊し來援を求むること頻りなり大隊長代理河西大尉は直に第八中隊を率ひ次て第五中隊を招致し決然今や逆襲せ、敵中に突入せり會々夜は暗く敵は巧に其熟知せる陣地の内部に隱顯出沒し彼我の劍戟相摩し混戰奮鬪遂に敵を擊退せり

第五中隊の陣地に到着せるや之か占領を確實にし僅々數十米突前にある交通路に固着せる敵と對峙して夜を徹せり

廿一日午前六時第六中隊の一小隊を殘置せしめ殘餘を大隊主力の位置に招致せり午後一時頃より椅子山方面より重輕砲彈を集注し損害殊に甚し張家屯附近を寺溝方向に前進せし敵の歩兵約三百は巧に死角を利用し近く我眼前に肉迫し彼我射擊を交換す加ふるに近く水師營南方敵壘より機關砲の斜射を受け死傷續出苦鬪を極む敵は友軍の銃砲火を恃む逆襲に轉せんとする時恰も干大山にある我砲兵は敵に砲火を雨注するあり其逆襲を挫折せしめ遂に潰走するに至れり

敵兵撃退後大隊長代理河西大尉は敵情偵察中敵の狙撃二彈を受け不幸にして重傷を蒙り西田大尉代りて大隊を指揮す

兩日に於ける死傷等左の如し

戰死　歩兵中尉水野正武　歩兵少尉高野省三　特務曹長日坂平太郎
特務曹長立石光三　下士以下四九名　馬匹一頭

負傷　歩兵大尉河西終藏　歩兵中尉宗像重吉　特務曹長野澤嘉正
下士以下一三三名　馬匹一頭

生死不明　下士以下一名

敵の遺棄せし屍體及鹵獲品左の如し

敵死屍　大尉　一　下士以下　三七

鹵獲品　機關砲　一　小銃　六一　銃劍四四挺

消費彈藥　一九四、三七三發

八月廿、廿一日の戰鬪に對し軍司令官より左の感狀を受く

感狀

歩兵第三聯隊第二大隊

明治三十七年八月廿日夜敵兵三里橋北方高地を逆襲し我兵苦戰するに方り之と交代せんか爲め奮然敵中に入り混戰格鬪して之を驅逐し爾後猶數回敵襲を防拒し三面砲火を受け死傷續出するも爲めに毫も逡巡せす遂に克く旅順街道の一要地を維持したる其動作勇敢其功亦顯著なり

明治三十七年九月一日第三軍司令官陸軍大將正三位勳一等功二級男爵乃木希典

八月廿四日第三軍に左の勅語を賜はる

勅語

旅順要塞本攻撃開始以來晝夜此堅城決死の守兵は肉薄し遂に其二壘を拔き益々奮進の途にありと聞く炎熱の候に際し連日の困苦轉た軫念に堪へす

朕深く爾將卒の勇武に信賴す爾將卒一簣夫れ九仞の功を全ふせよ

明治三十七年八月廿三日

八月廿八日皇太子殿下より左の令旨を賜はる

皇太子殿下令旨

連日連夜敵の堅壘を攻撃し不屈不撓遂に其一部を奪取したる第三軍將卒の極めて勇敢なる動作を嘆賞す

明治三十七年八月廿八日

八月廿九日軍司令官より左の通り訓示あり

過般滿州軍總司令官より彈藥節約疾病豫防に關し左の訓示あり各部團隊長は宜しく其趣意を體し部下を戒飾して缺漏遺洩なきを期すへし

一、速射銃砲發明ありてより射擊の速度著しく增大し之を既往の戰役に徵すれは亂射の弊に陷り易き傾きあり限りある製造力と運搬力とを以て無限の需要に應せんこと殆と不可能の事に屬す今後の戰鬪に於て萬一決戰射擊の時期に際し供給の續かさる如きことあらは實に由々敷大事にして寒心に堪へさるものあり宜しく各級指揮官をして爰に留意し確乎たる効力を認むることなく亂射に陷る如きは嚴に戒飾して彈藥の節約を全くし以て決勝の需要に應せしめられんことを要す

二、內外古今の戰史に徵するに疾病殊に傳染病に因る慘害は却て戰鬪場裡の損害より甚しきを見る大に戒慎すへきことゝす今や雨期正に過きんとす滿州の野常に雨期後に於て惡疫の發生すること多きは晨に經驗する處たり各軍に於て其衛生機關を督勵し是等の豫防に遺算なかるへきは嚴の信する處なり我作戰の前途尙遼遠なるを思へは轉た焦慮に堪へさるものあり茲に聊か所感を陳し各官の注意を促かさんとす各官宜しく其部下各機關を督し全軍衛生上毫も遺憾なきを期せよ

九月九日今般

大元帥陛下より宮本侍從武官

皇后陛下より桂侍醫

皇太子殿下より尾藤東宮武官を特に當軍に差遣さる其思召別紙の通に付此旨部

下一般に無漏傳達すへし

追て御下賜の酒肴拜受に關する時日場所等は軍經理部長をして之を通知せしむ

大元帥陛下　皇后陛下　皇太子殿下　思召の覺書

先般來當方面の前進防禦線を驅逐攻略して敵を本防禦線内に壓迫し炎熱の候を冒し勇猛無双の本攻擊を實施し今や司令官以下將校下士卒等尚日夜奮戰の段苦勞に被　思召現下に於ける一般の狀況を視察し且傷病者をも慰問し歸朝の上詳細に之を復奏すへしとの　聖旨を奉して參營す尚司令官以下一般聊か陣中の勞を犒ふ爲に左の酒肴を賜はる

清酒　五百樽

海苔　二萬帖

皇后陛下にも大元帥陛下と御同樣に先般來炎熱の砌長々困苦缺乏に堪へ容易ならぬ苦戰を繼續したる段深く苦勞に　思召され且傷病者に就ては殊更に　御心を懸けさせられ特に侍醫を遣はし親しく創傷の模樣を視察せしめらる尚治療を加へて一日も早く全快せんことを望ませらる

皇太子殿下にも　兩陛下と同一の　思召を以て東宮武官を差遣はさる

第七節　第二回總攻擊

攻圍軍は戰略第一回の强襲を以て占領したる二砲臺盤龍山東西砲臺を據點として第二回の攻擊は正攻法を用ゆるに決せり各隊は歩工兵を使用し日夜電光形の攻路を開鑿す日を追ふて作業大に進み且諸隊の準備渾て完整したるを以て九月十九日第二回總攻擊を開始し右翼隊(第一師團は)標高二〇三高地附近の堡壘並に水師營西南方堡壘を中央隊(第九師團)は龍眼北方高地の砲臺を攻擊し左翼隊は前面諸堡壘に對し之か豪制運動に任せり

一　水師營南方高地敵壘攻略

九月十一日軍司令官より左の訓示を受く

訓　示

茲に我軍の將卒に告く夫れ旅順の要塞は敵軍の恃て以て難攻不落と爲す所而も諸子の勇武なる連日連夜攻擊以て業已に其第一及第二防禦線を略取し進て其

本郭に肉迫せり

是に於て我　大元帥陛下皇太子殿下は深く諸子の忠誠を嘉みし曩に優渥なる勅語及令旨を賜ひ今又侍從武官東宮武官を派して諸子の勞を犒はしめらる我軍の光榮亦餘ありと謂ふへし獨り感む諸子の戰友にして敵彈に斃れ此天恩を拜する能はさる者鮮しとせさるを諸子夫れ更に感奮興起せすして可ならんや希典固より信す諸子の堅忍不拔なる一難を經る毎に猛氣百倍し來て遂に九仞の功を一簣に全ふせんことを

諸子の新戰友陸續來着し攻城材料亦漸く以て多きを加へつゝあり而して對壕作業は刻々其歩を進む敵は窮鼠の頑を以て殘壘を死守するも已に其圍郭の二壁壘を失ひ兵力は日に減衰し彈藥は盡くるに垂々とす諸子にして耐忍健鬪し機を見て更に絶大の打擊を加へんか其運命や知るへきのみ惟ふに旅順陷落の遲速は全般の戰局に關する大なり而して北方の皇帥は既に敵の大軍を遼陽に擊破し宇内萬邦の視線一に此旅順に集まれり此時に方て我軍之か合圍の任に當りたる悃に軍人の素懷にあらすや希典望むらくは諸子と共に奮て我軍の威武を發揚し速に攻拔の功を奏し以て天恩に答へ奉らんことを

第三軍司令官男爵　乃木希典

九月十九日聯隊は水師營南方高地の敵を攻擊する爲め攻擊計畫に基き部署す其軍隊區分左の如し

B堡壘突擊部隊　歩兵第一大隊（第四中隊欠）　工兵三中隊（一小隊欠）

第一中隊を第一梯隊第二第三中隊を第二梯隊とす

外部攻擊部隊　第四第十一中隊

左翼警戒隊　第十二中隊及機關砲

豫備隊　第三大隊の二中隊及工兵一小隊

午後四時迄に突擊隊第一梯隊は中間歩兵陣地に外部攻擊部隊たる第四中隊は中間歩兵陣地後方西方攻路内第十一中隊は東方攻路の東側道路に沿ふたる地隙附近に突擊第二梯隊は第四中隊の後方攻路内に左翼警戒隊及機關砲は水師營東南端に豫備隊は攻路起點を右翼とし第一歩兵陣地に四十七密速射砲は水師營に部署を終り砲戰の效果を待つ

歩兵第三聯隊第二大隊は其二中隊を豫備陣地に配備し歩兵第二聯隊第三大隊は標高93高地にありて機關砲二門及其歩兵の一部を以て聯隊の攻撃を援助し歩兵第二大隊（二中隊欠）は左翼隊豫備隊として水師營太西溝附近に位置す

午後二時三十分砲戰開始碾盤溝に在る海軍十二珊加農及東北溝の重砲の威力強大にしてB堡壘内の敵兵或は附近の土石と共に飛揚し壯烈を極む

午後五時B堡壘凸角胸墻の一部破壞せられ敵の動搖するを見るや直に突撃を令す此に於て外部攻撃部隊より攻撃を開始し續て突撃部隊第一梯隊の各縱隊は各先頭に撰拔兵若干及一部の工兵に爆藥を携帶先行し續て中隊長土谷大尉第一突撃部隊を提げB堡壘に邁進したるも小銃及機關銃の掃射と各砲臺よりの砲撃の爲め死傷續出す次に第二梯隊突進したるも瞬時にして其過半を失ひ辛ふして外壕に飛入りしものは爆彈を以て胸墻の破壞を試しも爆彈盡き僅か不發火の敵爆彈を投擲して死戰したるも目的を達せす勇敢なる士卒の大半は堡壘よりする爆裂彈及外壕の側防火に依て斃るゝに至れり依て一時攻撃を中止す午後七時五十分敵の胸墻の修覆を努むるや機に乘し第二回の突撃を決行したるも前突撃と同一狀況の下に憾て呑て攻撃を中止するの止むなきに至れり

廿日午前二時旅團の豫備の中より第七中隊を增援せられたり

砲兵は拂曉を待て砲撃を始め午前八時頃に至り彼我銃砲彈の交換最も激烈にして敵の一彈は軍旗前數歩の地に落下し其破片桿頭御紋章の下部約二寸の處を切斷するに至れり

聯隊長は第二、第四、第十中隊を第一大隊長の指揮下に屬せしめ第七中隊と共に外部攻撃に任し敵壘西側散兵壕を占領し第一中隊は敵壘の東側より第三中隊は堡壘西側より突撃せしむるに決し豫備二中隊（第九中隊一小隊欠第七中隊）及工兵小隊を突撃陣地に招致し準備す

漸次戰機熟し敵兵の動搖を見るや直ちに攻撃す勇猛なる我將卒は奮戰勇躍敵壘に肉迫し彈丸雨飛死傷續出悲慘の極に達す第七中隊を一小隊欠正面に增加し激戰格鬪午前九時廿五分B堡壘を占領す

旅團の豫備隊たりし第二大隊は聯隊長の指揮下に復歸し第九中隊一小隊欠及第七中隊の一小隊をしてA堡壘を占領せしめ續て第二大隊長第五中隊を指揮して該

高地の占領を確實にす第三大隊長は第十一、第十二中隊及第九中隊の一小隊を率ひ堡壘を占領し午前十一時四十分水師營南方高地を占領せり

兩日の戰鬪に於ける戰死等左の如し

戰死　篠田大尉　坂元中尉　山口中尉　鈴木、山口、中村特務曹長
清水見習士官　下士以下一三六名

生死不明　下士以下三名

負傷　將校一九名　下士以下三八一名

消費彈藥　九四、六六九發

鹵獲品　十二珊臼砲　二　八珊野砲　一　六珊野砲　二　機關砲　五
五十七密速射砲　二　其他多數

九月廿一日水師營南方高地攻略に對し感狀を授與せらる

感狀

歩兵第三聯隊

明治三十七年八月廿、廿一日工兵第三中隊と共に水師營南方高地の堡壘を攻撃し勇戰奮鬪夜を日に繼ぎ將校盡く死傷するに至る爾來鋭意對壕作業に從事し尋て九月十九、廿更に突撃を行ふこと數回勇敢壯烈の戰鬪を以て遂に敵の三壘を拔き旅順要塞の一要衝を占領したり其功績偉大なりとす

明治三十七年九月廿一日

第三軍司令官陸軍大將正三位勳一等功三級男爵乃木希典

廿日水師營南方高地奪取後該地の守備に任し繼て水師營太西溝西北方標高101高地より李溝東方標高93高地を經て水師營南方高地に亘る攻圍線を守備し十月廿九日に至る

第八節　第三回總攻撃

軍は十月廿六日より第三回總攻撃を開始す

第九師團は二龍山及P砲臺次て兩砲臺間に於ける後方一帶の高地を第十一師團は其以東東鶴冠山北砲臺及Q砲臺瘤山東鶴冠山砲臺を第一師團は松樹山砲臺次て其南方高地を略取すると同時に他の正面に於て敵を牽制す

聯隊は師團の命令に依り十月廿九日より現在の位置よりC堡壘東方鐵道線路迄を守備し前面の敵を牽制し工事を施す

甲は大小攻城砲及海軍砲を以て廿六日以來廿九日に至る迄連日敵壘を猛撃し其成果の熟したるを待て三十日午後一時より各縱隊齊しく突撃を開始し連續して三十一日に及ひ各隊は苦戦惨闘の限りを盡したるも不幸にして豫定の効果を奏することを能はす僅かに中央縱隊に於てP砲壘(一戸堡壘)を得左縱隊に於て東鶴冠山西北の敵壘(瘤山)を得たるに過きすして攻撃を中止するのの已むを得ざるに至れり

此時に方り露軍の第二東洋艦隊(波艦隊)は東に向て發航し日を期して正に旅順艦隊に合せんとし反之我海軍は開戦前より海上に遊戈すること既に一年此間或は旅順口の封鎖勤務に疲弊し或は海戦に從事するの等艦船の修繕に要すること多く之を完了するにあらされば其戦闘力を發揮せしむることを能はす而かも旅順口に在る露軍艦隊は尚極めて有力にして機を見て出撃せんとするものゝ如く爲めに我艦隊の行動又意の如くならす形勢實に暗憺たり

十一月廿二日午後六時三十五分發電報を以て山縣參謀總長より乃木第三軍司令官へ左の勅語を傳達せらる

勅語

旅順要塞は敵か天嶮に加工して金湯となしたる處なり其攻略の容易ならさる固より怪むに足らす

朕深く爾等の勞苦を察し日夜軫念に堪へす然れとも今や陸海軍の狀況は旅順攻略の機を緩ふするを得さるものあり此時に當り第三軍總攻撃の擧あるを聞き其時機を得たるを喜ひ成功を望むの情甚た切なり爾等將卒夫れ自愛努力せよ

奉答

旅順要塞總攻撃に際し勅語を忝ふす臣希典等感激恐懼に堪へす將卒一般深く聖旨を奉體し誓て速に軍の任務を遂行せんことを期す

謹て奉答す

明治三十七年十一月廿二日　第三軍司令官男爵乃木希典

新鋭の第七師團第三軍の戦闘序列に入る

第九節　總攻撃の再興

軍は望臺一帶の高地を奪取するの目的を以て廿六日攻撃を再興し各師團は其攻撃地區に從ひ午後一時を期し松樹山、二龍山、東鶴冠山北砲臺及其附近舊圍壁に向て突撃を實施す

軍の特別豫備隊たる歩兵六大隊及工兵一小隊は中村少將（歩兵第二旅團長）の指揮に屬し水師營附近に位置す

一、三里橋北方高地攻略

十一月廿六日午後に於て左翼隊（歩兵第三聯隊、後備工兵小隊）は三里橋北方高地の敵壘を攻撃するの任務を受く

該高地攻撃は松樹山補備砲臺の西側より同砲臺に突入する特別豫備隊と密接の關係あるを以て其松樹山補備砲臺に達すると同時に攻撃を開始すべしとの命あり

午後六時攻撃部隊は攻撃準備位置に就き鐵條網破壊に從事せしめ極力其目的を達せんことを力めたるも敵の妨害甚しく各方面共死傷續出し未た目的を達せさる前午後九時廿分松樹山補備砲臺附近に激烈なる銃聲を聞き軍の特別豫備隊已に開戰したるものと判斷し直に攻撃に移れり

第一大隊（一中隊欠）及工兵一小隊（二分隊欠）は93高地の南方稜線より鉢卷山に亘る敵を攻撃し

第二大隊（一中隊欠）はA堡壘の西南方河流の右岸にある高地の敵を攻撃し

第三大隊（二中隊欠）は中央隊の左翼の前進に伴ひ其左翼に連繫し現在の守備地點と寺兒溝北方高地の中間に在る高地線に前進し寺兒溝北方高地の敵に對し牽制す

第一線の兩大隊は猛烈なる敵の銃砲火を冒し鐵條網の線に達し之を破壊して敵の散兵壕に突撃せんと力めたるも敵の銃砲火は益甚しく且爆彈の投下頻りにして死傷續出し容易に破壊の目的を達する能はす聯隊長は全滅を期して前進するに決し第一線大隊の備豫を增加せしめ百方前進を鼓勵せしも無數の爆彈雨下し銃砲彈の亂射に苦鬪を極む聯隊長豫備隊を提て最後の突撃を行はんとする時午前三時左の要旨の命令を受く

軍の特別豫備隊は午後十二時頃退却に就きC堡壘附近に收容せり

歩兵第三聯隊は夜中に敵壘を攻略し得されは拂曉前に攻撃を中止し可成敵に近く晝間支持し得へき地點に收容すへし

命令と現下の情況に依り聯隊長は一時攻撃を中止し更に鐵條網を破壊して再ひ突撃するに決し百方手段を盡したるも鐵條網の破壊意の如くならす攻略の成

算なきを認め死傷者を收容せしめ第一大隊は後方地隙内に第二大隊は收容中天明に達したるを以て一中隊半を鐵條網前約二十米突の掩壕に潛伏敵を監視せしめ他は敵軍の前營附近に收容することを得たり

戰死　大尉高石　稔　特務曹長柴崎忠三郎　下士以下六十名

負傷　少尉伊藤俊一　少尉中村証三　少尉早水源五

少尉鈴木貞市郎　特務曹長野川八郎二

生死不明　大尉久松省三　下士以下三八名

一、中村少將の決死隊（撰抜二中隊）

中村少將の指揮に屬する歩兵六大隊及工兵一小隊は各隊より撰抜集成せらる歩兵第三聯隊より二中隊を編合し其中隊は各中隊より撰抜したるものなり

撰抜第一中隊　中隊長　陸軍歩兵大尉　土谷　正太

同　豫備陸軍歩兵少尉　會澤金十郎

特務曹長　中尾　干城

撰抜第二中隊　中隊長　後備陸軍歩兵大尉　阿久刀川寛海

小隊長　陸軍歩兵少尉　阿部　六郎

豫備陸軍歩兵少尉　岸田　光一

後備特務曹長　河野　廣俊

外下士卒九十七名

同　長岡　爲治

外下士卒九十七名

十一月廿五日午後五時土谷阿久刀川兩大尉の指揮せる撰抜二中隊は軍服に代ふるに「ソリヤス」防寒襯衣の死裝をなし水師營東方谷地に集合し第一師團特別支隊に編合せられ支隊長中村少將の指揮下に入る軍司令官乃木大將臨て告す辭氣悲壯激越士氣爲に百倍す支隊長中村少將告示して曰く

枝隊の目的は旅順要塞を中斷するにあり一人たりとも生還を期すへからす予斃るれば渡邊大佐代るへし大佐斃るれは大久保中佐代るへし各級幹部は順次に代るへき者を選定し置け襲撃は銃劍突撃を主とすへし第一着の地歩を占領する

迄は敵の猛射を受くるも一發も應射すへからす故なく後方に止り又隊伍を離れ若くは退却する者あらは幹部に於て之を斬るへし

支隊は敵の不意に乘して先つ松樹山補備砲臺を取りて支那圍廓に達し能ふへくは白玉山に突擊を試み防禦線を兩斷して陥落を速かならしむる目的を有す

午後六時運動を起す此夜暗黑午後七時三十分先頭を以て辛ふして第二集合地たる松樹山砲臺西北斜面地隙に達す午後八時五十分松樹山西方谷地に達するや月將に出てんとし敵に發覺せらるゝ虞あるを以て支隊は補備砲臺西北角に向て肉迫せんとするや新砲臺及後方諸砲臺よりの射擊猛烈を極め我死傷算なし然れども毫も屈せず益々進て爆藥戰となり遂に突擊するや我死傷益々多く惡戰殆と其極に達す此の如きこと十時より十二時に亘る廿七日午前二時軍司令官より退却命令あり聯隊撰拔中隊は將校の大部下士卒の過半を失ひ殘員は夜半に至り聯隊に復歸せり

此戰鬪に於て撰拔中隊は將校の大部及下士卒の過半を失ひ其殘員は夜半に至り聯隊に復歸せり其死傷左の如し

戰死　大尉阿久刀川寛海　少尉岸田光一　少尉會澤金十郎　下士卒一名

負傷　大尉土谷正太　少尉中尾干城　下士卒七一名

生死不明　特務曹長河野廣俊　下士卒五〇名

費消彈藥　小銃彈三九、四三五發　機關砲彈二、〇〇〇發

九月中旬に於ける第十一師團方面二〇三高地攻擊は多大の犧牲を供したるも未だ目的を達せす今次十一月廿六日來の攻擊も遂に効果を奏せすして中止するに至れり

廿八日新に第七師團長代りて攻擊指揮官となり軍の總予備隊たる新鋭の第七師團の大部及第一師團を併せて攻擊す

廿八日聯隊は左翼守備隊となる其警戒地區約三千米突に達す連日突擊陣地の構成に從事す師團命令に依り第十一中隊は高崎山に至りて師團の豫備隊となる

十二月五日第七師團の二〇三高地西南部頂點に對し最後の突擊を決行するや現任務を續行する外第一線の兵力を增加し對面の敵を牽制す

午後二時三十分二〇三高地の陥落と共に三里橋北方高地の敵漸次退却す聯隊は直に追躡して該高地を占領す此間に於ける聯隊の損害は左の如し

戰死　將校七名　下士卒百五十一名

負傷　將校九名　下士卒三百十二名

清費彈藥　八六、五〇〇發

爾來聯隊は椅子山砲臺に對し攻略作業に從事す

十二月三十一日師團は左翼隊の主力を以て松樹山砲臺の胸墻爆發を行ひ之を奪取せんとするや前面の敵を牽制す

三、第十一中隊標高二〇三高地附近の戰鬪

十一月三十日午後七時師團豫備隊の命に接し高崎山に急行し隷下に入る

十二月一日午前三時命に依り海鼠山に至り歩兵第十五聯隊第一第二大隊長粟野少佐の指揮に屬し午前七時頃より標高二〇三高地攻擊の目的を以て前進中後備歩兵第一旅團長友安少將の命に依り寺兒溝西方約千米突の高地(俗稱赤坂山)攻擊をなす敵は標高二〇三高地南方斜面より機關銃を以て掃射せられ攻擊効を奏せず突擊を中止す

午後七時命に依り歩兵第十五聯隊第三大隊と共に標高174高地の守備に任せられ五日粟野少佐の指揮を脱し標高203高地西北方約七百米突の高地に至り警戒勤務に服す同日午後五時歩兵第廿五聯隊長渡邊大佐の指揮に屬し標高203高地北頂部附近の警戒に任し翌六日に至る間專ら工事並に彈藥の運搬に從事す

六日午前八時頃渡邊大佐の指揮を脱し齋藤少將の指揮下に入りて總豫備隊となり海鼠山西側に集合す午後八時頃再ひ歩兵第十五聯隊長粟野少佐の指揮下に屬し寺溝附近に位置す

七日午後現隊に復歸すべき命を受け水師營大西溝に至り聯隊に復歸す

四、旅順要塞の陷落及北進

明治三十八年一月一日守將ステッセル終に力屈し二日軍使來り水師營に於て會見旅順開城の議を結へり十年の星霜を積み巨費を投して天險に加工し難攻不落と稱せし世界屈指の大要塞も堅忍不撓勇敢なる我攻擊に堪へすして遂に降服せり

一月四日滿洲軍總司令官より第三軍に左の感狀を附與せらる

第三軍

感狀

昨年六月下旬以來旅順要塞の敵に對し長日月間堅忍不拔以て堅く破り强く擣き遂に本年一月一日敵をして力屈し開城の止むを得さるに至らしめ茲に旅順攻城の目的を達し有終の光輝を揚ぐ依て感狀を附與す

明治三十八年一月四日　滿洲軍總司令官侯爵　大山　巖

勅語

旅順は極東に於ける水陸の重鎭なり第三軍及聯合艦隊は協同戮力久しく寒暑を冒し苦艱を凌き勇戰奮鬪克く其鐵壘を奪取し堅艦を殲滅し敵をして遂に城を開き降を乞ふに至らしむ

明治三十八年一月六日

軍司令官の奉答文左の如し

奉答

旅順要塞の攻略に對し優渥なる　勅語を賜ひ臣希典等感激に堪へす謹て奉答す

師團は遼陽以南湯崗子以北の地區に集合するの目的を以て一月廿日より北進を開始す

一月廿二日歩兵第三聯隊野砲兵一中隊糧食縱列一個は第四梯團となり出發北進の途に上る金州、普蘭店、瓦房店、得利寺、蓋平、海城等の諸驛を經て二月六日鳳旗堡に着す此間多くは北風雪を卷き寒風膚に徹し最も困難を極めたり同日梯團の編成を解く

二月七日鳳旗堡を發し本家堡を經二月八日北邊墻子に宿營す

二月十日軍司令官の訓示

諸子は克く萬難を排し天下を目して以て金湯と爲し敵の稱して以て不落と爲し

たる旅順要塞を攻略せり其忠勇は世人の齊しく仰望する所にして予の正に嘆賞する所なり然るに今や戰局其地を變し將に平野に雄飛し戰役終局の勝敗を卜知すへき一大活動に參與せんとす抑も野戰の要塞戰に異なるは諸氏の素より熟知する所にして予の喋々を要せさる所なり然りと雖も軍の新任務は特に諸子の注意を喚起すへきものあり左に其大要を示し以て實踐を俟たんとす

一、詞を協同動作に藉り責を隣隊に歸せんとするは戰場の通弊なり宜しく自ら苦難を排して他を援ひ決して他の助力を期すへからす

二、勇往奮進は野戰に於て必勝を期する唯一の良法なり假令ひ之れか爲め一部の全滅を來すことあるも之に因り必ず全般の勝利を獲へし其長く戰場に停止するは徒らに損害を招き進勢を阻碍す故に寧ろ暴進の不利を招くも敢て遲疑の悔を遺す勿れ

三、彈藥を節約するは戰勝必須の要件なり然るに由來往々其實蹟を見さるものあり我軍の新作戰に於ては必すや其補給意の如くならさるものあるへし諸子能く此原則を勵行し遺憾なからしむるを要す

四、敵の斥候若くは小部隊に向ひ濫に射擊を開始すへからす寧ろ小敵を逸し大敵を獲ることを勉むへし

五、敵は優勢なる騎兵を有す故に軍の背後は不安なるを免れす然れとも敢て此に留意することなく進て困苦缺乏を冒し以て前の機を沮滯せしめさるを要す

六、既往の經驗に徵するに我軍は全數に於て優勢なる敵に對し戰場に於ける耐忍を以て常に勝を制したり然るに將來に於ける我軍の行動は亦た優勢の敵に遭遇することなきを保せす故に益々堅忍不撓の精神を發起し以て之を擊破するの覺悟なかるへからす

嗚呼我軍既往の行動は世界の膽視し他軍の刮目せし所なり然るに今復た全軍の勝敗を双肩に擔ひ戰局の大發展を促すへき新任務に服せんとす豈快ならすや諸子か勇進奮鬪以て各其任務を盡し既往の名譽を全ふするは予の信して疑はさる所なり願はくは最終の目的を達し以て諸子と共に戰勝の光榮を分たむ夫れ之を勗めよ

二月十四日夜敵の騎兵の大集團約八九千午後七時頃渾河左岸三家沃に達せり

との通報に接し聯隊は出發準備をなし後命を待てり

二月十五日午前零時　師團命令に依り聯隊長は歩兵第三聯隊（第一、第六中隊欠）騎兵第一聯隊（第二中隊欠）及野砲兵一中隊よりなる支隊を編組し三筋泡に向て前進し敵情を搜索して其退路を遮斷するの目的を以て午前三時五分警急集合す騎兵聯隊（一中隊欠）は午前六時出發南蒲河附近に向て前進す同六時十五分歩兵第二大隊（一中隊欠）を前衛とし爾餘は本隊となり出發午前九時南蒲河に達す

此時彼我の騎兵該村西方に於て衝突し優勢の敵騎より壓迫を受け漸次退却中なりしを收容し追躡せる敵騎を猛烈に射擊し西方に擊退し歩兵の一部を波涂泡方向に差遣す午前十一時該地の敵が西方に退却せり

敵の騎兵集團は遠く大烟角以北に退却し師團訓令に依り支隊は宿營地に歸還し編成を解く

二月十九日北邊墻子を出發黄土炊に宿營し二月廿六日に至る

二月廿二日軍總司令官訓示

一、近く目前に横はる會戰に於ては我は日本帝國軍の全力を擧げ敵は滿洲に用ひ得へき最大の兵力と思はるゝ軍隊を提け以て勝敗を賭せんとす是れ重要中の重要なる會戰にして此會戰に於て勝を制したるものは此戰役の主人と爲るへく實に日露戰爭の關ヶ原と云ふも不可なかられ故に吾人は此會戰の結果をして全戰役の決勝と爲す如く勉めさるへからす

二、此度の大會戰に對する希望既に第一項に述へたる如く然り故に我作戰の爲め取るへき方針も亦之に伴はさるへからす乃ち土地を略し壘塹を陷るは此大作戰方針の主眼に非す須らく可成多大の損害を敵に與へ敵をして復た起つ能はさらしむる如くせさるへからす

三、諜報の傳ふる所に依れは黑鳩禽大將は此度の會戰に於ては決して退却を許さす退却する者は日本兵の武器に斃れすして退走を罰する刀劍の錆となるへしと令したる由なり之をして果して信ならしめは彼も亦此度の會戰を以て最後の決勝戰と爲すや知るへし又敵の將卒にして果して黑鳩禽大將の精神を以て精神と爲す時は其交戰の頑强なるや推して知るへし否吾人は此頑强なる敵に遭遇するの覺悟を以て戰はさるへからす

四、頑強に戰ひたる敵をして敗退に陷らしむる時は之に損害を與ふるの劇甚なること戰理の自然なり然るに從來の經驗に依れは壘を守り壕に據りて頑強に否寧ろ執拗に防戰を交ゆるは彼の長所にして機敏なる活動を以て勝を制するは彼の短所なり是れ諸君の熟知する所にして予の喋々を恃たさる所なり夫れ然り故に我は彼の長所をして其用を爲さしめす其短所をして益々短ならしむる如くせさるへからす他なし敵壘塹に據るに遭はゝ腕力を以て之を攻略することを避け其側背に出て之をして退却に餘儀なくせしめたるは今日迄の經驗明瞭に之を示せり扨敵の陣地に遭遇し直に之を攻擊し其頑強なる抵抗を受け我損害の大なるに及ひ始めて陣地の側背に力を用ゐんとするは交戰者の常勢とは云ひなから其施策既に遲しと云ふへし今日迄の經驗に依るに此點に於て乍遺憾欠如たる所なしとする能はす而して此常勢に陷る所以は要するに偵察の充分ならさるに歸因せすんはあらす各司令官及軍隊指揮官は深く偵察戰に注意し速に効果を利用し攻擊方向を決定し之を實施せさるべからす諸君請ふ三省せよ

五、沙河の會戰の初めに當り予は各團隊間の協議は却て讓り合の弊を釀生することを諸君に注意し置けり此度の大會戰に於ても各團隊の任務上互に協議するの餘地なき如く作戰を指導せられんことを重て希望す是れ戰鬪の指揮上極めて緊要にして勝敗の分るゝ所と云ふも誣言に非されはなり

六、仄かに聞く所に據れは敵の捕虜の創痍を檢するに我砲彈に依りて負傷したるは極めて稀にして極端に云へは皆無なりと云ふ若し之をして信ならしめは是れ吾人の深く注意を要する所なり又砲彈の製造力上此度の會戰に於ても豐富なる豫備彈を有する能はす全軍の爲め僅かに十二、三萬を蓄ふるのみ故に砲彈は最大の注意を以て實行せられ緊要なる目標に向ては彈丸を集中し又好機に際しては猛烈なる發射を躊躇せさると同時に一發たりとも無効の彈を發射せさる樣留意あらんことを切望す沙河會戰の結局の如く彈藥に缺乏を訴へたる爲に果敢なる戰局を結ふ能はさる如きことあらは吾人は無益の戰鬪を交へたるの責を免る能はす

七、以上の諸件は固より諸君の疾く注意せらるゝ所なるへしと雖も玆に區々の微

裏を逃ふることを敢てする所以は百尺竿頭一歩を進め此重要なる會議の好果を獲んと欲するに外ならす諸君請ふ之を諒せよ

明治三十八年二月廿日　滿洲軍總司令官侯爵　大山巖

二月廿五日第一大隊（第三、第四中隊欠）は騎兵第二旅團支援隊として大分に至り騎兵第二旅團長の指揮下に入る

第十節　奉天方面

明治三十七年十月沙河會戰以來滿洲軍の主力は沙河を夾んで近く敵と相對し鋭を蓄て動かさること約五ヶ月此間三十八年一月下旬黑溝臺附近の大會戰あり又南方に於ては三十八年一月元旦旅順の開城を見るに至り爾後第三軍は北進して二月下旬小北河附近に開進を了り又新に編成せられたる鴨綠江軍は清河城方面の敵と觸接するに至り茲に一大決戰開始の機運漸く熟し第一軍は廿四日より第二、第三軍は二月廿七日より運動を開始す

第三軍は渾、遼、兩河間の地區より前進し敵の右側背に向て運動をなす其作戰目標を奉天西北方馬三家子に取り先つ小勒民屯大民屯の線に向ひ前進す

二月廿七日第一師團は四縱隊となり三月一日西對頭灣出發より彈藥、携帶口糧其他必要品のみを携帶輕裝し連日急行軍を以て敵騎を擊退しつゝ前進す

三月四日軍は奉天停車場田義屯の線に向て前進中第九、第七師團は午後一時頃楊子屯、千洪屯、牛心屯の線に在り堅固なる敵の陣地に衝突し直に之を攻擊せしも奏効するに至らすして日沒となり諸隊は現狀を維持して夜を徹す

師團は敵に遭遇することなく大石橋附近に達し同地に宿營す

三月五日聯隊は昨四日の姿勢に在りて近く敵と相對す夜一時師團本隊の先頭に在りて出發午前四時廿分聯隊本部及第三大隊は郝家子に第一、第二大隊は兩塞家子に達し六日揚馬廠に宿營す

三月七日聯隊は師團の總豫備となり午前六時十五分急行軍を以て午後三時五臺子に開進す

是より先き第五中隊は董家屯附近より師團の右側衛として高力屯方向に派遣せられ董家屯南方部落に於て敵情偵察中第二大隊は師團命令により第五中隊に增加し八家子に在りし小數の敵歩兵を驅逐し該地を守備す

師團命令に依り該地の守備を歩兵第十五聯隊に讓り午後九時歸還す

三月八日聯隊は師團本隊となり五臺子を出發田義屯に至り師團總豫備隊となる午後二時三臺子及「ウアンチユレッン」中間丘阜の西北方約四五百米突附近に前

進すべき命を受く

砲火の損害を減少する爲め一中隊つゝ大間隔に散開し約百米突の距離を以て逐次前進す村端を離るゝや敵の猛烈なる榴霰彈と小銃火の爲め死傷續出し終に遮蔽物なき平坦なる畑地に伏臥して日没を待つの餘儀なきに至れり各兵は器具を以て堀開せるも地面氷結作業困難を極め僅かに頭部を掩ふに過ぎざる小掩體を成形せるのみ爾後一分隊毎の躍進を以て漸く豫定の位置に至る該地に於て左翼隊長中村少將の指揮下に入る

同夜「ウアンチユレツン」北方森林西端を界して右翼第二聯隊に連繫し左翼地區を守備し戰鬪隊形の儘夜を徹す夜寒凛烈食するに湯なく水なく只黑燒パンを以て飢を凌き畑中に踞座して天明を待てり

一、田義屯の戰鬪

三月九日師團は天明を待ち師團砲兵の全力を以て先つ三臺子を砲擊し右翼隊を以て之を攻略し尋て「ウアンチンツン」を砲擊し左翼隊を以て攻略するに決す朝

來烈風砂塵を捲き午後に至りて益々加はり殆んど咫尺を辨せす諸團隊の戰鬪動作頗る難澁を極む

聯隊は第三大隊を豫備隊とし第一線左翼後に位置せしめ砲戰の效果を待つ午前九時大隊長の指揮する一部隊を三臺子附近に在る敵の右側背に運動せしめ右翼隊の三臺子攻擊を援助すへき命あり第二大隊長小出少佐部下三中隊を以て丘阜附近より前進したるも三臺子東北方「ウアンキユレツン」西南方附近より猛烈なる敵の集注火を受け前進頗る困難を極む

午前十時頃「ウアンキユレツン」附近の敵漸次增加の情況あり後備旅團は步兵第二聯隊の左翼方面より鐵道線方向に前進せしも潰亂して退却を始め優勢の敵は之を尾追し來るや步兵第二聯隊の左翼方面動搖の狀あり聯隊の豫備隊たる一中隊を該方面に差遣し友軍の收容に任し敵の前進を極力拒止せしめしも漸次混亂退走し來れり

第六中隊を急遽前進せしめ敵の左翼を脅威せしめたるも該方面にも壓迫し來り第二大隊長小出少佐負傷し將校以下死傷續出し戰況更に發展を見す午後一時

半頃に至り優勢なる敵兵俄然塵煙中に現出し左翼砲兵陣地に向て逆襲し來り該地附近の後備歩兵旅團は苦戰の後退却を始む

第一線第三、第四中隊は其位置を固守し豫備隊たる第三大隊の三中隊も該方面に展開し射撃を以て敵の迫撃を阻止す然るに敵は我左側にありし友軍を撃退せし勢に乘し益々前進を續行し死傷續出大隊長淺村少佐負傷し第十二中隊長蜂須賀大尉之に代りて指揮し苦闘の後敵を逆襲して舊位置に恢復す退却せし中隊は漸次集結し來り辛ふして全線舊姿勢を保持するを得たり

午後四時頃再ひ優勢の敵逆襲し來る其兵力約一師團半にして遠く我兩翼を壓迫包圍し來り苦戰の後遂に第二線に退却す

豫備隊たる第九中隊及第二聯隊の一部之を收容せり丘阜附近に在りし第二大隊及第三第四中隊は鋭意奮戰辛ふして其位置を固守するを得たり一時前面の敵は退却したるものゝ如くなりしも少時にして更に兩翼を延長して壓迫し來り苦戰奮闘頗る力めたるも敵の再三の逆襲に戰員の過半を喪ひ敵二三百米突に迫るや旅團長の命令に依り田義屯に退却し漸く該村圍壁に固着し頑守し敵と相對して日沒に至る

露軍の狀況を按するに「クロパトキン」大將は渾河左岸の陣地を縮少し第二軍の主力を悉く渾河に移し其他西方地區に集合し得たる一切の兵力を擊け我第三軍に對し五日を期し斷然攻勢に轉するの企圖を有せしも其實行挫折し此間第三軍の包圍益進捗し愈退路の危險を感じ七日夜暗に乘じ其第一第三軍を渾河河畔に退却せしめ且此方面より歩兵五十六大隊を抽きし奉天北方に集め軍の左翼に向ひ更に大逆襲を企圖せしも混雜の際命令行はれすを得ず遂に集め得たる十六大隊半を以て九日朝より曙烟を冒し田義屯に向ひ逆襲を行ひしなり

三月十日聯隊は文官屯の敵を撃退し午後七時同村を占領し「ウアンキユンツン」に宿營す十一日八家子に着隊し整理をなし且北方に對して警戒す十三日より四月十二日に至る間黨家窩棚附近を守備す

戰死　大尉久田國義　同中岡保蒼　同宗像重吉　同伊達新一
　　中尉栗原政義
　　特務曹長並木馬藏　同久江瑾四郎　同木村啓次郎　同林　新之助
　　下士以下二二二名

負傷　大尉安藤金三郎　同永田　茂　同蜂須賀喜信　同坂部正健
　　少尉大智恒一　同佐藤一馬　同熊田秋之助　同阿部六郎

三等軍醫荒武本二
特務曹長福田道太郎　同早乙女權次郎　同佐藤武藏
同伊藤喜代藏　同森德之助
少佐小出六郎　同淺村安直
中尉赤尾開治　同横山信毅
少尉黑崎貞三郎　同松平修吉　同中島　武　同澤登鎌司
特務曹長秋好安吉　同片倉龜吉　同山寺吉之助　同森　淺次郎
同有元轍三郎　同玉置佐一　同長岡爲次　同黑羽松藏
下士以下六八八名
消耗彈藥　一七三、一七七發

二、騎兵第二旅團支援歩兵第一大隊（二中隊缺）の情況

奉天に向て北進途上二月廿五日大隊は騎兵第二旅團の支援として大分山に至り騎兵第二旅團長の指揮下に入る

廿七日該騎兵團は軍の左側を掩護し遠く敵情を搜索するの目的を以て行動を起し遼河右岸に移り同日大達蓮泡に廿八日小楡樹子に三月一日大民屯に二日曹家臺に至る

三日同騎兵團は支隊長秋山少將の指揮下に入る同日大隊は午前八時三十分支隊本隊に在りて曹家臺を發し小房身を經て午前十一時大房身に達す

支隊の前衛たる騎兵第十四聯隊は板橋附近より前進する敵と徒歩戰し午前十一時三十分に至り敵は漸次我両翼を包圍し殊に我左翼に迂回せし敵の兵力は歩兵約一個旅團に上れり依て歩兵第一中隊を該方面に派遣し第二中隊の一小隊を騎兵第十四聯隊の方面に增加し正面の敵に當らしむ尋て約三中隊の敵歩兵は我右翼砲兵陣地に向て攻擊し來りたるを以て第二中隊の一小隊を增加す

左翼方面の敵は續々前進し其兵力頗る優勢となり各方面共防守頗る力む午後四時に至り左翼方面の敵漸次退却すると共に次に右翼方面退却を始めたり依て猛烈なる追擊射擊を加へ多大の損害を與へしも正面の敵は頑强にして屢々突擊を試んとせしも我銃砲火の爲に挫折せられ夜に至て退却す我に向て攻擊し來り